

平成 29 年度 ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書

試掘調査

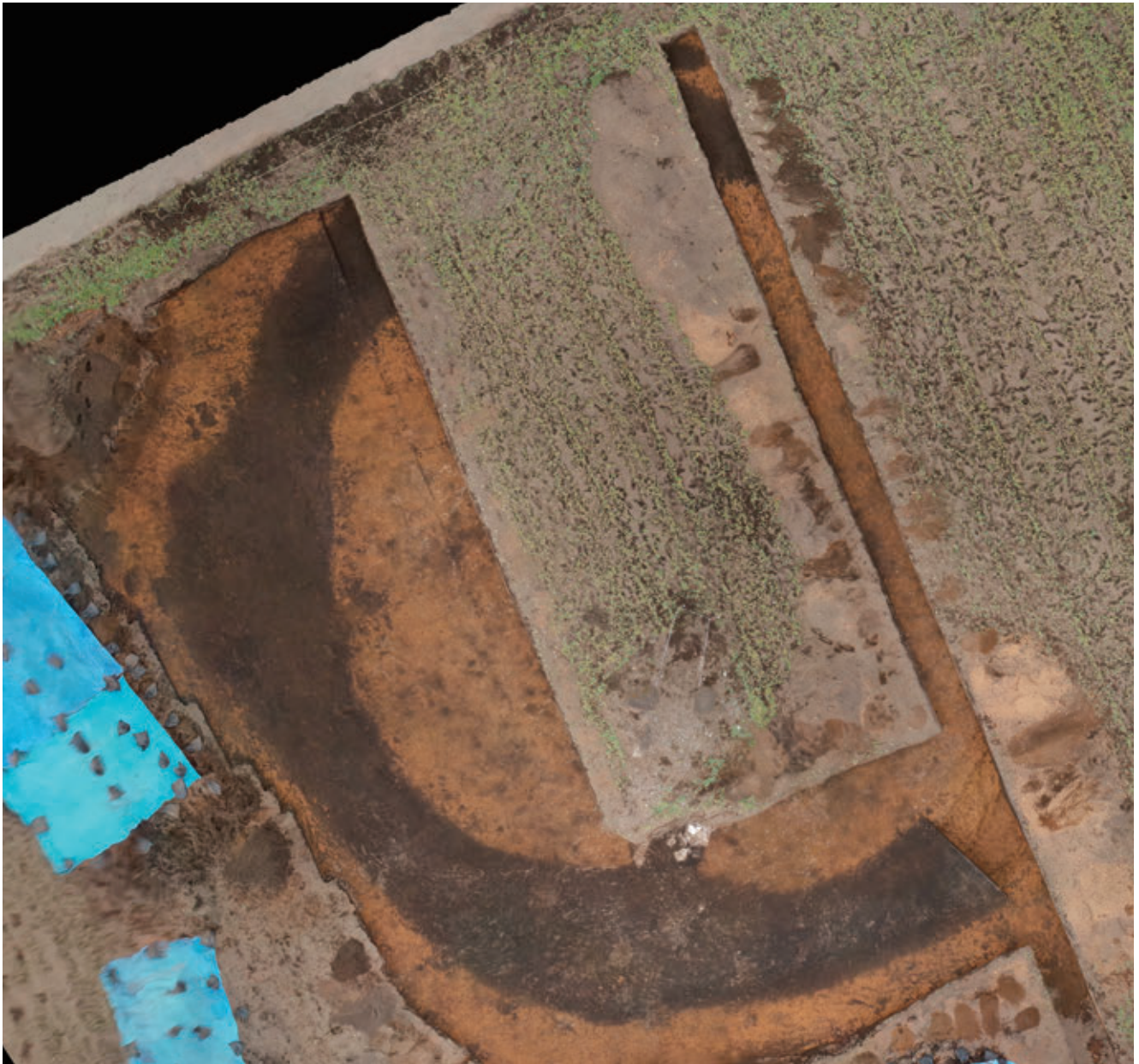
宮前遺跡（第 3 次）
雷土 B 遺跡（第 2 次）
三反田遺跡（第 6 次）
指渋遺跡（第 3 次），下原遺跡（第 4 次），虎塚古墳群（第 11 次）
君ヶ台遺跡（第 11 次）
赤坂遺跡（第 3 次）
高野富士山遺跡（第 9・10 次）
市毛上坪遺跡（第 17・18 次）
本郷東遺跡（第 6 次）
野沢前遺跡（第 2 次）
柴田遺跡（第 5 次）
岡田遺跡（第 30 次）
金上向山遺跡（第 3 次）
市毛下坪遺跡（第 13 次）
黒袴遺跡（第 6 次）
本郷西遺跡（第 1 次）
三反田古墳群（第 2 次）
宿ノ内遺跡（第 4 次），西中根遺跡（第 4 次）

本調査

勝倉若宮遺跡（第 5 次）

2018

ひ た ち な か 市 教 育 委 員 会
公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社



1 虎塚古墳群第5号墳周溝



2 虎塚古墳群第5号墳周溝土層断面



3 虎塚古墳群第5号墳石室（ピンポールが石材位置を示す）

序 文

ひたちなか市は関東平野の北端部にあたり、茨城県の中央部からやや北東に位置し、那珂川河口部左岸の人口約 16 万人の街で、県都水戸市に隣接しています。標高 30 m 前後の起伏の少ない平坦な台地で、台地を浸蝕して那珂川やその支流の中丸川等の小河川が流れています。これらの河川の流域や台地上には、肥沃な田畑や宅地などが広がっています。

当市の東側は太平洋に面して約 13km の海岸線が続き、那珂川などの河川流域の台地上は、原始・古代から人々の生活の場として栄え、3 百数十箇所の集落跡・古墳・城館跡などの遺跡が確認されています。

このなかでも、装飾壁画で知られる国指定史跡虎塚古墳は、市を代表する遺跡として多くの市民に知られております。また、隣接する十五郎穴横穴墓群は近年確認調査が行われ、総数は 500 基を超すと考えられる東日本最大級の横穴墓群であることが判明しました。今年度は未開口横穴墓からの出土遺物が市文化財に指定されるなど、これらの今後の保存と活用が期待されております。

このように、ひたちなか市は全国に誇れる文化遺産に恵まれる一方、毎年住宅等の開発行為が活発に行われており、やむを得ぬ理由で失われていく遺跡の記録保存を図るため、事前に確認調査等を実施しております。

今年度も、ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に委託し、埋蔵文化財包蔵地内において 21 件の調査を実施いたしました。本書はこれらの確認調査等の記録をまとめたものであり、それぞれの調査は小規模なものではありますが、毎年の調査の積み重ねにより、多くの成果を得ることができました。

最後になりますが、快く調査のご承諾をいただきました地権者や、調査に参加されました皆様に感謝申し上げますとともに、調査や本書の作成にご指導、ご協力を頂きました関係各位の皆様にも心から感謝申し上げます。

平成 30 年 3 月

ひたちなか市教育委員会
教育長 木下 正善

例 言

- 1 本書は、平成29年度国費補助事業として、ひたちなか市教育委員会の委託を受けて、公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社が実施したひたちなか市内の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書は、平成29年1月から12月にかけて実施した発掘調査についての報告であり、宮前遺跡、雷土B遺跡、三反田遺跡、指洪遺跡、下原遺跡、虎塚古墳群、君ヶ台遺跡、赤坂遺跡、高野富士山遺跡、市毛上坪遺跡、本郷東遺跡、野沢前遺跡、柴田遺跡、岡田遺跡、金上向山遺跡、市毛下坪遺跡、黒袴遺跡、本郷西遺跡、三反田古墳群、宿ノ内遺跡、西中根遺跡の計21遺跡について、20件の試掘・確認調査を実施し、勝倉若宮遺跡の1件について本調査を実施した。調査期間等は2頁一覧表のとおりである。なお、指洪遺跡、下原遺跡、虎塚古墳群は、中根の荒谷地区の畑地帯総合整備事業に伴う試掘調査であり、今回は平成27～29年度の3か年調査計画の第2年度の調査報告である。
- 3 発掘調査および整理報告は、ひたちなか市教育委員会文化財室の指導のもとに、公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社の文化課文化財調査事務所が実施したものであり、組織は次のとおりである。

理 事 長	永盛 啓司	
副 理 事 長	木下 正善	
常 務 理 事	鈴木 隆之 横須賀 重夫	
次 長	大和田 幸治	
理 事	杉山 和子 大和田 健 綱川 正 永井 喜隆 鈴木 一成 加藤 恭子 須藤 雅由	
監 事	武藤 猛 安 智範	
文 化 課 文化財調査 事務所	参 事 兼 課 長	西野 均
	副 参 事 兼 所 長	鈴木 素行
	課 長 補 佐	佐々木 義則
	係 長	稲田 健一
	嘱 託	菊池 順子

- 4 発掘調査の従事者は次の通りである。
調査員：佐々木義則
調査補助員：海老原四郎、岡野政雄、助川諒、坪内治良、廣水一真、矢野徳也、渡辺恵子
- 5 整理作業及び本書の作成に従事したものは、次の通りである。
青木千歌子、稲田健一、海野美信、榎澤由紀江、小貫栄子、海後晴美、菊池順子、桐嶋美子、後藤みち子、佐々木義則、佐藤富美江、鈴鹿八重子、鈴木素行、中嶋順子、西野陽子、矢野徳也
- 6 本書は、佐々木義則が編集した。
- 7 本書の執筆と分担は以下のとおりである。
鈴木素行（弥生時代以前の遺物）、稲田健一（古墳時代の遺物）、矢野徳也（岩石同定）、佐々木義則（左記以外）
- 8 発掘調査の出土資料は、ひたちなか市埋蔵文化財調査センターで一括保管している。
- 9 本書の作成にあたっては、次の方々に御協力を賜った。記して感謝の意を表する次第である。（50音順・敬称略）
青木孝浩、飯村清一、飯村透、飯村まゆみ、磯崎透、磯崎全利、打越正一、打越文雄、海野みつ江、浦野幸子、江幡孝、大須賀尋司、大森義信、鴨川理、川又春信、川又みつ、久野真理子、栗田智昭、黒澤元博、軍司充規、小松崎芳信、鈴木英一、住谷一雄、関戸智矢、高沢学、立原徳次、蓼沼香未由、照沼恵、塙健一、半澤匡亮、平野智明、三木武夫、宮永義和、武藤雄一、安晃司、安富生、安智久、安三代、安暢一郎、安由美子、安義隆、大洗町教育委員会、(株)アーネストワン、(株)アーバンハウジング、(株)NTTドコモ、(株)鴨川建材、東京ガス(株)、日本サンエイ(株)、(株)ねぼけ、山方自動車(株)
- 10 事務局は、ひたちなか市教育委員会総務課文化財室内に置き、組織は次のとおりである。

総 務 課 文化財室	課 長	湯浅 博人
	文 化 財 室 長	千葉 美恵子
	主 事	照沼 沙保里

目次

I	概要	1	(1) 第2次調査報告 36	
II	試掘調査報告	3	18 宿ノ内遺跡, 西中根遺跡	36
1	宮前遺跡	3	(1) 宿ノ内第4次・西中根第4次調査報告 36	
(1)	第3次調査報告	3		
2	雷土B遺跡	3		
(1)	第2次調査報告	3		
3	三反田遺跡	6		
(1)	第6次調査報告	6		
4	指波遺跡, 下原遺跡, 虎塚古墳群	8		
(1)	指波遺跡第3次・下原遺跡第4次・虎塚古墳群第11次調査報告	8		
5	君ヶ台遺跡	23		
(1)	第11次調査報告	23		
6	赤坂遺跡	23		
(1)	第3次調査報告	23		
7	高野富士山遺跡	24		
(1)	第9次調査報告	24	(2) 第10次調査報告	24
8	市毛上坪遺跡	27		
(1)	第17次調査報告	27	(2) 第18次調査報告	28
9	本郷東遺跡	28		
(1)	第6次調査報告	28		
10	野沢前遺跡	29		
(1)	第2次調査報告	29		
11	柴田遺跡	30		
(1)	第5次調査報告	30		
12	岡田遺跡	30		
(1)	第30次調査報告	30		
13	金上向山遺跡	32		
(1)	第3次調査報告	32		
14	市毛下坪遺跡	32		
(1)	第13次調査報告	32		
15	黒袴遺跡	34		
(1)	第6次調査報告	34		
16	本郷西遺跡	35		
(1)	第1次調査報告	35		
17	三反田古墳群	36		
III	本調査報告	41		
1	勝倉若宮遺跡第5次調査報告	41		
IV	東中根遺跡群における弥生時代後期「東中根式」の集落跡について(下)	46		
	写真図版			
	報告書抄録			
	奥付			

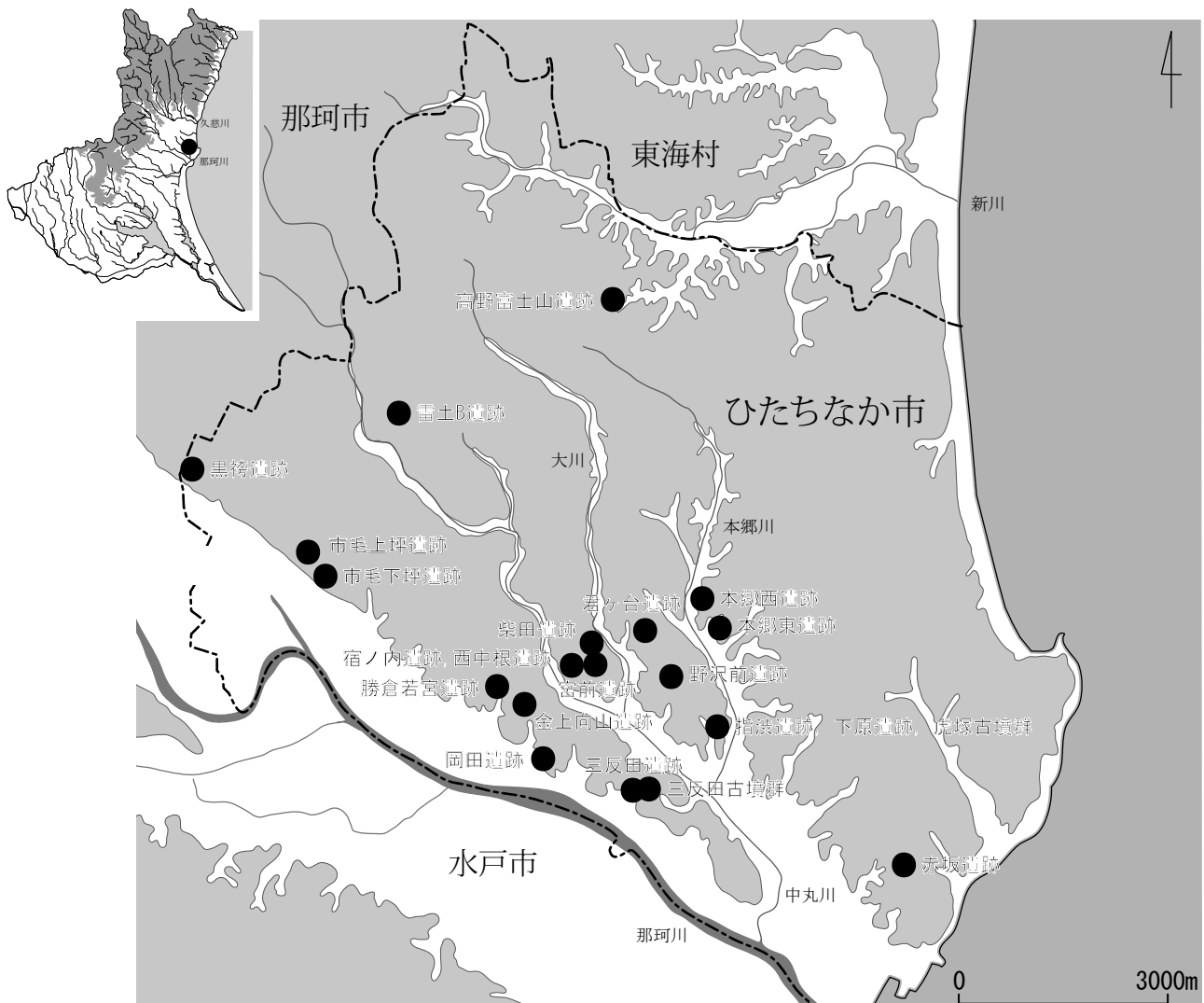
I 概要

ひたちなか市は、茨城県の中央部に位置し、面積 99.93 km²、人口約 15 万人を擁する地方中心都市である。市域南側を東流する那珂川は栃木県那須岳に源を発し、茨城県のほぼ中央部を東西に横断し太平洋へと注ぐ全長 150km の河川であり、古くから流域の文化形成に大きな役割を果たしてきた。本市は、この那珂川河口左岸域に位置する。市域は那珂川の支流である中丸川・大川・本郷川により開析され、小支谷が発達する。市域の北側を東流する新川付近の低地は、近世まで真崎浦という入り江であったが、現在は広く水田化され、東海村との境となっている。

現在市内には、約 300 か所以上の遺跡が所在する。市域では昭和 30 年ごろから都市化が進み、周知遺跡内

における個人住宅建設件数も増加の一途をたどり、そうした事態に対応すべく、昭和 54 (1979) 年から、国・県の補助を受け、市教育委員会を主体とした市内遺跡発掘調査事業を継続して実施してきた。市内遺跡発掘調査は市内各地で実施されてきたこともあり、市域の埋蔵文化財の全体的状況を知る上で、その調査の成果は貴重な資料となっている。

平成 20 年度から、市内遺跡発掘調査は市教育委員会から財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社（現公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社）に委託されるようになり、公社が主体となり実施されるようになった。平成 29 年は、21 カ所の遺跡において試掘調査 20 件、1 カ所の遺跡において本調査 1 件が実施され、虎塚古墳群における第 5 号墳の周溝確認や、勝倉若宮遺跡における古墳時代後期住居跡の調査等の成果を得ている。



第 1 図 調査遺跡の位置

第1表 平成29年市内遺跡発掘調査一覧

No.	遺跡名	調査 回数	所在地	調査期間	調査原因	調査 種別	対象 面積	調査 面積	主な遺構	主な遺物
1	みやまえいせき 宮前遺跡	3次	中根字宮前 2752 番 4, 5	1月24～25日	個人住宅	試掘	433㎡	23㎡	土坑3基, 溝1条	なし
2	いかさびーいせき 雷土B遺跡	2次	田彦字雷土 1453 番 1	3月7～10日	集合住宅	試掘	974㎡	22㎡	なし	縄文土器
3	みたんだいせき 三反田遺跡	6次	三反田字羽黒 3044 番 1 外 4 筆	3月13～18日	新校舎建築	試掘	26,000㎡	48㎡	住居跡1基(古墳), 溝跡3条, 土坑1基	縄文土器, 土師器, 須恵器, 土製品
4	さしづいせき 指波遺跡 しもはらいせき 下原遺跡 とらがきふかひん 虎塚古墳群	3次 4次 11次	中根 1503 番外 16 筆	12月16日～ 3月24日	畑地整備	試掘	42,800㎡	1,524㎡	多角形墳(もしくは円墳)1基, 住居跡5基(縄文3, 古墳2), 溝2条, 土坑8基(縄文2), ビット1基	縄文土器, 弥生土器, 土師器, 須恵器, 土製品, 石器
5	きみがたていせき 君ヶ台遺跡	11次	中根字新堀 2337 番外 5 筆	4月4～7日	集合住宅	試掘	698㎡	48㎡	住居跡1基(奈良)	土師器, 須恵器
6	あかたかいせき 赤坂遺跡	3次	鶴代 12233 番	4月12～14日	個人住宅	試掘	499㎡	22㎡	溝1条	なし
7	こうやふじやまいせき 高野富士山遺跡	9次	高野字清水頭 1293 番 3	4月18～21日	個人住宅	試掘	232㎡	26㎡	なし	土師器, 須恵器
8	いちげかみつぼいせき 市毛上坪遺跡	17次	市毛字上坪 1143 番 1	5月23日～ 6月1日	事業用車庫	試掘	1041㎡	34㎡	住居跡2基(古墳2)	土師器
9	かつくわかみやいせき 勝倉若宮遺跡	5次	勝倉字地藏根前 2700 番 14, 15	5月29日～ 6月2日	個人住宅	本調査	343㎡	63㎡	住居跡2基(古墳1, 平安1), 土坑1基, ビット1基	縄文土器, 弥生土器, 土師器, 須恵器, 石器, 鉄製品
10	ほんごうひがしせき 本郷東遺跡	6次	馬渡字本郷東 3774 番	6月13日	個人住宅	試掘	287㎡	19㎡	なし	なし
11	のぼろまゐいせき 野沢前遺跡	2次	中根字原 1839 番 6, 11	7月6～7日	個人住宅	試掘	250㎡	17㎡	住居跡1基(平安1), 土坑1基	弥生土器, 土師器, 須恵器
12	しばたせき 柴田遺跡	5次	中根字柴田 5221 番 1, 12, 13	8月22日～ 25日	宅地造成	試掘	900㎡	80㎡	土坑1基	なし
13	おかだせき 岡田遺跡	30次	三反田字北長町 3659 番 10	8月22日～ 24日	個人住宅	試掘	225㎡	3㎡	なし	なし
14	かねあげむかいやまいせき 金上向山遺跡	3次	三反田字金上境岡田 3632 番・3655 番 合併の一部	9月12日～ 20日	集合住宅	試掘	998㎡	109㎡	住居跡1基(平安)	土師器, 須恵器, 石器
15	いちげしもつぼいせき 市毛下坪遺跡	13次	市毛字本郷坪 440 番 6 の一部	9月26日～ 10月3日	集合住宅	試掘	899㎡	46㎡	住居跡4基(古墳3, 平安1)	弥生土器, 土師器, 須恵器
16	くろばかまいせき 黒袴遺跡	6次	津田字西原 3372 番 2, 3368 番 4	10月10日～ 12日	個人住宅	試掘	447㎡	16㎡	なし	なし
17	ほんごうにしせき 本郷西遺跡	1次	馬渡字本郷西 3651 番 1	11月7～8日	携帯電話アンテナ基地	試掘	369㎡	34㎡	なし	なし
18	いちげかみつぼいせき 市毛上坪遺跡	18次	市毛字上坪 1194 番 1	11月14～15日	個人住宅	試掘	240㎡	16㎡	住居跡3基(平安2, 時期不明1)	縄文土器, 土師器, 須恵器
19	こうやふじやまいせき 高野富士山遺跡	10次	高野字富士山 1728 番 2, 3	11月21～ 12月2日	ガス管敷設工事, ガス遮断施設建設	試掘	5,596㎡	334㎡	住居跡3基(古墳～奈良3), 溝1条	土師器, 須恵器, 石器
20	みたんだごふんぐん 三反田古墳群	2次	三反田字天王前 4555 番 1	12月5～15日	建設資材置場整備	試掘	1,725㎡	33㎡	長方墳1基	なし
21	しほくのうちせき 宿ノ内遺跡 しなかねいせき 西中根遺跡	4次 4次	中根字宿ノ内 5057 番 5	12月19～20日	個人住宅	試掘	539㎡	38㎡	住居跡1基(古墳)	土師器, 須恵器

II 試掘調査報告

1 宮前遺跡

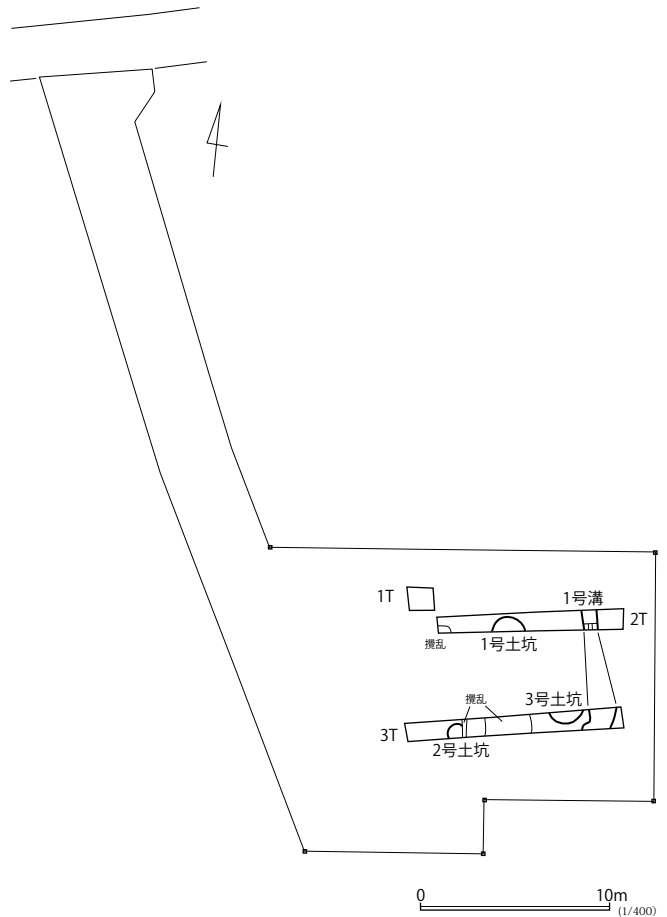
(1) 第3次調査報告

調査地は、大川低地から西方に入り込む小支谷の縁辺に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は荒地であった。調査は3カ所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.6～0.7mを測る。調査の結果、溝1条、土坑3基を確認した。土坑の一部掘り込みも実施したが、出土遺物がないため時期は不明である。土坑の覆土は硬い。遺物の出土はなかった。

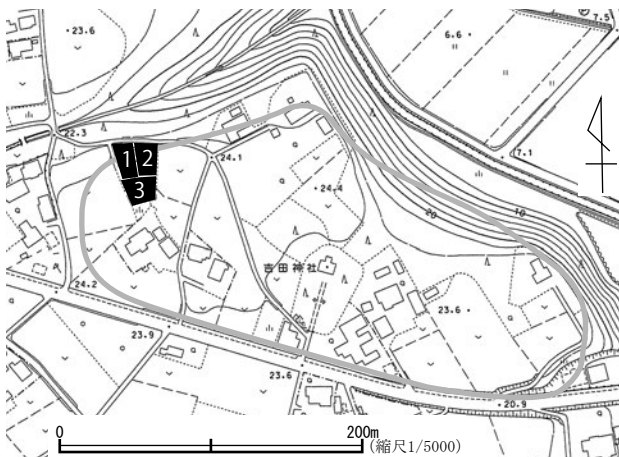
2 雷土B遺跡

(1) 第2次調査報告

調査地は、中丸川低地を望む台地縁辺部に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は畑地であった。調査は2カ所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.3～0.5mを測る。調査の結果、遺構は確認されなかった。遺物は縄文土器が出土している。



第3図 宮前遺跡第3次調査区



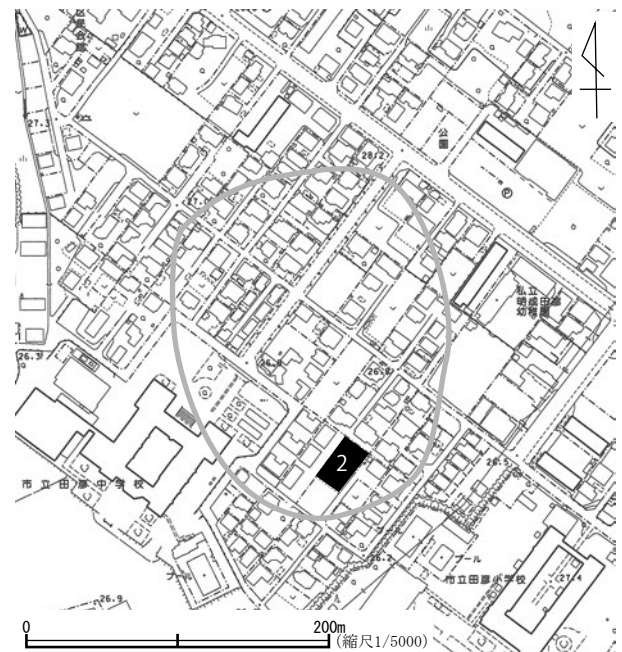
第2図 宮前遺跡の調査地点 (数字は調査回数)

第1表 宮前遺跡調査一覧

次	調査年	調査主体	調査種別	遺構	文献
1	2016	公社	試掘	土坑4, ビット1	1
2	2016	公社	試掘	土坑1	1

文献

- 1 平成28年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書

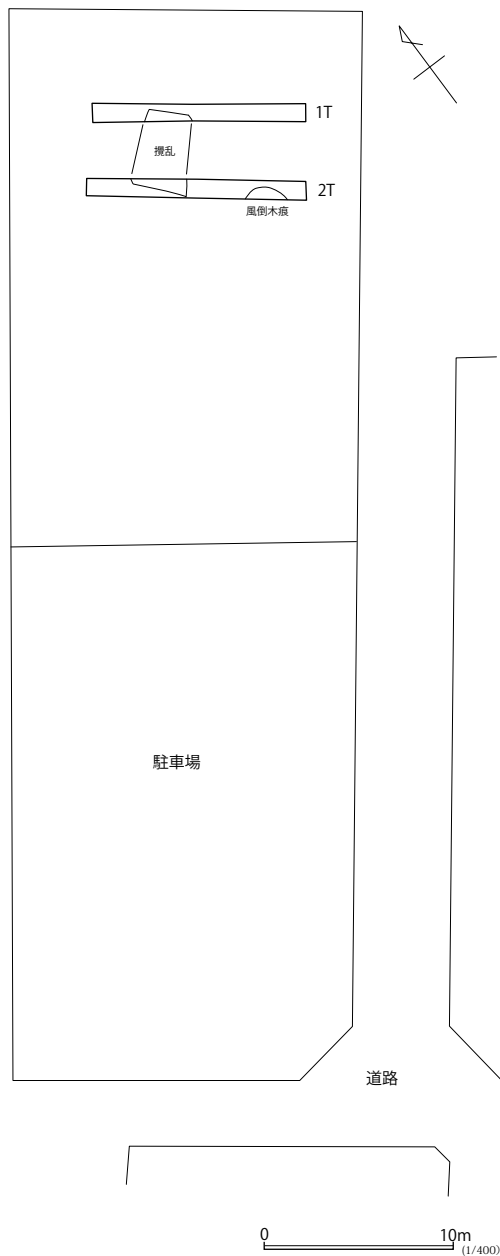


第4図 雷土B遺跡の調査地点 (数字は調査回数)

遺物説明

第6図

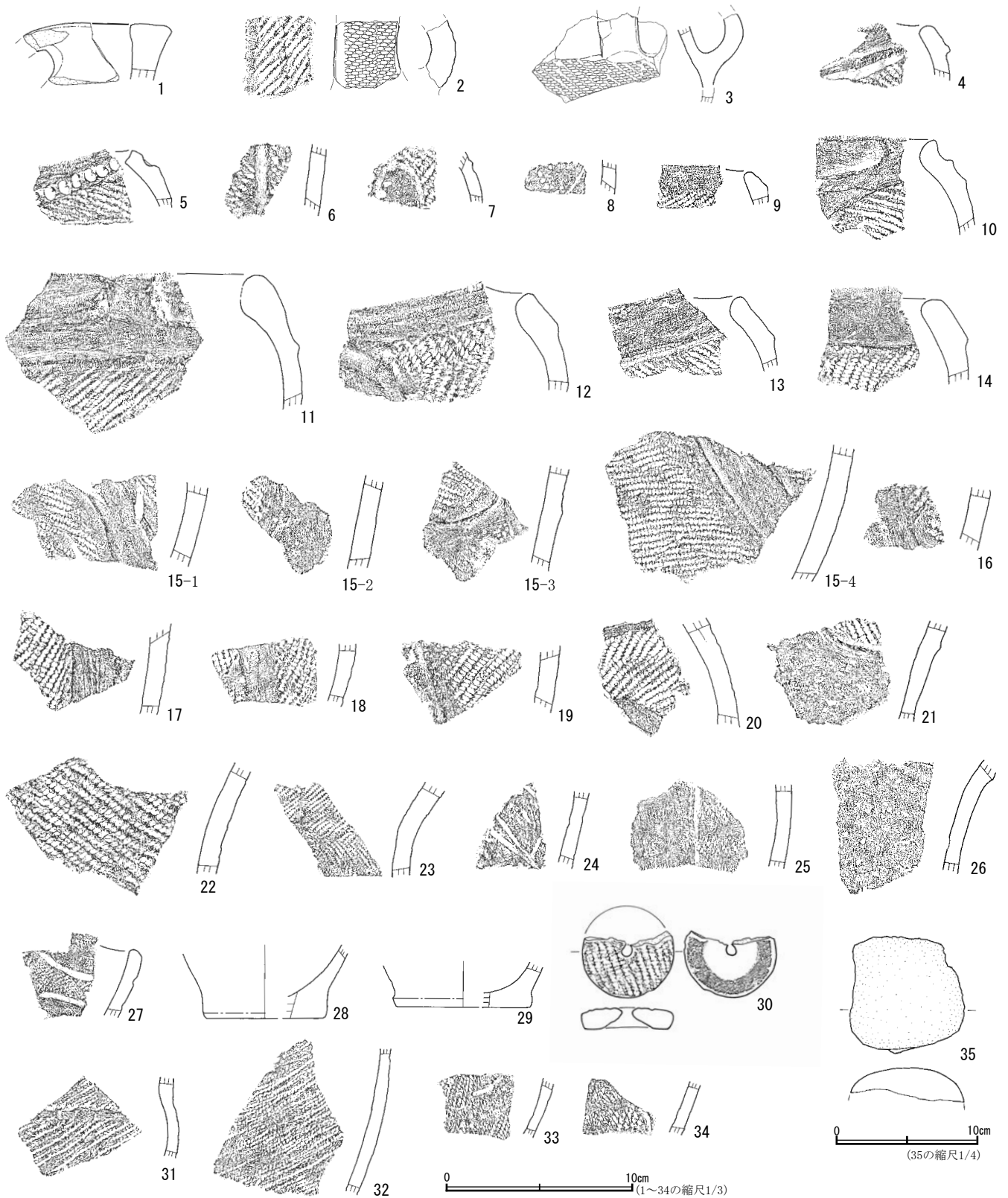
- 1 出土位置・注記：表採 時代時期：縄文時代中期（加曾利E式）器種：深鉢形土器把手部分



第5図 雷土B遺跡第2次調査区

- 2 出土位置・注記：2トレ 時代時期：縄文時代中期（加曾利E式）器種：両耳壺形土器の把手部分か 文様：単節斜縄文（RL）
- 3 出土位置・注記：表採 時代時期：縄文時代中期（加曾利E4式）器種：深鉢形土器 文様：単節斜縄文（LR）備考：橋状把手が付属する
- 4 出土位置・注記：表採 時代時期：縄文時代中期（加曾利E3式）器種：深鉢形土器 文様：単節斜縄文（RL）
- 5 出土位置・注記：1トレ 時代時期：縄文時代中期（加曾利E3式）器種：深鉢形土器 文様：刺突文，単節斜縄文（RL）備考：下端に沈線文の一部が残る
- 6 出土位置・注記：1トレ 時代時期：縄文時代中期（加曾利E3式）器種：深鉢形土器 文様：沈線文，単節斜縄文（LR）
- 7 出土位置・注記：1トレ 時代時期：縄文時代中期（加曾利E3式）器種：深鉢形土器 文様：沈線文，単節斜縄文（RL）
- 8 出土位置・注記：2トレ 時代時期：縄文時代中期（加曾利E式）器種：深鉢形土器 文様：沈線文

- 9 出土位置・注記：表採 時代時期：縄文時代中期（加曾利E4式）器種：深鉢形土器 文様：単節斜縄文（LR）
- 10 出土位置・注記：表採 時代時期：縄文時代中期（加曾利E4式）器種：深鉢形土器 文様：単節斜縄文（RL）
- 11 出土位置・注記：表採 時代時期：縄文時代中期（加曾利E4式）器種：深鉢形土器 文様：単節斜縄文（RL）備考：胎土に多量の金雲母を含む
- 12 出土位置・注記：表採 時代時期：縄文時代中期（加曾利E4式）器種：深鉢形土器 文様：単節斜縄文（RL）備考：胎土に多量の金雲母を含む
- 13 出土位置・注記：1トレ 時代時期：縄文時代中期（加曾利E4式）器種：深鉢形土器 文様：単節斜縄文（RL）
- 14 出土位置・注記：1トレ 時代時期：縄文時代中期（加曾利E4式）器種：深鉢形土器 文様：単節斜縄文（RL）備考：胎土に多量の金雲母を含む
- 15 出土位置・注記：表採 時代時期：縄文時代中期（加曾利E4式）器種：深鉢形土器 文様：単節斜縄文（LR）
- 16 出土位置・注記：1トレ 時代時期：縄文時代中期（加曾利E4式）器種：深鉢形土器 文様：単節斜縄文（RL）
- 17 出土位置・注記：表採 時代時期：縄文時代中期（加曾利E4式）器種：深鉢形土器 文様：単節斜縄文（RL）
- 18 出土位置・注記：表採 時代時期：縄文時代中期（加曾利E4式）器種：深鉢形土器 文様：単節斜縄文（RL）
- 19 出土位置・注記：表採 時代時期：縄文時代中期（加曾利E4式）器種：深鉢形土器 文様：単節斜縄文（RL）備考：胎土に多量の金雲母を含む
- 20 出土位置・注記：表採 時代時期：縄文時代中期（加曾利E4式）器種：深鉢形土器 文様：単節斜縄文（LR）
- 21 出土位置・注記：表採 時代時期：縄文時代中期（加曾利E4式）器種：深鉢形土器 文様：単節斜縄文（RL）
- 22 出土位置・注記：表採 時代時期：縄文時代中期（加曾利E式）器種：深鉢形土器 文様：単節斜縄文（LR）
- 23 出土位置・注記：表採 時代時期：縄文時代中期（加曾利E式）器種：深鉢形土器 文様：単節斜縄文（RL）
- 24 出土位置・注記：2トレ 時代時期：縄文時代中期（加曾利E式）器種：深鉢形土器 文様：沈線文（格子状か）備考：胎土に泥岩片を含む
- 25 出土位置・注記：1トレ 時代時期：縄文時代中期（加曾利E4式）器種：深鉢形土器 文様：単節斜縄文（RL）備考：器外面にネズミの齧り痕あり
- 26 出土位置・注記：1トレ 時代時期：縄文時代中期（加曾利E式）器種：深鉢形土器 備考：胎土に多量の金雲母を含む，器外面にネズミの齧り痕あり
- 27 出土位置・注記：表採 時代時期：縄文時代後期（称名寺式）器種：深鉢形土器 文様：沈線文，単節斜縄文（LR）備考：器外面に赤彩の痕跡，器外面にネズミの齧り痕あり
- 28 出土位置・注記：1トレ 時代時期：縄文時代中期（加曾利E式）器種：深鉢形土器 法量：底径66mm（残存率22%）
- 29 出土位置・注記：表採 時代時期：縄文時代中期（加曾利E式）器種：深鉢形土器 法量：底径72mm（残存率24%）
- 30 出土位置・注記：表採 時代時期：縄文時代中期（加曾利E式）器種：有孔土製円盤 法量：直径48mm，厚さ10mm，孔径5mm 重量：17.4g 備考：土器片利用，胎土に多量の金雲母を含む，周縁研磨
- 31 出土位置・注記：表採 時代時期：弥生時代 器種：甕形土器 文



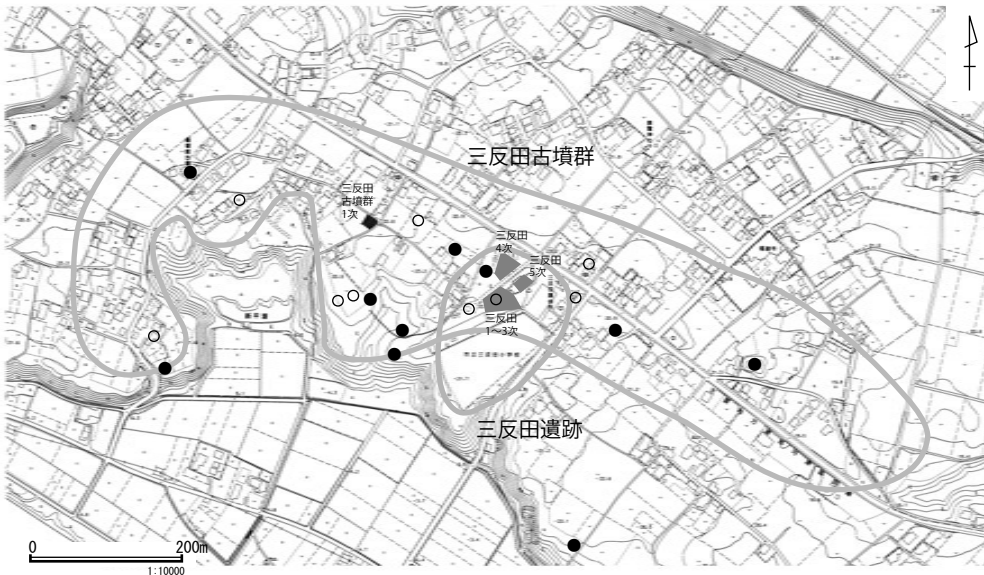
第6図 雷土B遺跡第2次調査区出土遺物

様：付加条縄文 (LR+2R) 備考：胎土に僅かな金雲母と骨針を含む，器外面に炭化物付着

32 出土位置・注記：表採 時代時期：弥生時代 文様：付加条縄文 (LR+R)

33 出土位置・注記：表採 時代時期：弥生時代 文様：付加条縄文 (LR+2R)

34 出土位置・注記：表採 時代時期：弥生時代 文様：付加条縄文 (LR+2R)



第7図 三反田遺跡・三反田古墳群の調査地点 (●は現存する古墳, ○は湮滅した古墳)

第2表 三反田遺跡調査一覧

次	調査年度	調査主体	調査種別	遺構	文献
1	1973	調査会	本調査	住居跡3 (古墳), 土坑5 (縄文1), 溝1	1・2
2	1977	調査会	本調査	住居跡2 (古墳), 古墳1 (円墳), 土坑4	2・3
3	1978	調査会	本調査	住居跡4 (古墳)	4
4	1984	調査会	本調査	住居跡5 (古墳), 土坑2, 溝5	5
5	1990	勝田市教委	本調査	住居跡5 (古墳), 溝2	6

文献

- 1 三反田遺跡
- 2 三反田遺跡 (一・二次)
- 3 三反田遺跡群調査報告書
- 4 三反田遺跡調査報告書 (第3次)
- 5 三反田遺跡調査報告書 (第4次)
- 6 三反田遺跡発掘調査報告書 (第5次)

35 出土位置・注記: 1トレ 時代時期: 縄文時代 器種: 磨石 法量: 長さ83mm, 幅81mm, 厚さ24mm 重量: 188.2g 備考: 焼痕 (黒化) あり

3 三反田遺跡

(1) 第6次調査報告

調査地は、三反田小学校敷地内であり、那珂川低地を望む台地縁辺から50mほど離れた場所に位置し、平坦な地形を呈する。調査は9か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。各トレンチにおける確認面までの深さは、1T: 2cm, 2T: 3cm, 3T: 0.5m, 4T: 0.3m, 5T: 0.7m, 6T: 1.1 ~ 1.3m, 7T: 1.7m以上, 8T: 1.7m以上, 9T: 0.3mであった。西部の

7・8トレンチは1.7mほど掘削しても確認面に至らなかったため、そのあたりは南西方向から入り込む埋没谷が存在するのであろう。調査の結果、遺構は、古墳時代前期の竪穴住居跡が1基、時期不明の溝3条・土坑1基が確認されている。遺物は、1号住居跡から古墳時代前期の土師器および土錘が出土した。調査区からは、縄文土器、土師器、須恵器が出土してい

る。

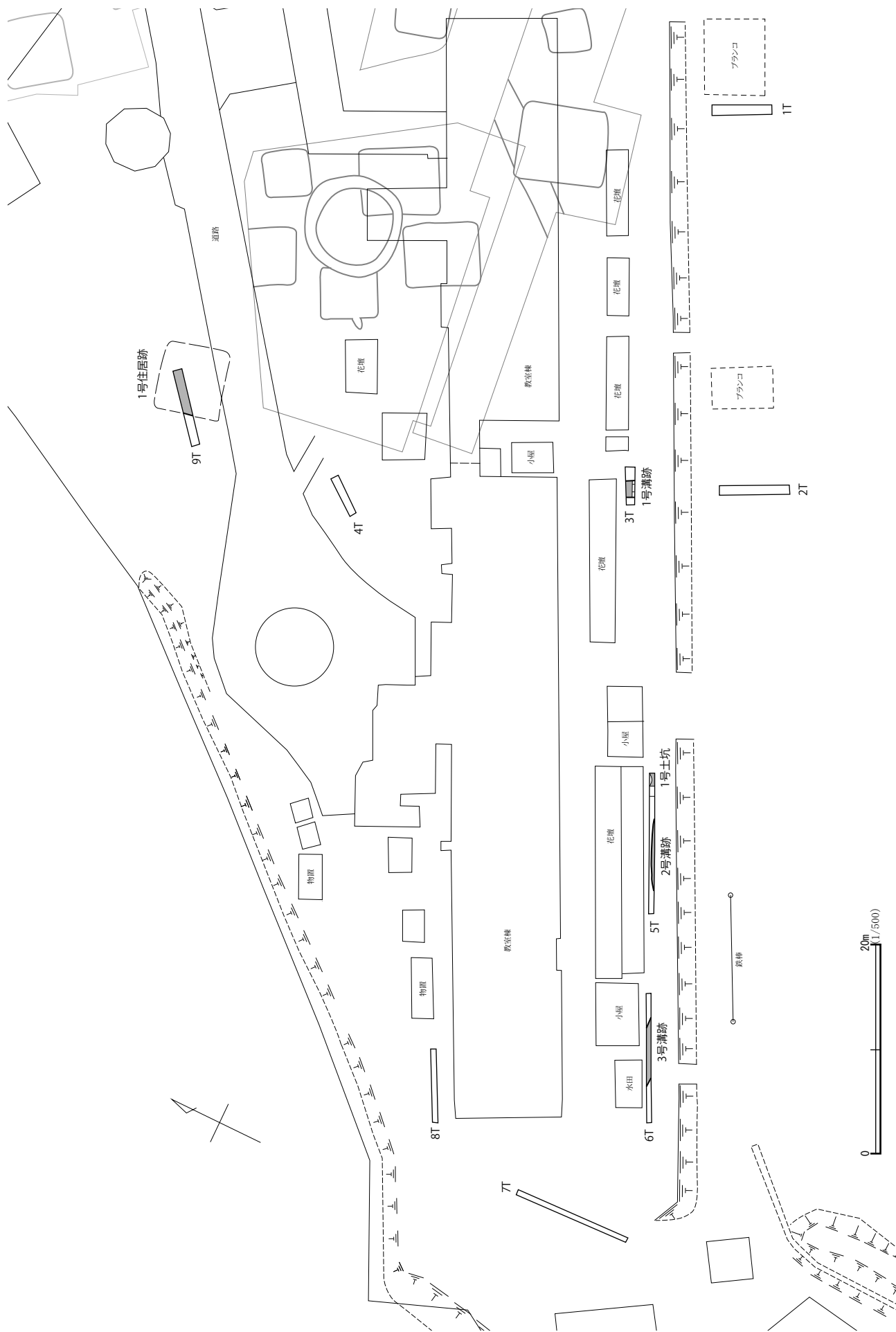
遺物説明

第9図

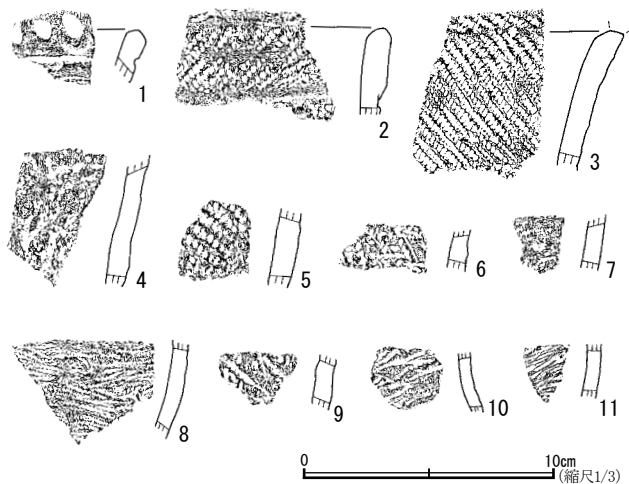
- 1 出土位置・注記: 4トレ 時代時期: 縄文時代前期 器種: 深鉢形土器 文様: 口唇部刻み (棒状工具), 平行沈線文 (半截竹管)
- 2 出土位置・注記: 5トレ 時代時期: 縄文時代前期 器種: 深鉢形土器 文様: 単節斜縄文 (LR), 胴部に細い隆帯の貼付あり
- 3 出土位置・注記: 6トレ 時代時期: 縄文時代前期 器種: 深鉢形土器 文様: 口唇部縄文, 単節斜縄文 (RL) 備考: 器内面に撫で調整の擦痕あり
- 4 出土位置・注記: 5トレ 時代時期: 縄文時代 器種: 深鉢形土器 備考: 器外面に発泡状の剥落あり
- 5 出土位置・注記: 3トレ 時代時期: 縄文時代 器種: 深鉢形土器 文様: 単節斜縄文 (RL) 備考: 器内面に炭化物付着
- 6 出土位置・注記: 5トレ 時代時期: 縄文時代 器種: 深鉢形土器 文様: 縄文 (原体不明)
- 7 出土位置・注記: 3トレ 時代時期: 弥生時代 文様: 付加条縄文?
- 8 出土位置・注記: 5トレ SD2 時代時期: 弥生時代 文様: 付加条縄文 (LR+R)
- 9 出土位置・注記: 9トレ 1住 時代時期: 弥生時代 文様: 付加条縄文 (RL+L?)
- 10 出土位置・注記: 5トレ SD2 時代時期: 弥生時代 文様: 付加条縄文 (R-S)
- 11 出土位置・注記: 5トレ SD2 時代時期: 弥生時代 文様: 反撚り縄文 (LL)

第10図

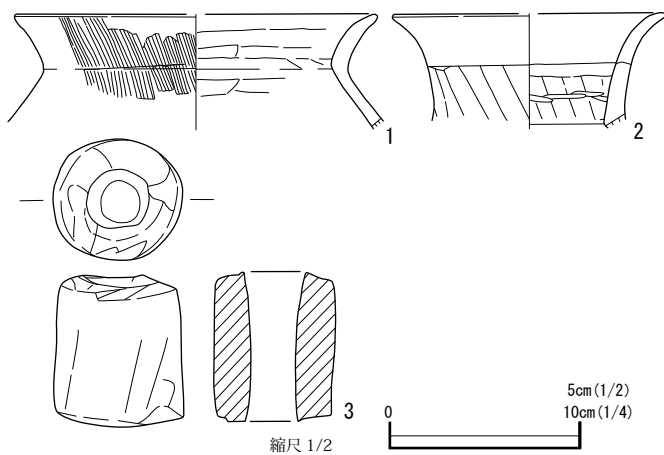
- 1 台帳: 9トレ 材質: 土師器 器種: 甕 残存: 口縁~胴部上位 20% 法量: 口径 (19.0), 器高 (6.1) 色調: 外面黒褐色, 内面にぶい黄橙色 胎土: 礫 (白微), 砂 (白多, 透多, 黒少) 焼成: 良好 技法等: 外面口縁部ヨコナデ後ハケ調整, 胴部ヘラ削り後ハケ調整. 内面ヘラナデ. 使用痕: - 備考: -
- 2 台帳: 9トレ 材質: 土師器 器種: 壺 残存: 口縁部 20% 法量:



第8図 三反田遺跡第6次調査区（薄い色の線は過去の調査区）



第9図 三反田遺跡第6次調査区出土遺物(1)



第10図 三反田遺跡第6次調査区出土遺物(2)

口径(14.4)、器高(6.1) 色調：外面にぶい橙～暗褐色。内面橙色。
胎土：礫(白少、灰少)、砂(白多、透多、黒少) 焼成：良好 技法等：
外面口縁部上位ヨコナデ、下位ヘラナデ。内面口縁部上位ヨコナデ、下
位ヘラナデ後若干のヘラミガキ。 使用痕：－ 備考：－
3 台帳：9トレ 材質：土師質 種類：土錘 法量：長3.9、最大径3.4、
孔径0.1～1.6、重量50.55g 備考：明瞭な使用痕はみられない。

4 指浜遺跡、虎塚古墳群、下原遺跡

(1) 指浜遺跡第3次・虎塚古墳群第11次・下原遺跡第4次調査報告

ひたちなか市中根に所在する荒谷地区は、国史跡に指定されている虎塚古墳(1号墳)を有する虎塚古墳群や、笠谷古墳群などの重要な遺跡が位置する地域である。当地に畑地帯総合整備事業が実施されることとなったため、平成27年度から平成29年度にかけて対象地の試

掘調査が実施されることとなった。

平成28年度は指浜遺跡、虎塚古墳群、下原遺跡が対象となり、約4万3千㎡ほどの土地でトレンチによる試掘調査が実施された。

調査地は、本郷川とその支谷にはさまれた台地上に位置し、緩やかな起伏を持つ地形を呈する。調査地は畑地である。三つの遺跡はそれぞれ重なり合いながら存在しており、調査は対象地に57か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは、0.1～1mを測る。以下、遺跡ごとに調査結果を記述する。

指浜遺跡第3次調査 調査の結果、住居跡5基、溝跡1条(時期不明)、土坑1基(時期不明)、集石遺構1基(縄文時代早期)が確認された。

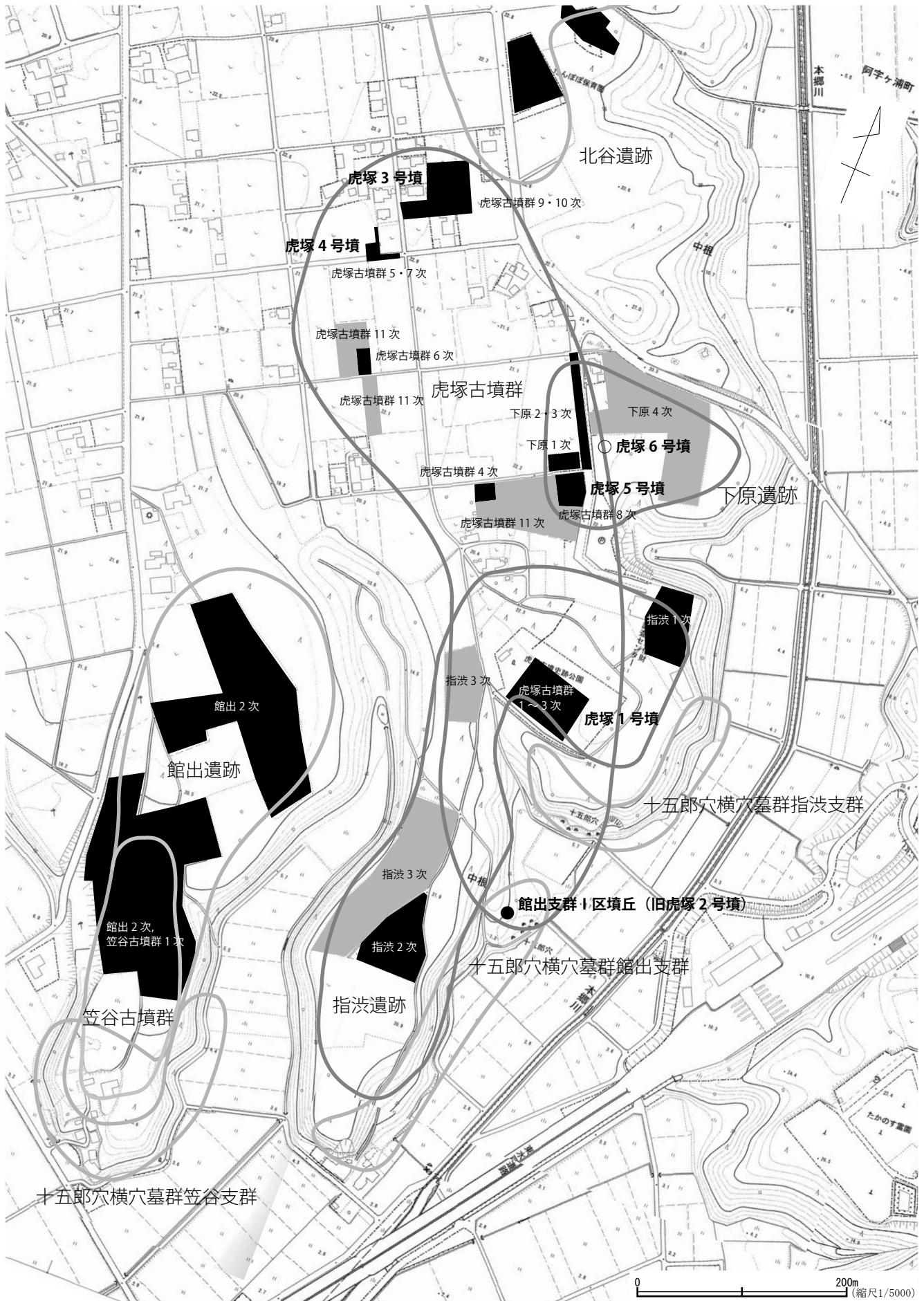
住居跡の時期は、覆土から少量出土した土器から推測すると、縄文時代早期が2基(1・2号住居跡)、縄文時代前期が1基(4号住居跡)、古墳時代が2基(3・5号住居跡)となる。各住居跡のおおよその規模は、1号住居跡が3m、2号住居跡が3m弱、3号住居跡が6m以上、4号住居跡が4m、5号住居跡が4mとなる。

溝跡は、出土遺物がなく時期が不明であるが、東西方向に伸びる、推定幅4mほどの溝跡である。一部0.5mほど掘り込んでみたが、底面を確認することはできなかった。調査区付近の字名は「館出」といい、中世の遺構が存在する可能性が考えられる。1号溝跡は比較的広い溝幅からみて、中世の遺構になる可能性があるだろう。

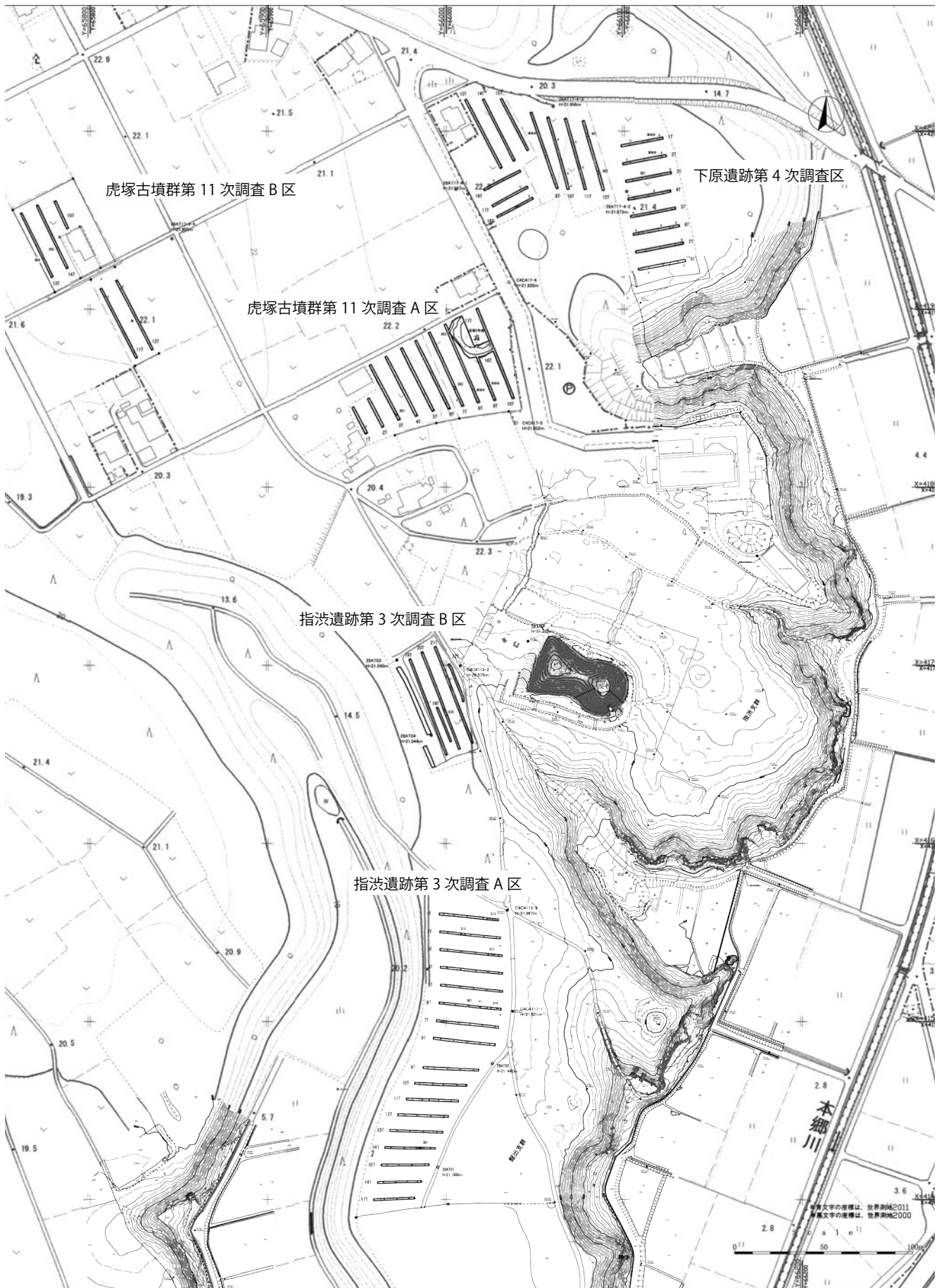
集石遺構は部分的な確認であるが、ローム上面から、径0.5mほどの範囲内に焼けた拳大の礫がまとまって出土した。礫を取り上げた跡は浅い窪み状を呈する。焼土や炭化物は特に認められなかった。礫に混じり、縄文時代早期土器片が出土している。

遺物は、各住居跡から土器が少量出土したが、とくに、虎塚古墳に隣接する指浜遺跡B区第5号住居跡から、虎塚古墳築造時に近い時期の古墳時代後期の完形の杯が出土しているのが注目される。住居跡の位置からみて、虎塚古墳の築造に関わる住居跡になる可能性があるだろう。トレンチからは、縄文土器(早期、前期、中期)、弥生土器(後期)、石器(石斧、削器、敲石)が出土している。

虎塚古墳群第11次調査 調査の結果、古墳(円墳も



第11図 荒谷地区遺跡群における調査地点 (黒色：過去の調査地点, 灰色：今回報告の調査地点)



第12図 指波遺跡第3次・虎塚古墳群第11次・下原遺跡第4次調査区 (縮尺 1/3000)

第3表 指洪遺跡調査一覧

次	調査年度	調査主体	調査種別	遺構	文献	備考
1	1989	勝田市教委	本調査	住居跡1 (弥生)	1	
2	2004	市教委	試掘	なし	2	

文献

- 1 指洪遺跡群発掘調査報告書
- 2 平成16年度市内遺跡発掘調査報告書

第4表 下原遺跡調査一覧

次	調査年度	調査主体	調査種別	遺構	文献	備考
1	1987	勝田市教委	試掘	なし	1	
2	1989	勝田市教委	本調査	住居跡1 (縄文)	2	
3	1991	勝田市教委	本調査	住居跡1 (縄文)	未報告	第2次調査の住居跡の未調査部分を調査

文献

- 1 昭和62年度市内遺跡発掘調査報告書
- 2 指洪遺跡群発掘調査報告書

第5表 虎塚古墳群調査一覧

次	調査年度	調査主体	調査種別	遺構	文献
1	1973	勝田市史編纂委	本調査	虎塚1号墳 (前方後円墳) 横穴式石室 (彩色壁画)	1・2
2	1974	勝田市史編纂委	本調査	虎塚1号墳周溝	2
3	1976	勝田市史編纂委	本調査	虎塚1号墳周溝	2
4	1984	勝田市教委	試掘	なし	3
5	1986	調査会	本調査	虎塚4号墳 (方墳) 石室、周溝	4
6	1986	勝田市教委	試掘	なし	5
7	1987	勝田市教委	本調査	虎塚4号墳石室、周溝	4
8	1992	勝田市教委	試掘	虎塚5号墳石室、周溝	6
9	1999	市教委	試掘	虎塚3号墳周溝	7
10	1999	市教委	試掘	虎塚3号墳周溝	7

文献

- 1 勝田市虎塚壁画古墳第一次発掘調査概要
- 2 勝田市史別編1 虎塚壁画古墳
- 3 昭和58年度市内遺跡発掘調査報告書
- 4 虎塚古墳群第4号墳
- 5 昭和61年度市内遺跡発掘調査報告書
- 6 平成4年度市内遺跡発掘調査報告書
- 7 平成11年度市内遺跡発掘調査報告書

しくは多角形墳) 1基, 土坑5基 (時期不明) が確認された。古墳は, 部田野凝灰岩による横穴式石室の一部が露出している虎塚5号墳の周溝を確認した。周溝の径は25mほどを測る。周溝の形からみて, 墳形は円墳もしくは多角形墳と思われるが, 明確にするには周溝の発掘調査を必要としよう。

遺物は, 虎塚5号墳の周溝確認面から, 須恵器平瓶と思われる胴部破片が出土しており, 古墳に伴う遺物と考えられる。トレンチからは, 縄文土器・土器片錘 (中期), 土師器, 須恵器が出土している。

下原遺跡第4次調査 調査の結果, 溝跡1条 (時期不明), 土坑2基 (縄文時代中期) が確認された。縄文時代中期の2基の土坑は, 一部掘り込んだところ, 土坑壁面下部が抉れていることが確認されたので, 袋状土坑になるものと思われる。トレンチからの出土遺物は, 縄文土器 (中期), 須恵器が出土している。

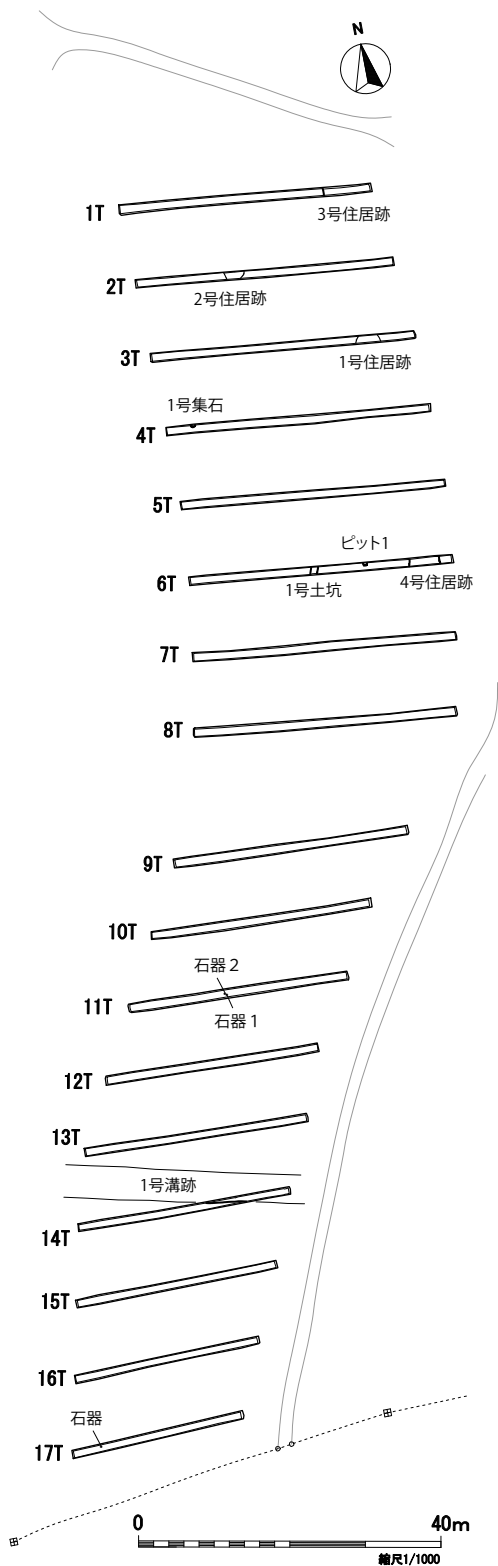
遺物説明

第16図

- 1 出土位置・注記: 1トレ3住 時代時期: 縄文時代早期 (鶴ヶ島台式) 器種: 深鉢形土器 文様: 沈線文, 刺突文 (円形竹管), 器外面条痕文, 器内面撫で 備考: 胎土に繊維を含む
- 2 出土位置・注記: 1トレ3住 時代時期: 縄文時代早期 (鶴ヶ島台式—茅山下層式) 器種: 深鉢形土器 文様: 列状の刺突文, 器内外面撫で 備考: 胎土に繊維を含む
- 3 出土位置・注記: 1トレ3住 時代時期: 縄文時代早期 (条痕文系) 器種: 深鉢形土器 文様: 器外面撫で, 器内面条痕文 備考: 胎土に繊維を含む
- 4 出土位置・注記: 1トレ3住 時代時期: 縄文時代早期 (条痕文系) 器種: 深鉢形土器 文様: 器外面撫で, 器内面条痕文 備考: 胎土に繊維を含む

含む

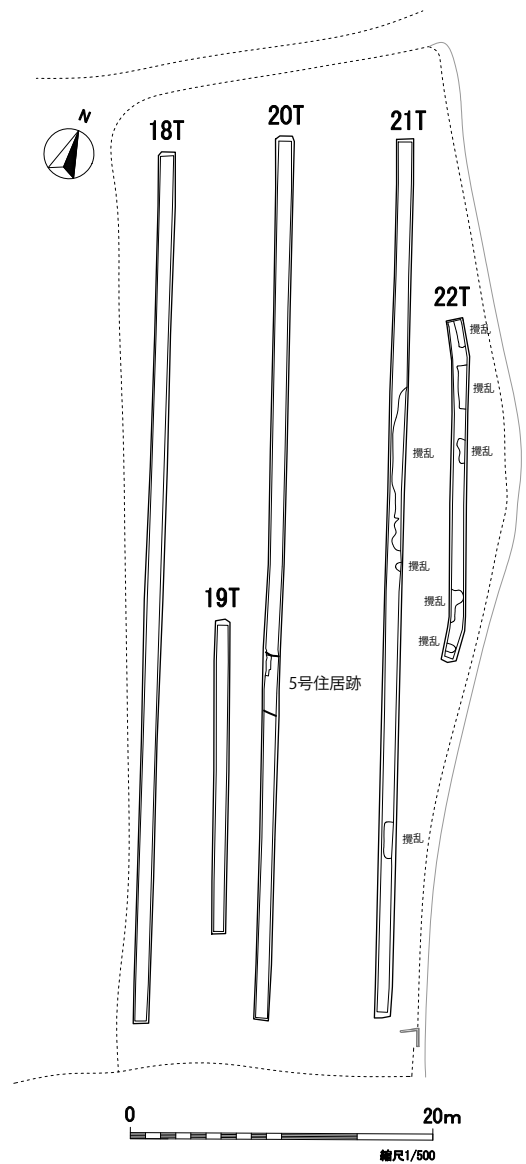
- 5 出土位置・注記: 1トレ3住 時代時期: 縄文時代前期 (浮島式) 器種: 深鉢形土器 文様: 押し引き文 (半截竹管), 撚糸文 (R?) 備考: 耕作に伴う損傷が著しい
- 6 出土位置・注記: 1トレ3住 時代時期: 縄文時代前期 (浮島式) 器種: 深鉢形土器 文様: 貝殻文 (放射肋あり)
- 7 出土位置・注記: 1トレ3住 時代時期: 縄文時代中期? 器種: 深鉢形土器 文様: 単節斜縄文 (RL) 備考: 胎土に大粒の石英を多量含む
- 8 出土位置・注記: 1トレ3住 時代時期: 弥生時代後期 文様: 付加条縄文 (LR+R) 備考: 胎土に骨針を少量含む
- 9 出土位置・注記: 1トレ3住 時代時期: 弥生時代後期 文様: 付加条縄文 (LR+2R?)
- 10 出土位置・注記: 1トレ3住 時代時期: 弥生時代後期 法量: 底径102mm (残存率11%) 文様: 単節斜縄文 (LR), 底面木葉痕
- 11 出土位置・注記: 1トレ 時代時期: 縄文時代早期 (鶴ヶ島台式) 器種: 深鉢形土器 文様: 沈線文, 刺突文 (円形竹管), 器内外面撫で 備考: 胎土に繊維を含む
- 12 出土位置・注記: 1トレ 時代時期: 縄文時代早期 (鶴ヶ島台式—茅山下層式) 器種: 深鉢形土器 文様: 縦位隆起部に刻み, 列状の刺突文, 器内外面撫で 備考: 胎土に繊維を含む, ネズミの齧り痕あり



第13図 指浜遺跡第3次調査区(A区)

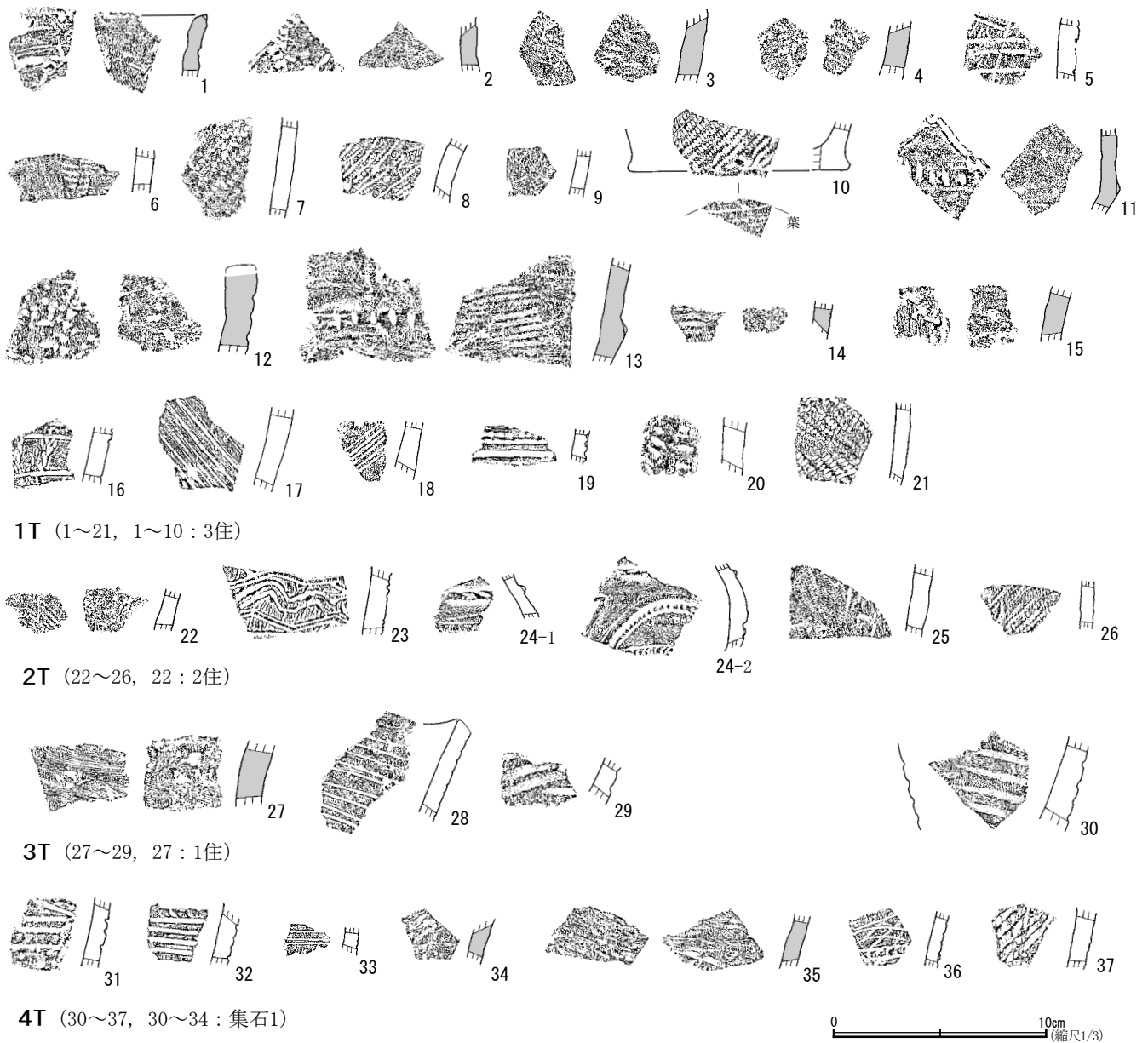


第14図 指浜遺跡
第3次調査区1号集石



第15図 指浜遺跡第3次調査区(B区)

- 13 出土位置・注記：1トレ 時代時期：縄文時代早期（鶴ヶ島台式—茅山下層式）器種：深鉢形土器 文様：有段部刻み（笠状），器内外面条痕文 備考：胎土に繊維を含む
- 14 出土位置・注記：1トレ 時代時期：縄文時代早期（条痕文系）器種：深鉢形土器 文様：器内外面条痕文 備考：胎土に繊維を含む
- 15 出土位置・注記：1トレ 時代時期：縄文時代早期（鶴ヶ島台式）器種：深鉢形土器 文様：隆帯，列状の刺突文，器内外面撫で 備考：胎土に繊維を含む
- 16 出土位置・注記：1トレ 時代時期：縄文時代前期（浮島式）器種：深鉢形土器 文様：平行沈線文（半截竹管），撚糸文（R）備考：器外面炭化物付着
- 17 出土位置・注記：1トレ 時代時期：縄文時代前期（浮島式）器種：深鉢形土器 文様：条線状の平行沈線文（半截竹管）備考：胎土に骨針を僅かに含む
- 18 出土位置・注記：1トレ 時代時期：縄文時代前期（浮島式）器種：深鉢形土器 文様：平行沈線文（半截竹管）備考：破断面に穿孔の一部が残存か



1T (1~21, 1~10: 3住)

2T (22~26, 22: 2住)

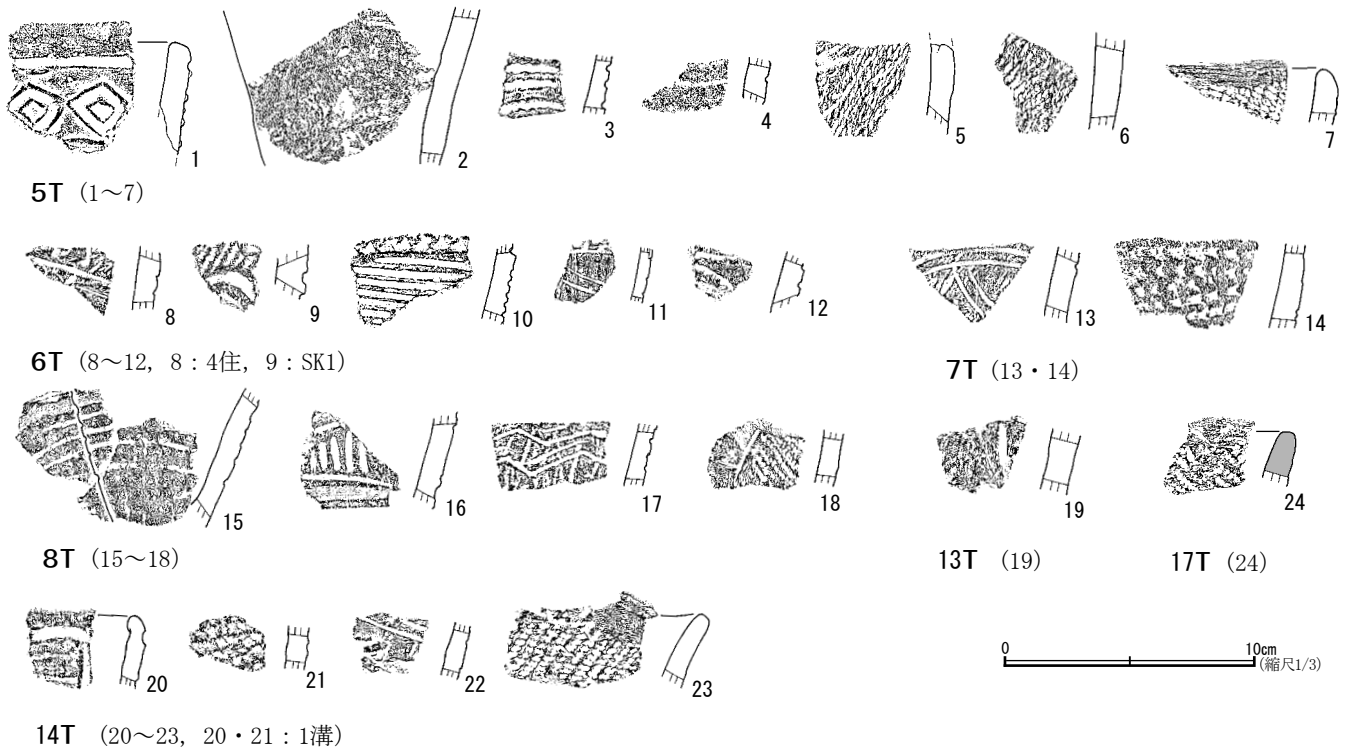
3T (27~29, 27: 1住)

4T (30~37, 30~34: 集石1)

第16図 指洪遺跡第3次調査区出土遺物(1)

- 19 出土位置・注記:1トレ 時代時期:縄文時代前期(興津式) 器種:深鉢形土器 文様:平行沈線文・押し引き文(半截竹管)
- 20 出土位置・注記:1トレ 時代時期:縄文時代中期(阿玉台式) 器種:深鉢形土器 文様:隆帯の両側に爪形文 備考:胎土に大粒の石英を多量含む
- 21 出土位置・注記:1トレ 時代時期:弥生時代後期か 文様:単節斜縄文(RL)
- 22 出土位置・注記:2トレ2住 時代時期:縄文時代早期(条痕文系) 器種:深鉢形土器 文様:器外面条痕文, 器内面撫で僅かに条痕文
- 23 出土位置・注記:2トレ 時代時期:縄文時代前期(浮島式) 器種:深鉢形土器 文様:平行沈線文(半截竹管), 撚糸文(R)
- 24 出土位置・注記:2トレ 時代時期:縄文時代前期(諸磯b式) 器種:浅鉢形土器 文様:隆帯上に刻み, 平行沈線文・爪形文(半截竹管) 備考:器外面に赤彩の痕跡あり
- 25 出土位置・注記:2トレ 時代時期:縄文時代前期か 器種:深鉢

- 形土器 文様:沈線文
- 26 出土位置・注記:2トレ 時代時期:弥生時代後期 文様:付加条縄文(LR+2R) 備考:胎土に大粒の白色粒, 白雲母を含む
- 27 出土位置・注記:3トレ1住 時代時期:縄文時代早期(条痕文系) 器種:深鉢形土器 文様:器内外面細かな条痕文 備考:胎土に繊維を含む
- 28 出土位置・注記:3トレ 時代時期:縄文時代早期(田戸下層式) 器種:深鉢形土器 文様:細沈線文
- 29 出土位置・注記:3トレ 時代時期:縄文時代早期(田戸下層式) 器種:深鉢形土器 文様:太沈線文
- 30 出土位置・注記:4トレ集石1 時代時期:縄文時代早期(田戸下層式) 器種:深鉢形土器 法量:最大径88mm(残存率18%) 文様:太沈線文
- 31 出土位置・注記:4トレ集石1 時代時期:縄文時代早期(田戸下層式) 器種:深鉢形土器 文様:細沈線文, 太沈線文
- 32 出土位置・注記:4トレ集石1 時代時期:縄文時代早期(田戸下層式)



第 17 図 指洪遺跡第 3 次調査区出土遺物 (2)

器種：深鉢形土器 文様：細沈線文

33 出土位置・注記：4 トレ集石 1 時代時期：縄文時代早期(田戸下層式)

器種：深鉢形土器 文様：細沈線文

34 出土位置・注記：4 トレ集石 1 時代時期：縄文時代前期前半 器種：深鉢形土器 文様：無節斜縄文 (L) 備考：胎土に繊維を少量含む

35 出土位置・注記：4 トレ 時代時期：縄文時代早期(条痕文系) 器種：深鉢形土器 文様：器内外面条痕文 備考：胎土に繊維を含む

36 出土位置・注記：4 トレ 時代時期：縄文時代前期(浮島式) 器種：深鉢形土器 文様：平行沈線文・爪形文(半截竹管), 撚糸文 (L)

37 出土位置・注記：4 トレ 時代時期：縄文時代中期 器種：深鉢形土器 文様：無節斜縄文 (L)

第 17 図

1 出土位置・注記：5 トレ 時代時期：縄文時代前期(大木 4 式か) 器種：深鉢形土器 文様：細い隆帯, 隆帯側に太い沈線 備考：胎土に大粒の石英を多量含む

2 出土位置・注記：5 トレ 時代時期：縄文時代前期か 器種：深鉢形土器 法量：最大径 101 mm (残存率 21%) 文様：平行沈線文(半截竹管) 備考：胎土に大粒の石英を多量含む

3 出土位置・注記：5 トレ 時代時期：縄文時代前期(浮島式) 器種：深鉢形土器 文様：コンパス文状の平行沈線文(半截竹管)

4 出土位置・注記：5 トレ 時代時期：縄文時代前期(浮島式) 器種：深鉢形土器 文様：コンパス文状の平行沈線文(半截竹管)

5 出土位置・注記：5 トレ 時代時期：縄文時代前期(浮島式) 器種：深鉢形土器 文様：撚糸文 (R)

6 出土位置・注記：5 トレ 時代時期：縄文時代前期か 器種：深鉢形土器 文様：無節斜縄文 (L)

7 出土位置・注記：5 トレ 時代時期：縄文時代中期(加曾利 E 式) 器

種：深鉢形土器 文様：単節斜縄文 (LR)

8 出土位置・注記：6 トレ 4 住 時代時期：縄文時代前期(浮島式) 器種：深鉢形土器 文様：平行沈線文・爪形文(半截竹管), 撚糸文 (L)

9 出土位置・注記：6 トレ SK1 時代時期：縄文時代中期(加曾利 E 式) 器種：深鉢形土器 文様：沈線文, 単節斜縄文 (LR)

10 出土位置・注記：6 トレ 時代時期：縄文時代早期(田戸下層式) 器種：深鉢形土器 文様：押し引き状の爪形文, 細沈線文

11 出土位置・注記：6 トレ 時代時期：縄文時代前期(浮島式) 器種：深鉢形土器 文様：平行沈線文・爪形文(半截竹管)

12 出土位置・注記：6 トレ 時代時期：縄文時代前期(浮島式) 器種：深鉢形土器 文様：爪形文(半截竹管)

13 出土位置・注記：7 トレ 時代時期：縄文時代前期(浮島式) 器種：深鉢形土器 文様：平行沈線文(半截竹管), 撚糸文 (L)

14 出土位置・注記：7 トレ 時代時期：縄文時代前期(浮島式) 器種：深鉢形土器 文様：刺突文(半截竹管)

15 出土位置・注記：8 トレ 時代時期：縄文時代早期(田戸下層式) 器種：深鉢形土器 法量：最大径 73 mm (残存率 32%) 文様：細沈線文, 太沈線文 備考：胎土に金雲母を含む, 6 トレ出土の破片が接合

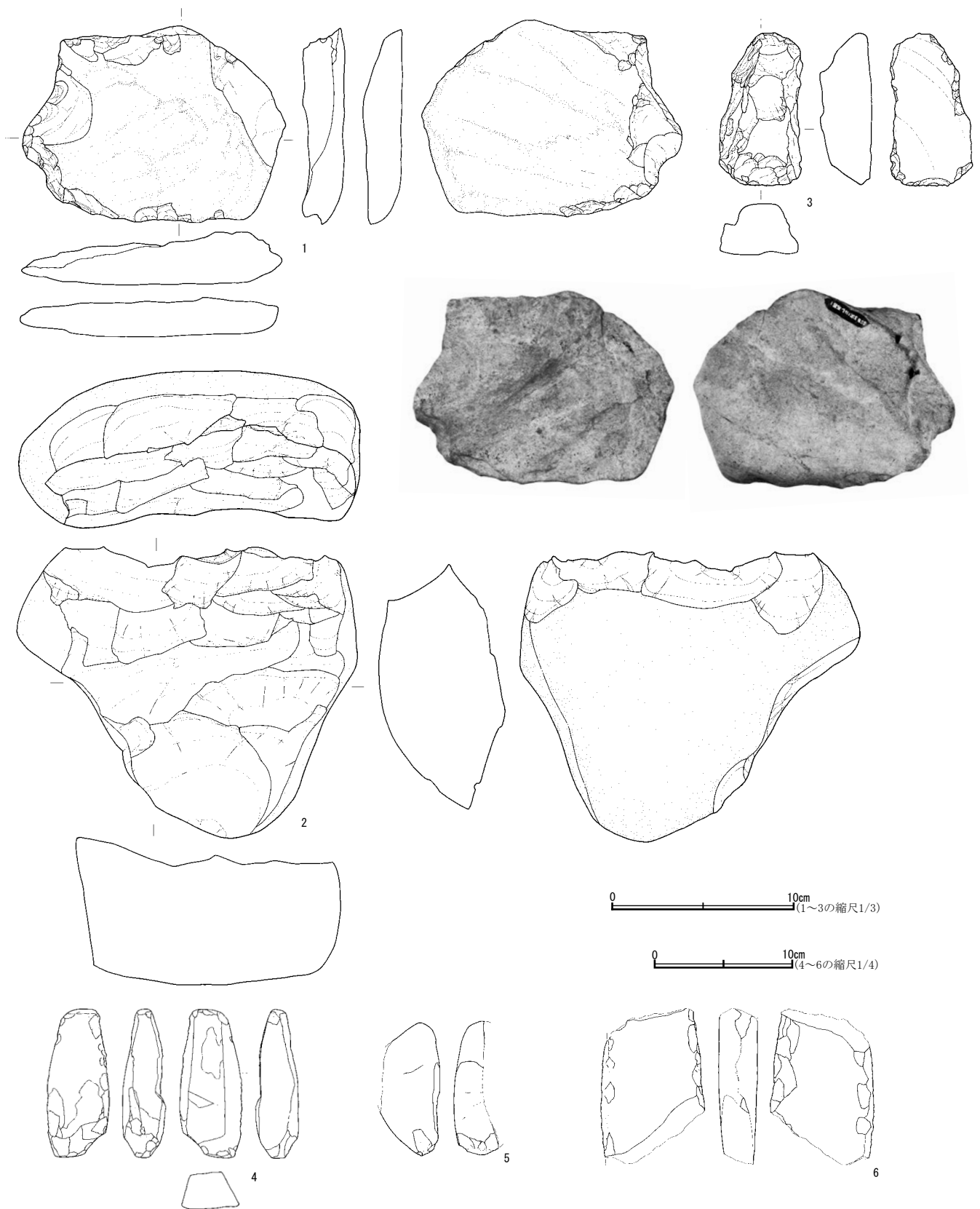
16 出土位置・注記：8 トレ 時代時期：縄文時代早期(田戸下層式) 器種：深鉢形土器 文様：細沈線文, 太沈線文

17 出土位置・注記：8 トレ 時代時期：縄文時代前期(浮島式) 器種：深鉢形土器 文様：平行沈線文(半截竹管), 撚糸文 (L?)

18 出土位置・注記：8 トレ 時代時期：縄文時代中期(加曾利 E 式) 器種：深鉢形土器 文様：沈線文, 単節斜縄文 (RL)

19 出土位置・注記：13 トレ 時代時期：縄文時代中期(加曾利 E 式か) 器種：深鉢形土器 文様：沈線文 備考：耕作に伴う損傷が著しい

20 出土位置・注記：14 トレ 1 溝 時代時期：縄文時代中期か 器



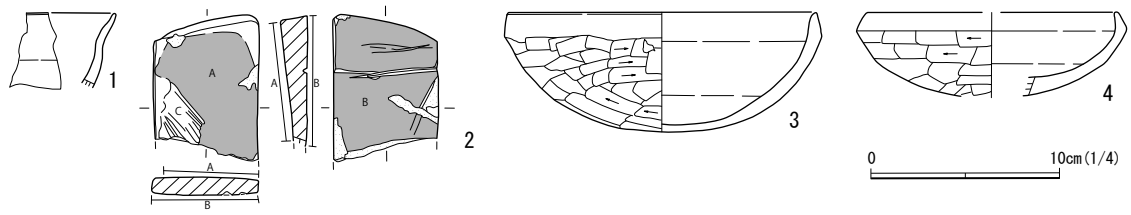
第18図 指洪遺跡第3次調査区出土遺物(3)

種：深鉢形土器 文様：沈線文

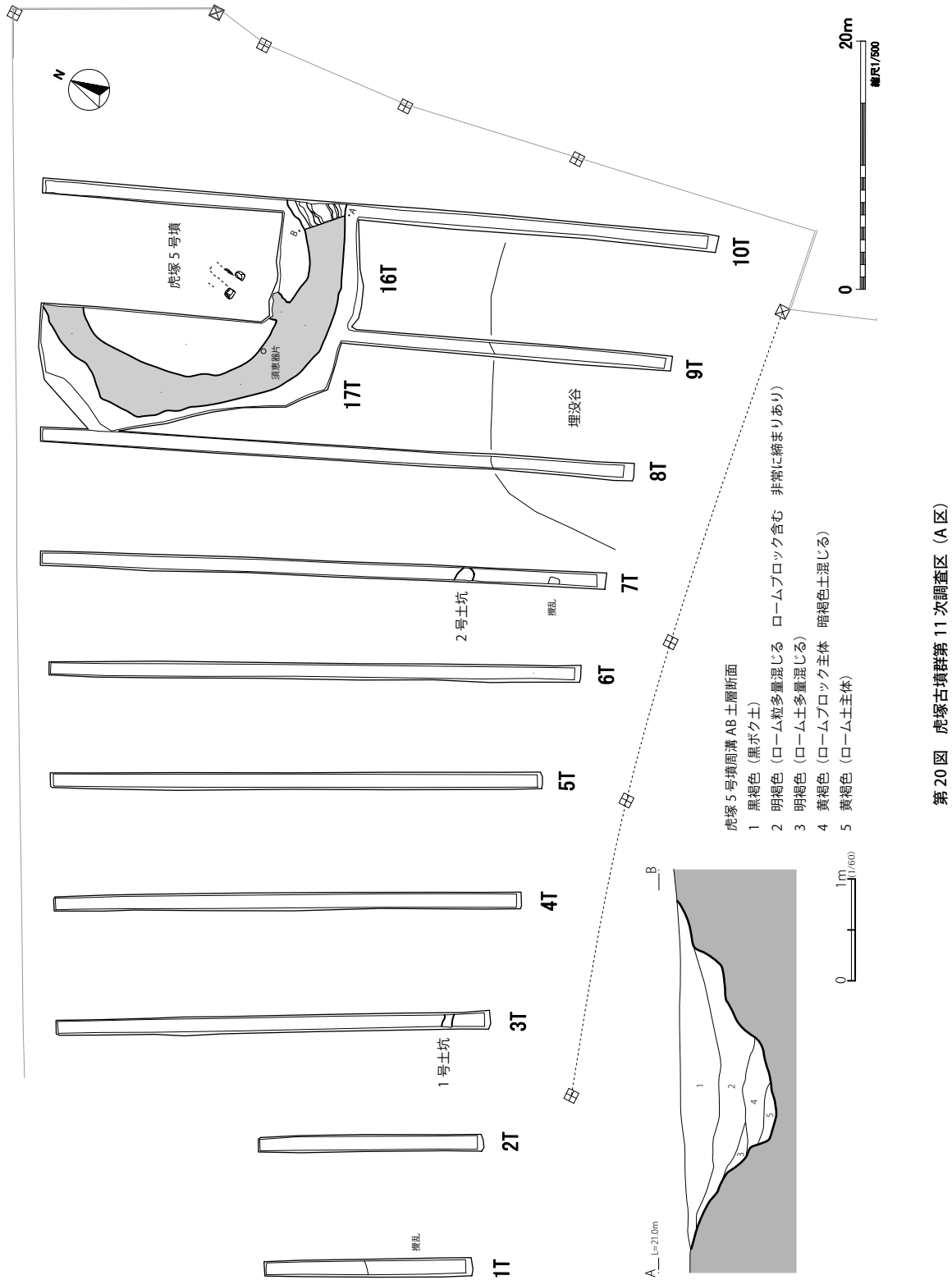
21 出土位置・注記：14トレ1溝 時代時期：縄文時代中期（加曾利E式か）文様：単節斜縄文（RL）備考：土製円盤の破片か

（周縁は研磨されていない）

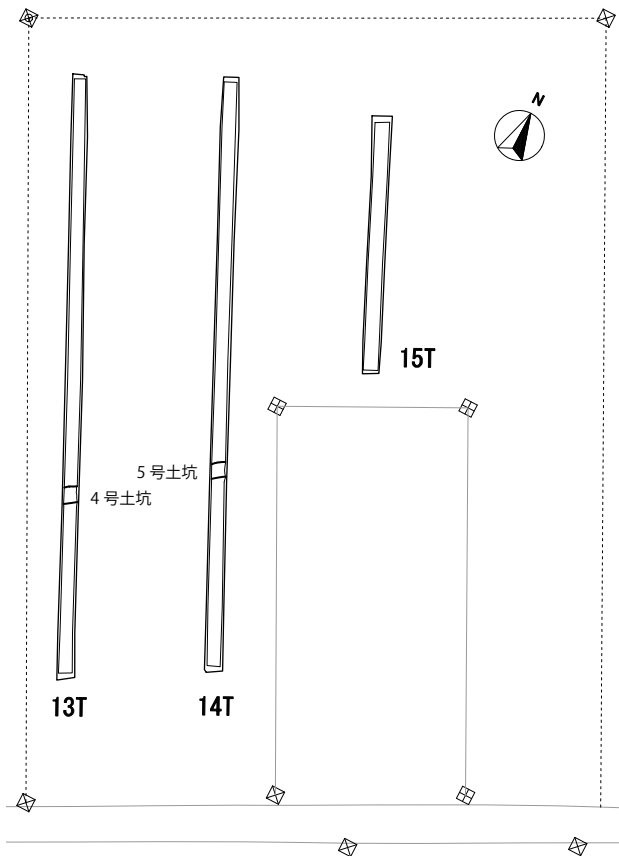
22 出土位置・注記：14トレ 時代時期：縄文時代前期（浮島式）器種：深鉢形土器 文様：平行沈線文（半截竹管），撚糸文（R）



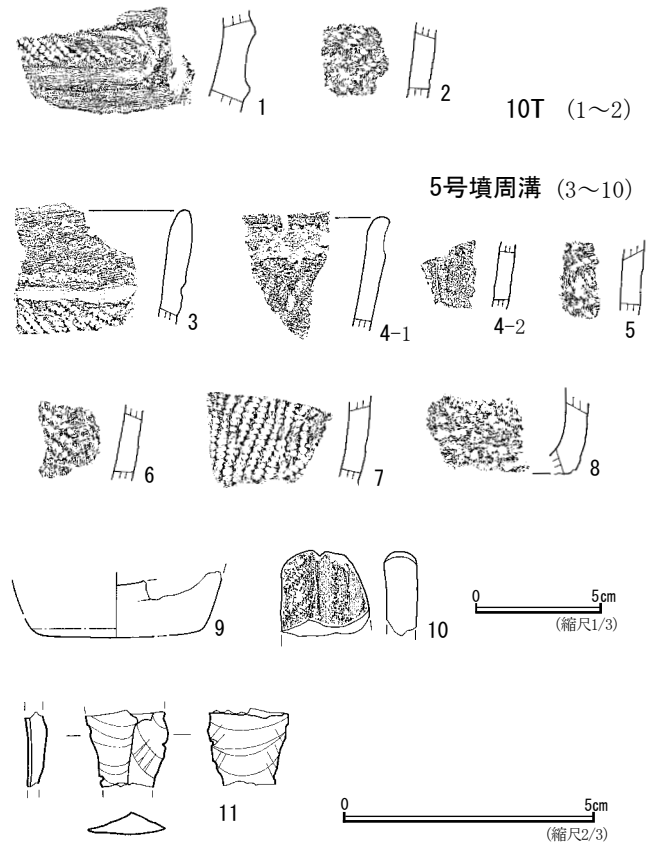
第19図 指洪遺跡第3次調査区出土遺物(4)



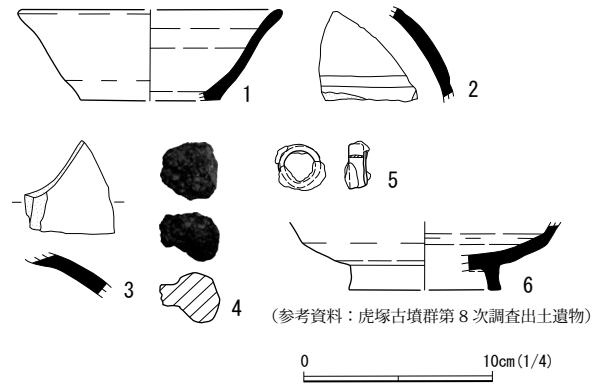
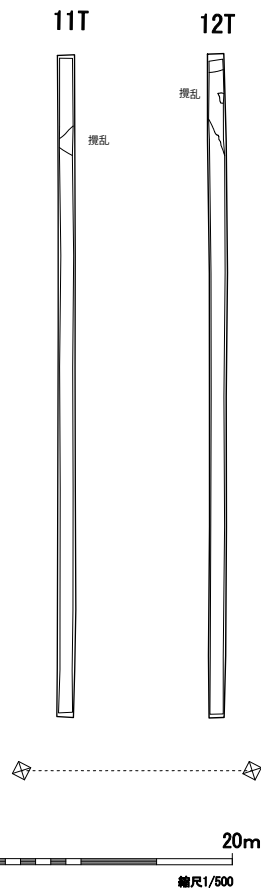
第20図 虎塚古墳群第11次調査区(A区)



第21図 虎塚古墳群第11次調査区(B区)



第22図 虎塚古墳群第11次調査区出土遺物(1)



第23図 虎塚古墳群第11次調査区出土遺物(2)

23 出土位置・注記：14トレ 時代時期：縄文時代中期(加曾利E式か)
器種：深鉢形土器 文様：複節斜縄文(RLR)

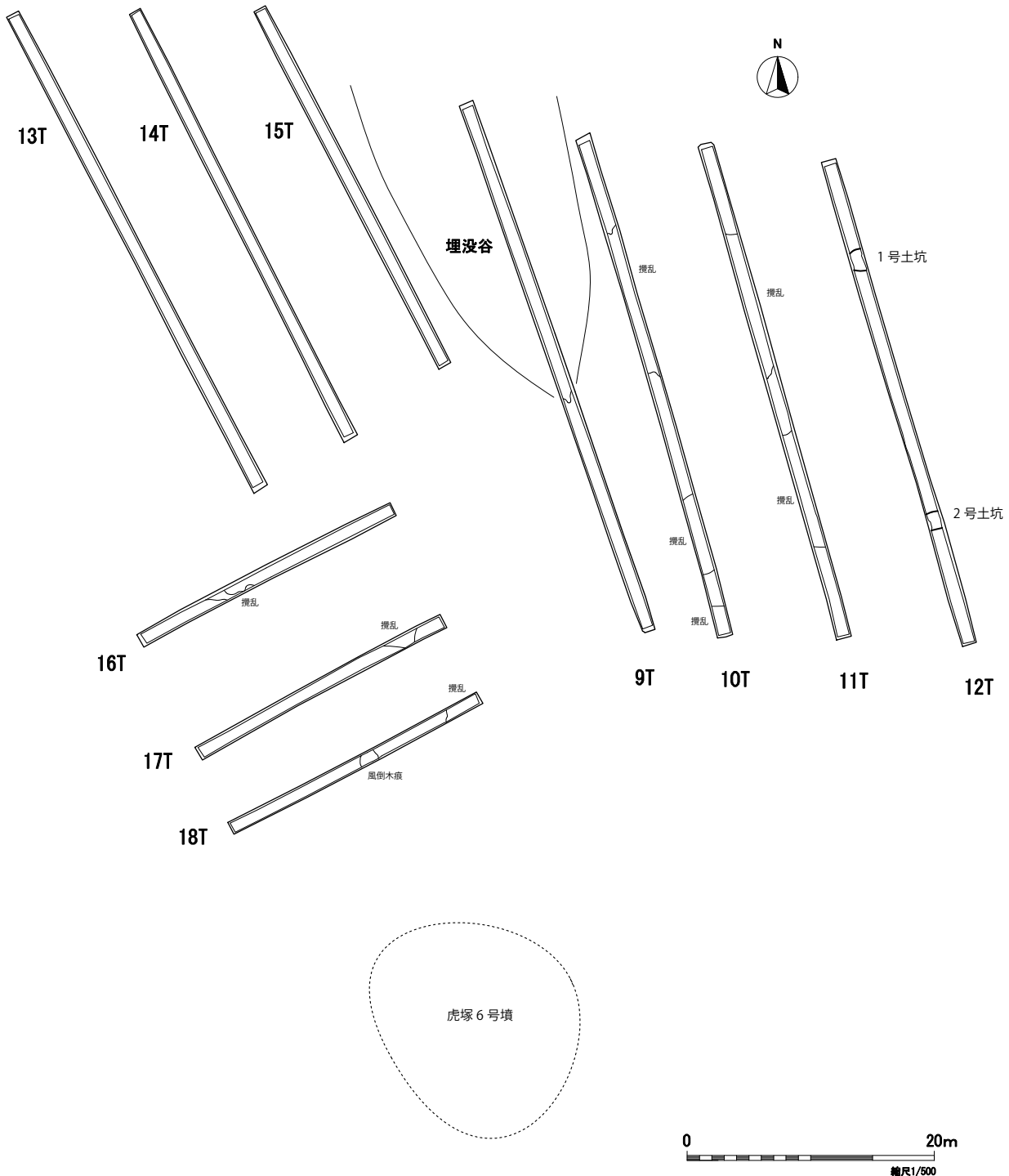
24 出土位置・注記：17トレ 時代時期：縄文時代前期前半 器種：
深鉢形土器 文様：単節斜縄文(RL) 備考：胎土に繊維を含む

第18図

1 出土位置・注記：11トレ 時代時期：縄文時代 器種：削器 石材：
ホルンフェルス 法量：長さ105mm, 幅138mm, 厚さ19mm 重量：
426.4g 備考：表面の風化が著しい, 2とは接合しない

2 出土位置・注記：11トレ 時代時期：縄文時代 器種：石核 石材：
ホルンフェルス 法量：長さ158mm, 幅185mm, 厚さ86mm 重量：
2536g 備考：表面の風化が著しい

3 出土位置・注記：19トレ 時代時期：縄文時代早期 器種：礫斧



第 24 図 下原遺跡第 4 次調査区 (西側)

石材：ホルンフェルス 法量：長さ 83 mm，幅 43 mm，厚さ 27 mm 重量：146.6 g 備考：表面の風化が著しい，後世の耕作に伴う損傷あり

4 出土位置・注記：5 トレ 時代時期：縄文時代 器種：敲石 石材：砂岩 法量：長さ 108 mm，幅 45 mm，厚さ 31 mm 重量：186.3 g 備考：上下端部と側面の一部に敲打痕集中，表裏面に研磨痕

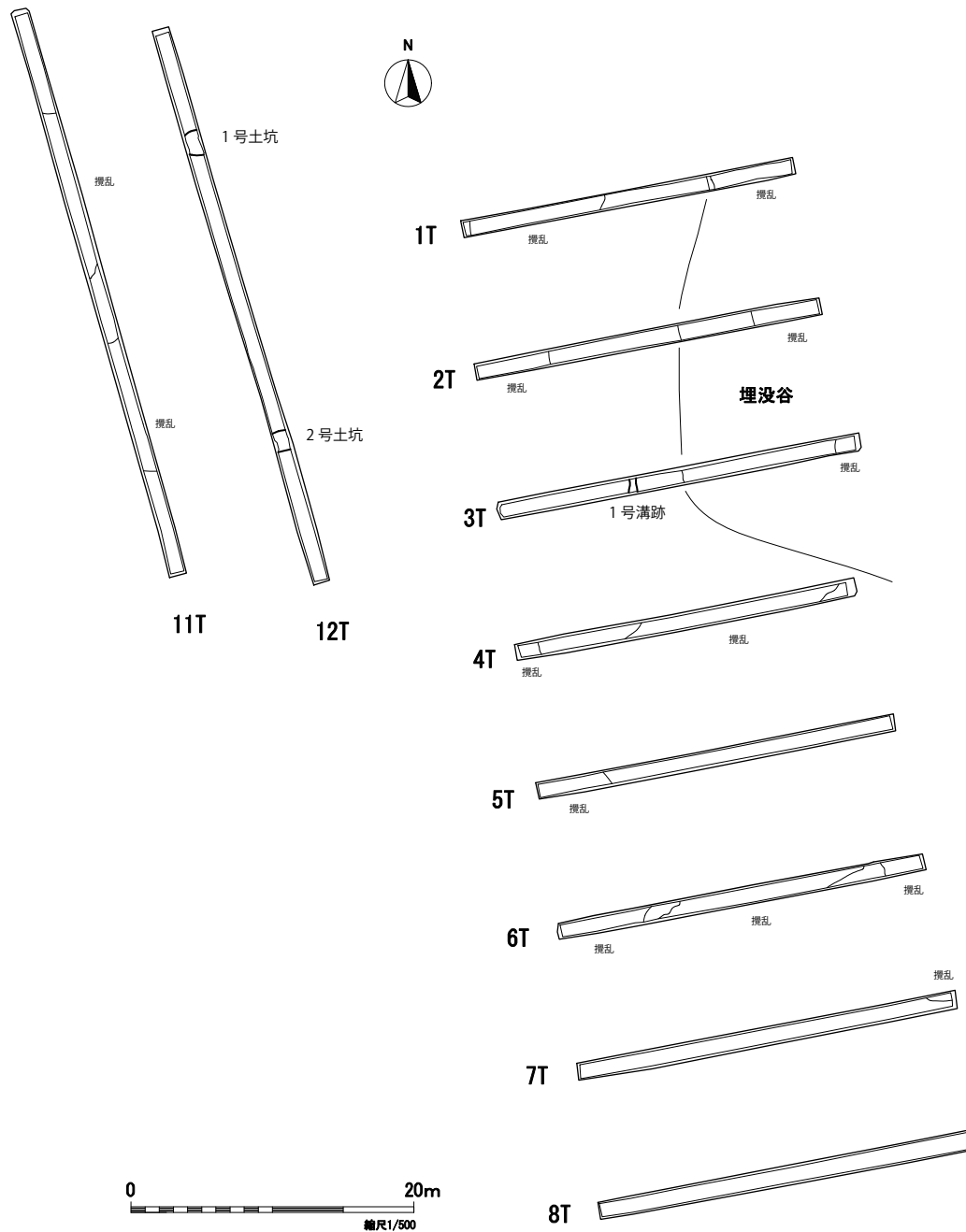
5 出土位置・注記：4 トレ 時代時期：縄文時代 器種：敲石 石材：ホルンフェルス 法量：長さ 96 mm，幅 31 mm，厚さ 30 mm 重量：129.1 g 備考：下端部に敲打痕集中

6 出土位置・注記：14 トレ 時代時期：縄文時代 器種：敲石 石材：砂岩 法量：長さ 113 mm，幅 76 mm，厚さ 28 mm 重量：340.7 g 備考：両側縁に敲打痕集中，後世の耕作に伴う損傷あり

第 19 図

1 台帳：1 トレンチ 3 住 注記：— 材質：土師器 器種：杯 残存：口縁部片 法量：— 色調：外面にぶい黄橙色。内面黒色 胎土：砂(白多，透少) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ，体部ヘラミガキ？ 備考：内面器面の一部が剥離している。

2 台帳：1 トレンチ 3 住 注記：— 材質：石 器種：砥石 残存：不明 法量：長 7.6 以上，幅 5.5，厚 1.4，重量 95.3g 色調：灰色(赤褐色の斑文あり) 特徴：2 面使用 (A・B)。A 面には浅い刻線がまとまる部分がある (C)。B 面には浅い刻線と深い刻線がみられる。 備考：「結晶質，片理著しい。石英，白雲母，長石，不透明黒色鉱物，有色雲母様



第25図 下原遺跡第4次調査区(東側)

鉢物(緑泥石?), 鉢物溶脱痕。白雲母・石英片岩。日立変成岩か(鮎川層下部)?」(矢野徳也氏御教示)

3 台帳: 5住P1 材質: 土師器 器種: 杯 残存: 100% 法量: 口径16.4, 器高6.3 色調: 内外面とも橙~にぶい橙~黒褐色 胎土: 礫(白微, 灰微), 砂(白多, 透多, 黒少, 赤少) 焼成: 良好 技法等: 外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り, 一部に輪積みがみられる。内面ヨコナデ。使用痕: — 備考: —

4 台帳: 5住P2 材質: 土師器 器種: 杯 残存: 40% 法量: 口径13.1, 器高4.5 色調: 内外面とも橙~灰黄褐~黒褐色 胎土: 礫(白少), 砂(白多, 透多, 黒少, 赤微) 焼成: 良好 技法等: 外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面ヨコナデ。使用痕: — 備考: —

第22図

1 出土位置・注記: 10トレ 時代時期: 縄文時代中期(加曾利E式) 器種:

深鉢形土器 文様: 隆帯, 単節斜縄文(RL) 備考: 胎土に金雲母を多量含む

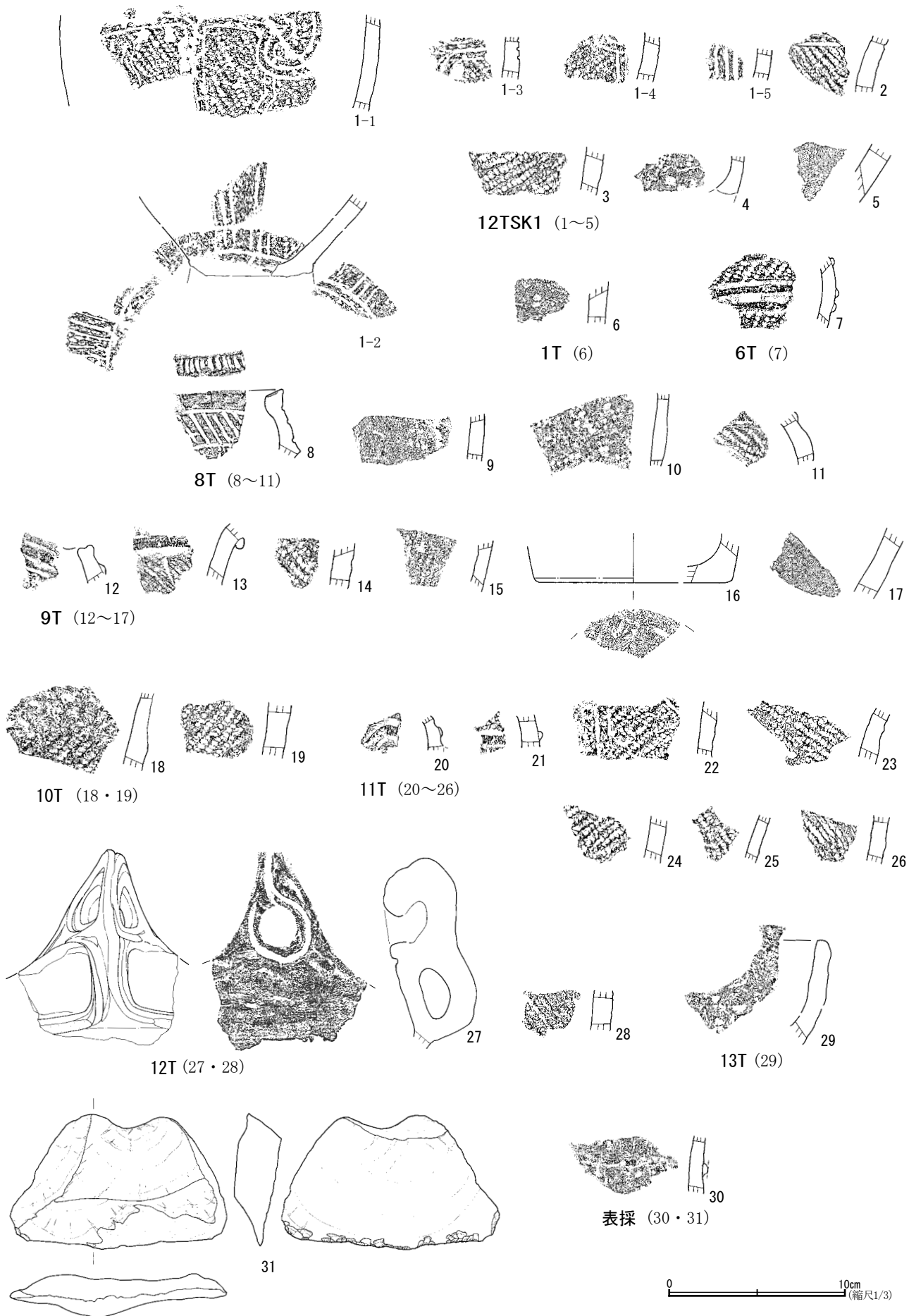
2 出土位置・注記: 10トレ 時代時期: 縄文時代中期 器種: 深鉢形土器 文様: 単節斜縄文(RL)

3 出土位置・注記: 5号墳周溝 時代時期: 縄文時代中期(加曾利E式) 器種: 深鉢形土器 文様: 沈線文, 単節斜縄文(RL) 備考: 器外面と破断面縁にネズミの齧り痕あり

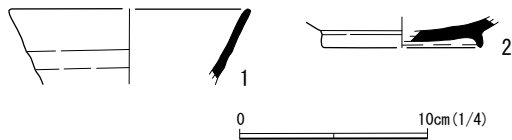
4 出土位置・注記: 5号墳周溝 時代時期: 縄文時代中期(加曾利E式) 器種: 深鉢形土器 文様: 隆帯(剥落), 無節斜縄文(L)

5 出土位置・注記: 5号墳周溝 時代時期: 縄文時代中期 器種: 深鉢形土器 文様: 単節斜縄文(RL)

6 出土位置・注記: 5号墳周溝 時代時期: 縄文時代中期 器種: 深鉢形土器 文様: 単節斜縄文(LR)



第 26 図 下原遺跡第 4 次調査区出土遺物 (1)



第 27 図 下原遺跡第 4 次調査区出土遺物 (2)

7 出土位置・注記：5 号墳周溝 時代時期：縄文時代中期 器種：深鉢形土器 文様：単節斜縄文 (RL)

8 出土位置・注記：5 号墳周溝 時代時期：縄文時代中期 器種：深鉢形土器 備考：胎土に金雲母を多量含む，器内面黒色

9 出土位置・注記：5 号墳周溝 時代時期：縄文時代中期 器種：深鉢形土器 法量：底径 70 mm (残存率 100%) 備考：胎土に金雲母を多量含む

10 出土位置・注記：5 号墳周溝 時代時期：縄文時代中期 器種：土器片錘 法量：長さ 34 mm，幅 34 mm，厚さ 14 mm 重量：18.5 g 備考：加曽利 E 式の土器破片を再利用

11 出土位置・注記：5 号墳周溝 器種：剥片 石材：黒曜石 法量：長さ 15 mm，幅 16.5 mm，厚さ 4 mm 重量：0.8 g 備考：上下端部折れ

第 23 図

1 出土位置：17 トレンチ (虎塚 5 号墳) 注記：— 材質：須恵器 器種：杯 残存：体部 15% 法量：口径 (13.6)，器高 4.8，底径 (7.4) 色調：灰色 胎土：砂 (白，透少)，骨針微量 技法等：焼成硬質。口唇部内面の摩滅等の使用痕はみられない。備考：木葉下窯産か。虎塚 5 号墳の供献品の可能性あり。

2 出土位置：虎塚 5 号墳周溝土器 1 注記：— 材質：須恵器 器種：平瓶か 残存：肩部片 法量：— 色調：外面黒灰色・緑色，内面・断面灰色 胎土：礫 (白透少)。砂粒少ない。技法等：焼成硬質。外面緑色釉。沈線 1 条。備考：産地不明

3 出土位置：14 トレンチ 注記：— 材質：須恵器 器種：長頸瓶か 残存：肩部片 法量：— 色調：灰色，外面緑色釉 胎土：礫 (白少，白透少) 技法等：焼成硬質

4 出土位置：17 トレンチ 注記：— 材質：鉄 種類：鍛冶滓か 残存：破片 法量：現存長 2.9 × 3.0 × 2.5，重量 33.5g

5 出土位置：16 トレンチ 注記：— 材質：鉄 器種：不明 残存：完形 法量：径 2.1，重量 6.0g

6 出土位置：虎塚 5 号墳南トレンチ表土 注記：— 材質：須恵器 器種：有台坏 残存：底部外周 20% 法量：高台径 (8.0) 色調：灰色。外面の高台外側から体部にかけて暗色化。内面底部外周暗色化。胎土：礫 (白)，砂 (白，白透)，骨針少，黒色吹き出し 技法等：焼成硬質。底部内面および高台接地面に重ね焼き痕 (同器種正位重ね焼き)。高台端部の欠けや底部の摩滅はみられない。備考：木葉下窯産か。虎塚 5 号墳の供献品の可能性あり。

第 26 図

1 出土位置・注記：12 トレ SK1 時代時期：縄文時代中期 (大木 8a 式) 器種：台付土器か 法量：最大径 178 mm (残存率 21%) 文様：平行沈線文 (半截竹管)，単節斜縄文 (LR) 備考：器内面に炭化物付着

2 出土位置・注記：12 トレ SK1 時代時期：縄文時代中期 (大木 8a 式) 器種：深鉢形土器 文様：平行沈線文 (半截竹管)，単節斜縄文 (LR)

3 出土位置・注記：12 トレ SK1 時代時期：縄文時代中期 器種：深鉢形土器 文様：単節斜縄文 (RL) 備考：器内面に炭化物付着

4 出土位置・注記：12 トレ SK1 時代時期：縄文時代中期 器種：深鉢形土器 文様：単節斜縄文 (RL) 備考：底部付近

5 出土位置・注記：12 トレ SK1 時代時期：縄文時代中期 器種：浅鉢形土器 備考：器外面に赤彩痕あり

6 出土位置・注記：1 トレ 時代時期：縄文時代中期 器種：深鉢形土器

7 出土位置・注記：6 トレ 時代時期：縄文時代中期 (大木 8a 式) 器種：深鉢形土器 文様：隆帯，単節斜縄文 (LR) 備考：胎土に金雲母を含む

8 出土位置・注記：8 トレ 時代時期：縄文時代中期 (阿玉台 I b 式) 器種：深鉢形土器 文様：沈線文，角押文 備考：胎土に金雲母を含む

9 出土位置・注記：8 トレ 時代時期：縄文時代中期 (阿玉台式) 器種：深鉢形土器 文様：隆帯

10 出土位置・注記：8 トレ 時代時期：縄文時代中期 (阿玉台式) 器種：深鉢形土器

11 出土位置・注記：8 トレ 時代時期：縄文時代中期 (大木 8a 式) 器種：深鉢形土器 文様：隆帯，単節斜縄文 (RL) 備考：器外面に炭化物付着

12 出土位置・注記：9 トレ 時代時期：縄文時代中期 (大木 8a 式) 器種：深鉢形土器 文様：隆帯，沈線文 備考：器外面に炭化物付着

13 出土位置・注記：9 トレ 時代時期：縄文時代中期 (大木 8a 式) 器種：深鉢形土器 文様：隆帯，無節斜縄文 (L)

14 出土位置・注記：9 トレ 時代時期：縄文時代中期 器種：深鉢形土器 文様：単節斜縄文 (LR) 備考：胎土に金雲母を含む

15 出土位置・注記：9 トレ 時代時期：縄文時代中期 器種：深鉢形土器 文様：単節斜縄文 (LR)

16 出土位置・注記：9 トレ 時代時期：縄文時代中期 器種：深鉢形土器 法量：底径 110 mm (残存率 15%) 備考：底面に敷物? の痕跡あり，胎土に金雲母を含む

17 出土位置・注記：9 トレ 時代時期：縄文時代中期 器種：浅鉢形土器 備考：胎土に骨針を含む

18 出土位置・注記：10 トレ 時代時期：縄文時代中期 器種：深鉢形土器 文様：単節斜縄文 (RL)

19 出土位置・注記：10 トレ 時代時期：縄文時代中期 器種：深鉢形土器 文様：単節斜縄文 (RL) 備考：胎土に金雲母を含む

20 出土位置・注記：11 トレ 時代時期：縄文時代中期 (大木 8a 式) 器種：深鉢形土器 文様：隆帯，沈線文 備考：器外面に炭化物付着

21 出土位置・注記：11 トレ 時代時期：縄文時代中期 (大木 8a 式) 器種：深鉢形土器 文様：隆帯，単節斜縄文 (LR)

22 出土位置・注記：11 トレ 時代時期：縄文時代中期 (大木 8a 式) 器種：深鉢形土器 文様：平行沈線文，単節斜縄文 (RL)

23 出土位置・注記：11 トレ 時代時期：縄文時代中期 器種：深鉢形土器 文様：単節斜縄文 (LR)

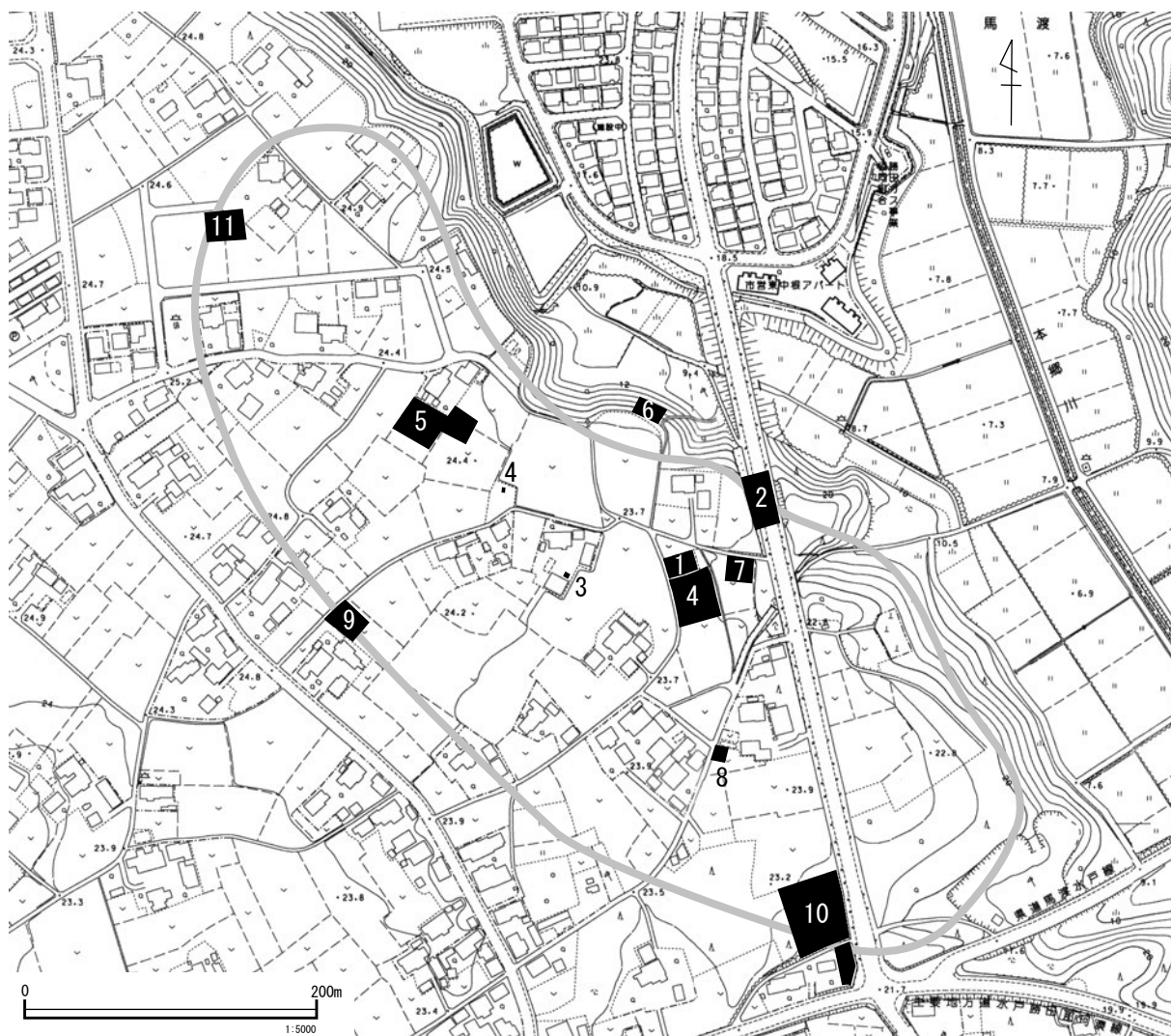
24 出土位置・注記：11 トレ 時代時期：縄文時代中期 器種：深鉢形土器 文様：単節斜縄文 (RL)

25 出土位置・注記：11 トレ 時代時期：縄文時代中期 器種：深鉢形土器 文様：単節斜縄文 (LR) 備考：胎土に骨針を含む

26 出土位置・注記：11 トレ 時代時期：縄文時代中期 器種：深鉢形土器 文様：無節斜縄文 (L)

27 出土位置・注記：12 トレ 時代時期：縄文時代中期 (大木 8a 式) 器種：深鉢形土器把手部分 文様：隆帯，沈線文，無節斜縄文 (L)

28 出土位置・注記：12 トレ 時代時期：縄文時代中期 器種：深鉢



第28図 君ヶ台遺跡の調査地点（数字は調査回数）

形土器 文様：無節斜縄文 (L)

29 出土位置・注記：13トレンチ 時代時期：縄文時代中期 器種：鉢形土器か

30 出土位置・注記：表採 時代時期：縄文時代中期（阿玉台式）器種：深鉢形土器 文様：隆帯 備考：成形の積上痕残る

31 出土位置・注記：表採 時代時期：縄文時代 器種：削器 石材：砂岩 法量：長さ70mm，幅121mm，厚さ21mm 重量：201.9g 備考：打面及び表面に自然面を残す，刃部は摩滅している

第27図

1 出土位置：15トレンチ 注記：— 材質：須恵器 器種：杯 残存：口縁部15% 法量：口径(12.6) 色調：灰色，口縁部外面暗色 胎土：砂(白，白透)，骨針微量 技法等：焼成硬質 備考：木葉下窯産か

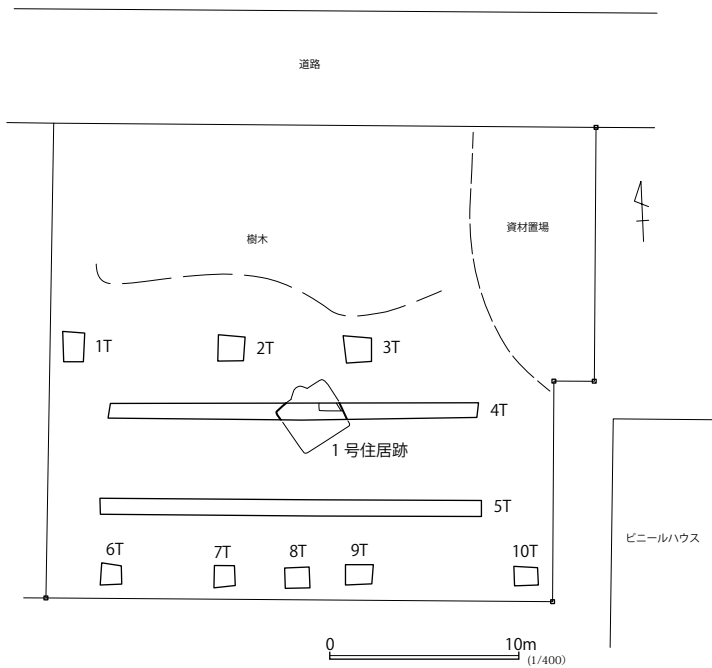
2 出土位置：11トレンチ 注記：— 材質：須恵器 器種：有台坏か 残存：底部20% 法量：高台径(8.3) 色調：明灰色 胎土：細砂，骨針微量 技法等：底部外面回転ヘラ削り。備考：産地不明

第6表 君ヶ台遺跡調査一覧

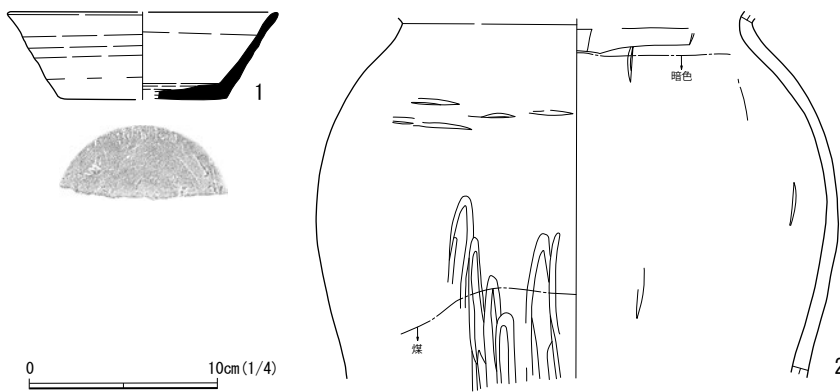
次	調査年度	調査主体	調査種別	遺構	文献
1	1951	勝田町郷土史編纂委員会	本調査	土坑群，住居跡	—
2	1979	勝田市教委	本調査	土坑16，住居跡4	1
3	1994	市教委	本調査	土坑3，住居跡2	2
4	1999	市教委	試掘	なし	3
5	2001	市教委	試掘	住居跡1，土坑1	4
6	2003	市教委	本調査	貝塚1	5
7	2006	市教委	本調査	住居跡1	—
8	2006	市教委	試掘	なし	6
9	2010	公社	試掘	土坑2，溝1	7
10	2015	公社	試掘	なし	8

文献

- 君ヶ台遺跡調査報告書
- 平成6年度市内遺跡発掘調査報告書
- 平成10年度市内遺跡発掘調査報告書
- 平成13年度市内遺跡発掘調査報告書
- 平成15年度市内遺跡発掘調査報告書
- 平成18年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 平成22年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 平成27年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書



第29図 君ヶ台遺跡第11次調査区



第30図 君ヶ台遺跡第11次調査区出土遺物

5 君ヶ台遺跡

(1) 第11次調査報告

調査地は、本郷川低地から北西方向に入り込む小支谷を望む台地縁辺から130mほど離れた地点に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は畑地であった。調査は10か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.4～0.6mを測る。調査の結果、遺構は、奈良時代後半の住居跡が1基確認された。遺物は、住居跡より須恵器杯、土師器甕が出土している。

遺物説明

第30図

1 出土位置：1住 注記：— 材質：須恵器 器種：杯 残存：体部



第31図 赤坂遺跡の調査地点（数字は調査回数）

第7表 赤坂遺跡調査一覧

次	調査年度	調査主体	調査種別	遺構	文献
1	2012	公社	試掘	なし	1
2	2014	公社	試掘	なし	2

文献

- 1 平成24年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 2 平成26年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書

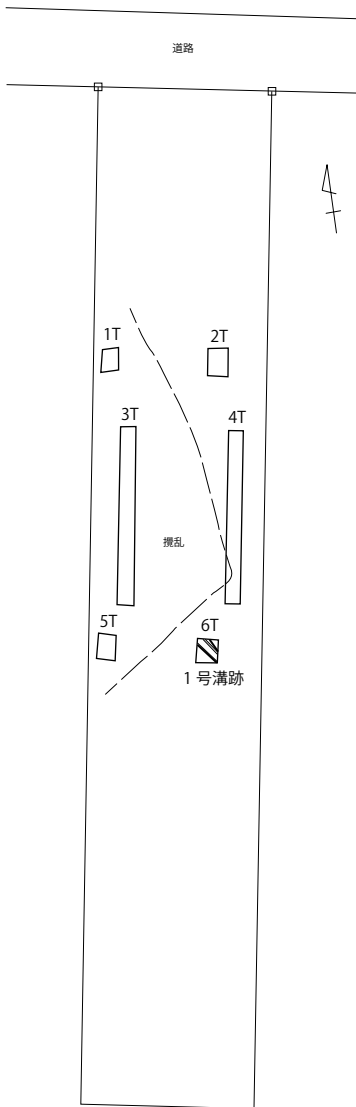
35%、底部40% 法量：口径(14.1)、器高(4.6)、底径(8.9) 色調：底部橙色、体部灰褐色 胎土：礫(白透少、灰少)、砂(灰、白透、白、透)、骨針技法等：回転ヘラ切り後底部外面ヘラナデ。口唇部内面摩滅。備考：木葉下窯産か

2 出土位置：1住 注記：— 材質：土師器 器種：甕 残存：胴部上半20% 法量：— 色調：外面橙褐色、胴下半黒色。内面暗褐色、口縁部褐色 胎土：礫(白多、白透多)、白雲母多 技法等：外面ナデの後、口縁部ヨコナデ、胴部下半縦方向ヘラミガキ。肩部外面に縦方向ヘラナデ痕が残る。内面ナデの後、頸部横方向ヘラナデ。胴部内面に横方向ヘラナデ痕が部分的に残る。備考：新治窯付近産

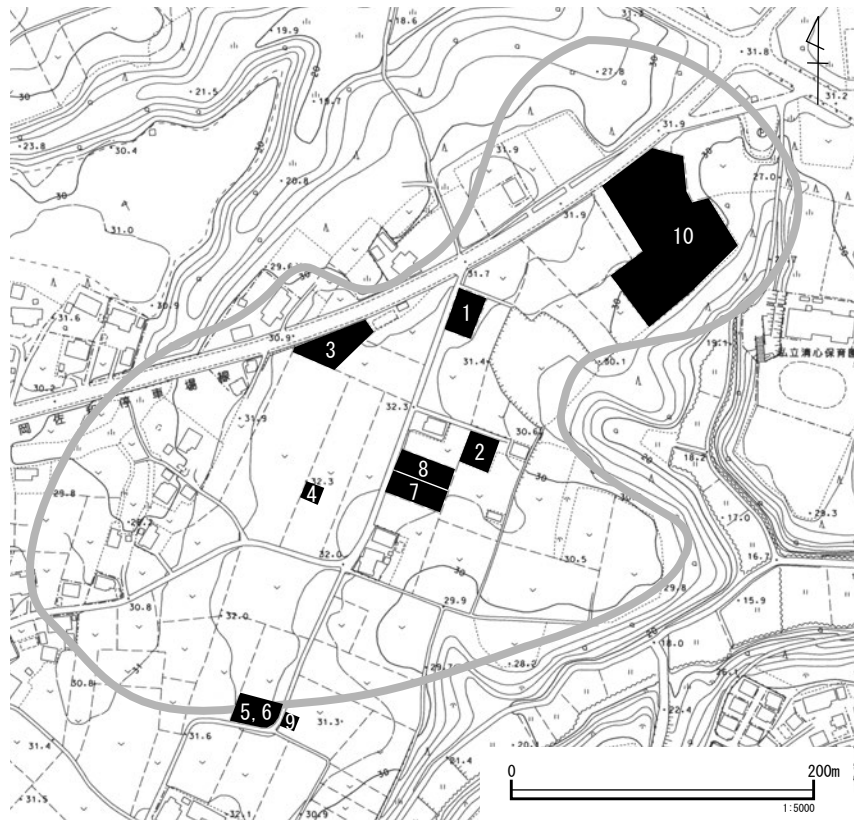
6 赤坂遺跡

(1) 第3次調査報告

調査地は、緩い起伏を呈する平坦な台地上に位置する。調査時は荒地であった。調査は6か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.7～1.4mを測る。調査の結果、調査区内は大きく攪乱されており、時期不明の溝跡1条が確認された。遺物は出土していない。



第32図 赤坂遺跡第3次調査区



第33図 高野富士山遺跡の調査地点（数字は調査回数）

第8表 高野富士山遺跡調査一覧

次	調査年度	調査主体	調査種別	遺構	文献
1	1982	勝田市教委	試掘	なし	1
2	1989	勝田市教委	試掘	住居跡 1(古墳)	2
3	2001	市教委	本調査	土坑墓 1(近世), 住居跡 1(古墳)	3
4	2007	市教委	試掘	なし	4
5	2010	公社	試掘	住居跡 3(平安), 土坑 2	5
6	2010	公社	本調査	住居跡 1(平安)	5
7	2013	公社	試掘	なし	6
8	2015	公社	試掘	なし	7

文献

- 1 昭和 57 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 2 平成元年度勝田市内遺跡発掘調査報告書
- 3 平成 13 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 4 平成 19 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 5 平成 22 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 6 平成 25 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 7 平成 27 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書

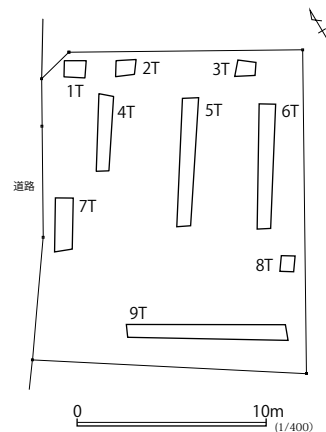
7 高野富士山遺跡

(1) 第9次調査報告

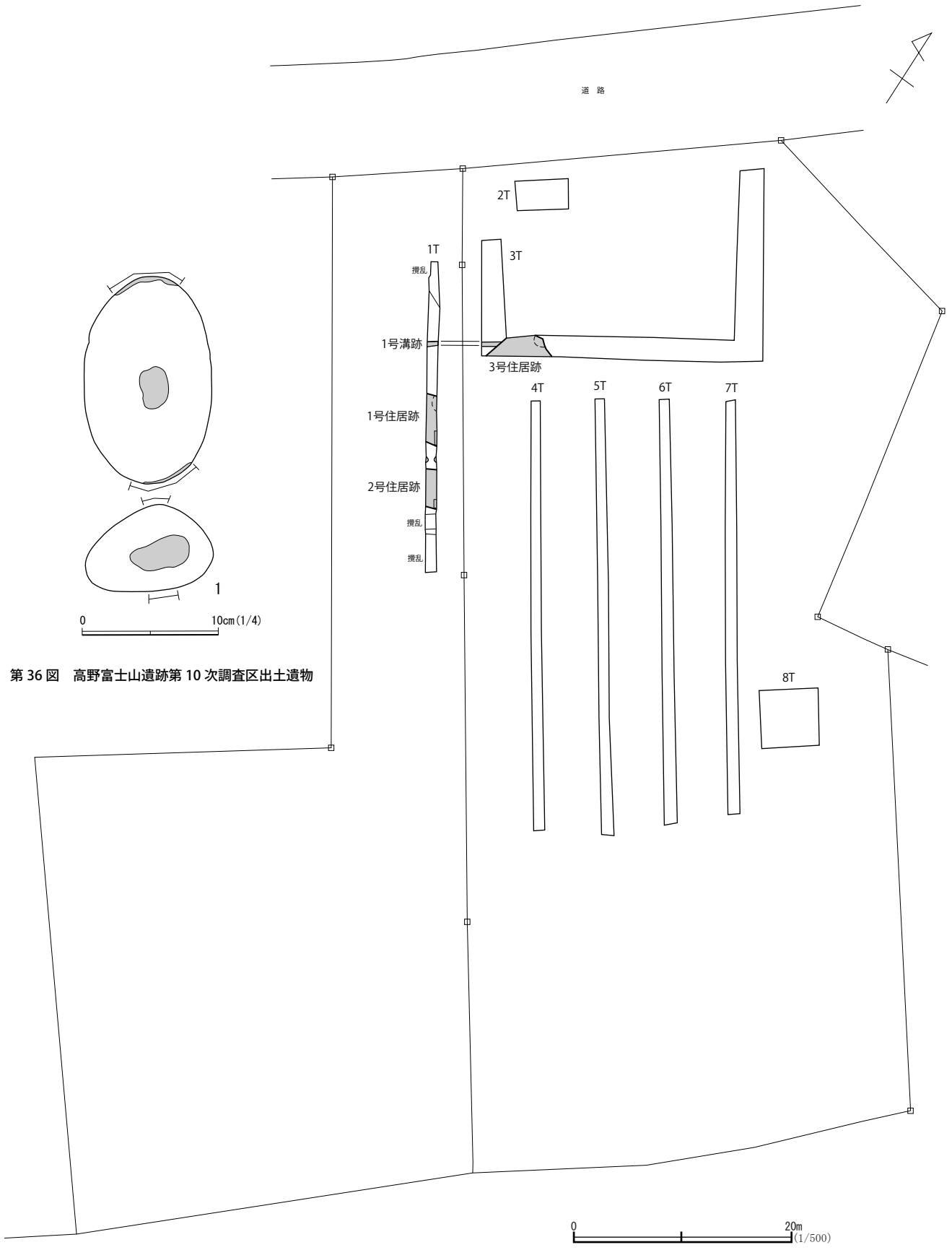
調査地は、新川が流れる旧真崎浦の低地から南西方向に入り込む谷から 80 m ほど離れた地点に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は畑地であった。調査は 9 か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.5 ~ 0.8 m を測る。調査の結果、遺構は確認されなかった。遺物は土師器・須恵器の小片が少量出土した。

(2) 第10次調査報告

調査地は、新川が流れる旧真崎浦の低地から南西方向



第34図 高野富士山遺跡第9次調査区

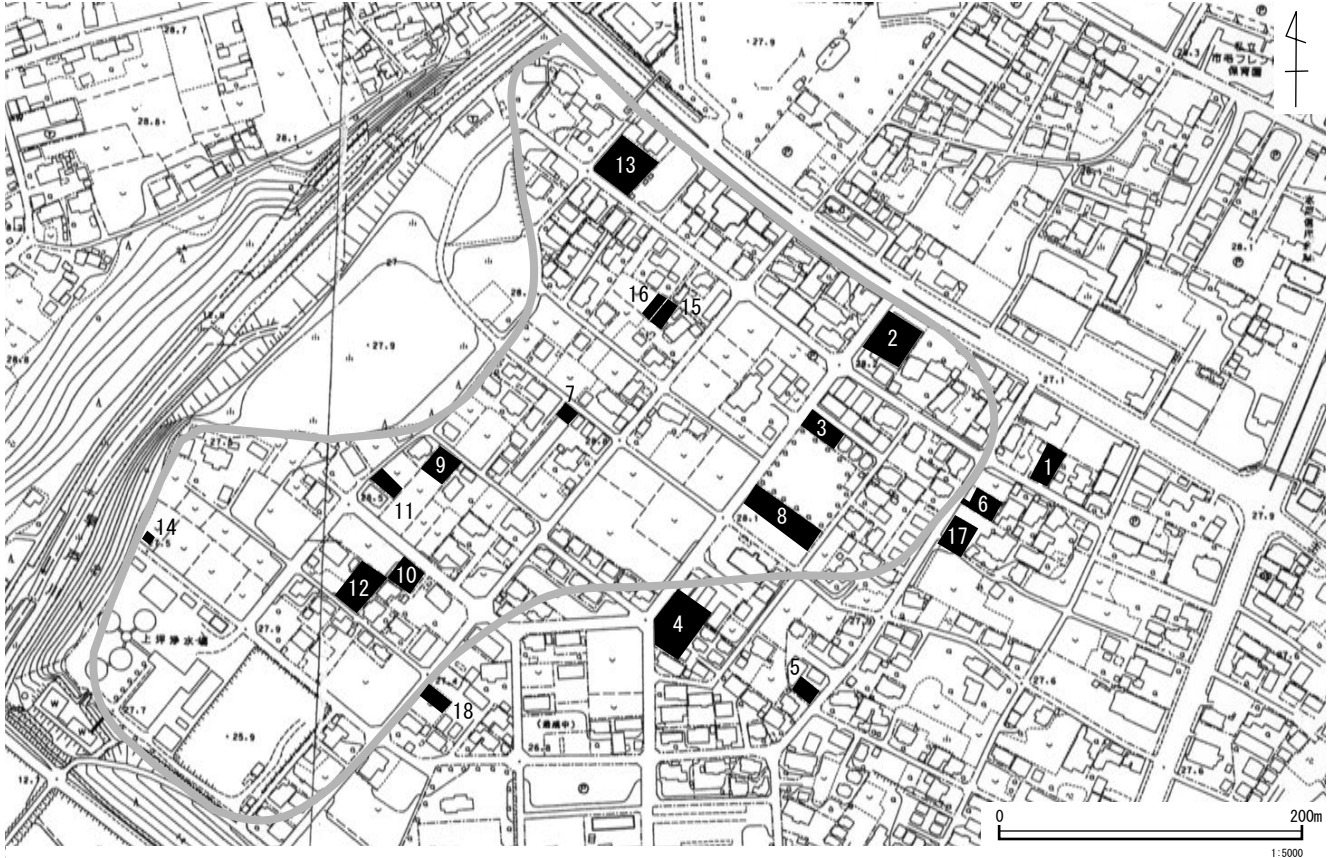


第 36 図 高野富士山遺跡第 10 次調査区出土遺物

第 35 図 高野富士山遺跡第 10 次調査区

に入り込む谷から北へ延びる小支谷の谷頭付近に位置し、南東に緩く傾斜する緩斜面を呈する。調査時は、調査区を2分する擁壁をはさみ、東側が畑地、西側が荒地であった。調査は8か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.4～

0.8 mを測る。調査の結果、住居跡を3基確認した。住居跡の時期は、少量出土した土器からみて、古墳時代後期から奈良時代頃の住居跡と思われる。住居跡からは土師器・須恵器片、石器（敲石）が出土した。溝およびピットは出土遺物がなく時期は不明である。なお、調査区か



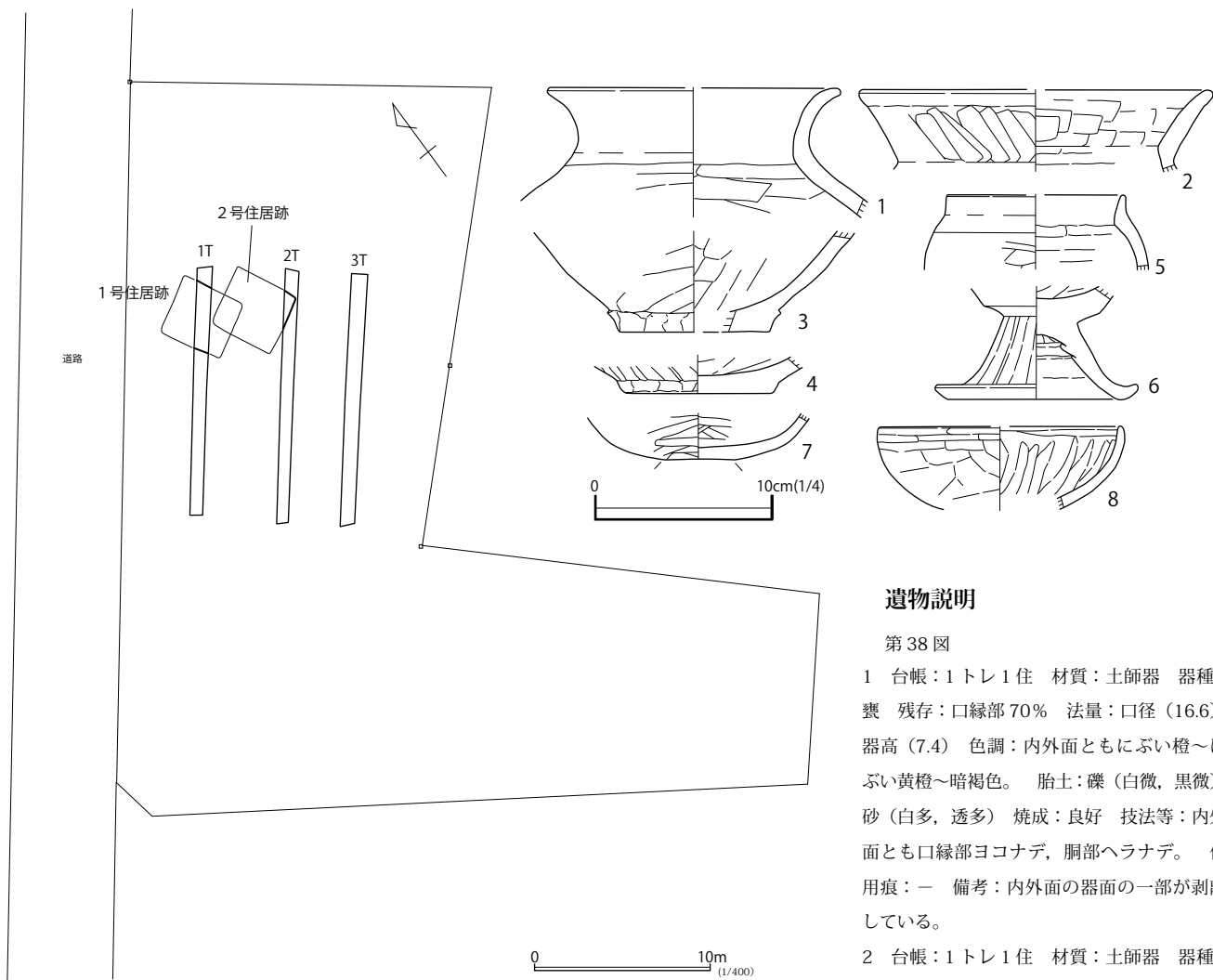
第37図 市毛上坪遺跡の調査地点（数字は調査回数）

第9表 市毛上坪遺跡調査一覧

次	調査年度	調査主体	調査種別	遺構	文献
1	1980	勝田市教委	本調査	住居跡1（古墳後期）	1
2	1985	勝田市教委	本調査	住居跡1（古墳）	なし
3	1985	勝田市教委	試掘調査	なし	2
4	1985	勝田市教委	本調査	住居跡2（平安）、溝跡1（時期不明）、土坑10	2
5	1986	勝田市教委	試掘	なし	3
6	1991	勝田市教委	試掘	なし	4
7	1992	勝田市教委	本調査	溝跡1（時期不明）	5
8	1996	市教委	試掘	なし	6
9	2006	市教委	試掘	なし	7
10	2006	市教委	本調査	住居跡2（古墳後期1、平安1）、土坑1	7
11	2006	市教委	試掘	住居跡2（古墳後期1、平安1）、溝跡1（時期不明）	7
12	2012	公社	試掘	住居跡14（古墳時代か）	8
13	2013	公社	試掘	住居跡1（古墳前期）	9
14	2014	公社	試掘	住居跡1（古墳）、土坑1（時期不明）	10
15	2015	公社	試掘	住居跡1（古墳）、溝跡1（時期不明）	11
16	2016	公社	試掘	住居跡2（古墳）	12

文献

- 1 市内遺跡発掘調査報告書（昭和55年度）
- 2 昭和60年度市内遺跡発掘調査報告書
- 3 昭和61年度市内遺跡発掘調査報告書
- 4 平成3年度市内遺跡発掘調査報告書
- 5 平成4年度市内遺跡発掘調査報告書
- 6 平成8年度市内遺跡発掘調査報告書
- 7 平成18年度市内遺跡発掘調査報告書
- 8 平成24年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 9 平成25年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 10 平成26年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 11 平成27年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 12 平成28年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書



第 38 図 市毛上坪遺跡第 17 次調査区および出土遺物

遺物説明

第 38 図

- 1 台帳：1トレ1住 材質：土師器 器種：甕 残存：口縁部 70% 法量：口径（16.6），器高（7.4） 色調：内外面ともにぶい橙～にぶい黄橙～暗褐色。胎土：礫（白微，黒微），砂（白多，透多） 焼成：良好 技法等：内外面とも口縁部ヨコナデ，胴部ヘラナデ。使用痕：－ 備考：内外面の器面の一部が剥離している。
- 2 台帳：1トレ1住 材質：土師器 器種：甕 残存：口縁部 30% 法量：口径（20.2），器高（4.7） 色調：内外面とも赤褐～にぶい

らは，土師器，須恵器が少量出土している。

遺物説明

第 36 図

- 1 出土位置：1トレンチ1住S1 材質：石（砂岩） 器種：敲石 残存：完形 法量：長 15.2，幅 3.9，厚 6.2，重量 1153.2g 色調：灰色 技法等：敲打痕 4ヶ所あり

8 市毛上坪遺跡

(1) 第 17 次調査報告

調査地は，那珂川低地を望む台地縁辺から 440 m ほど離れた地点に位置し，平坦な地形を呈する。調査時は空き地であった。調査は 3 か所のトレンチを設定し，重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.8 ～ 1.0 m を測る。調査の結果，古墳時代の住居跡が 2 基確認された。遺物は住居跡から土師器甕・杯・高杯が出土している。

赤褐色。胎土：砂（白多，透多） 焼成：良好 技法等：内外面とも口縁部ヘラナデ。使用痕：－ 備考：－

3 台帳：1トレ1住 材質：土師器 器種：甕 残存：底部 20% 法量：器高（5.8），底径（8.6） 色調：外面橙色。内面暗赤褐色。胎土：砂（白多，透多） 焼成：良好 技法等：外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。使用痕：－ 備考：－

4 台帳：1トレ1住 材質：土師器 器種：甕 残存：底部 30% 法量：器高（2.1），底径（8.3） 色調：内外面ともにぶい黄橙色。胎土：小石（灰微），礫（白微），砂（白多，透多） 焼成：良好 技法等：外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。使用痕：－ 備考：－

5 台帳：1トレ1住 材質：土師器 器種：鉢？ 残存：口縁部 10% 法量：口径（10.2），器高（4.2） 色調：内外面とも橙色。胎土：砂（白多，透多，黒少） 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ，胴部ヘラミガキ。内面口縁部ヨコナデ，胴部ヘラナデ。使用痕：口縁端部が摩滅している。備考：－

6 台帳：1トレ1住 材質：土師器 器種：高杯 残存：杯部底部のみ，脚部 60% 法量：器高（6.5），底径 11.5 色調：外面褐色。内面赤～褐色。胎土：砂（白多，透多） 焼成：良好 技法等：外面ヘラナデ，胴部ヘラナデ・ナデ。使用痕：－ 備考：外面器面が摩滅している。

7 台帳：2トレ2住 材質：土師器 器種：埴 残存：底部 100% 法量：

器高 (2.6), 底径 4.0 色調:内外面とも橙色。
胎土:礫 (白微), 砂 (白多, 透多, 灰少)
焼成:良好 技法等:外面ヘラ削り後ヘラミ
ガキ。内面ヘラミガキ。 使用痕:- 備考:
-

8 台帳:2トレ2住 材質:土師器 器種:
杯 残存:20% 法量:口径 (13.6), 器高 (4.7)
色調:外面赤色。内面にぶい橙色。胎土:砂 (白
少, 透多) 焼成:良好 技法等:外面ヘラ削
り後ヘラミガキ。内面ヘラナデ・ヘラミガキ。
使用痕:- 備考:-

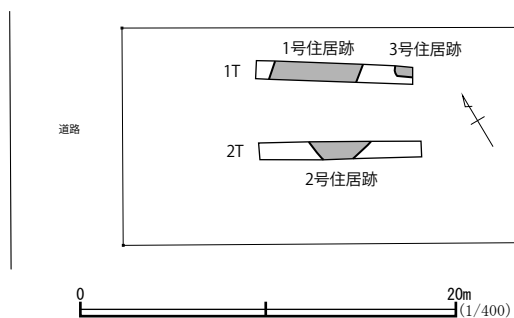
(2) 第18次調査報告

調査地は, 那珂川低地を望む台地
縁辺から 150 m ほど離れた地点に
位置し, 平坦な地形を呈する。調査
時は空き地であった。調査は 2 か
所のトレンチを設定し, 重機による
表土除去を実施した。確認面まで
の深さは 0.6 ~ 0.7 m を測る。調査
の結果, 平安時代の住居跡が 2 基,
時期不明の住居跡が 1 基確認され
た。遺物は住居跡から土師器・須恵
器片が出土している。このほかトレ
ンチから縄文土器片が出土してい
る。

遺物説明

第 40 図

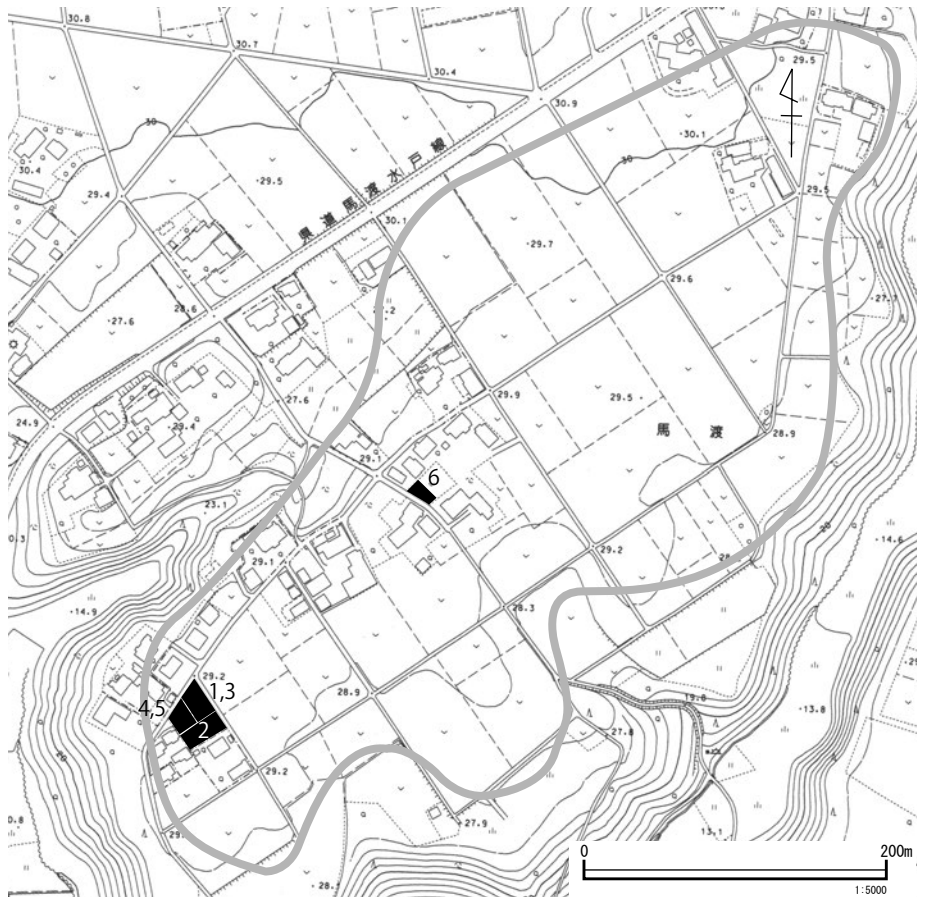
1 出土位置:2トレ 材質:須恵器 器種:



第 39 図 市毛上坪遺跡第 18 次調査区



第 40 図 市毛上坪遺跡第 18 次調査区出土遺物



第 41 図 本郷東遺跡の調査地点 (数字は調査次数)

第 10 表 本郷東遺跡調査一覧

次	調査年度	調査主体	調査種別	遺構	文献
1	2010	公社	試掘	住居跡 6 (古墳), 土坑 1	1
2	2010	公社	試掘	住居跡 2 (弥生 1, 不明 1), ビット 26	1
3	2010	公社	本調査	住居跡 1 (古墳)	1
4	2016	公社	試掘	住居跡 3 (古墳 2, 奈良・平安 1)	2
5	2016	公社	本調査	住居跡 4 (古墳 3, 不明 1)	2

文献

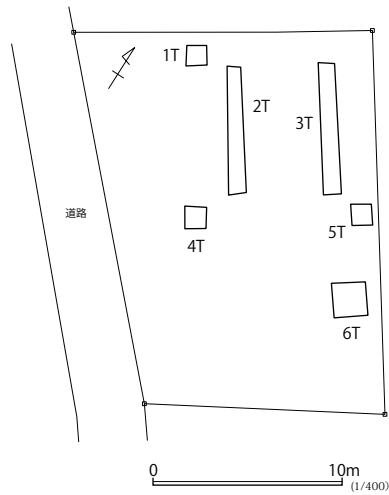
- 1 平成 22 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 2 平成 28 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書

杯 残存:底部 25% 法量:底径 (6.7) 色調:灰色 胎土:礫 (灰,
白透少), 砂 (白多, 灰, 透少), 骨針少 技法等:回転ヘラ切り。外面
底部周縁摩滅。 備考:木葉下窯産か

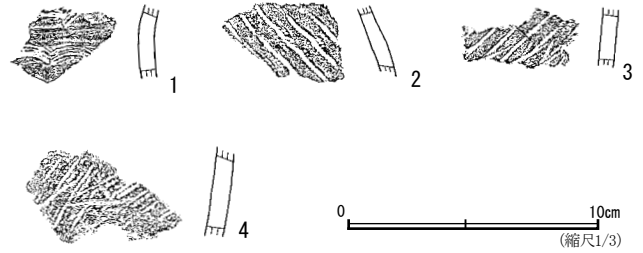
9 本郷東遺跡

(1) 第 6 次調査報告

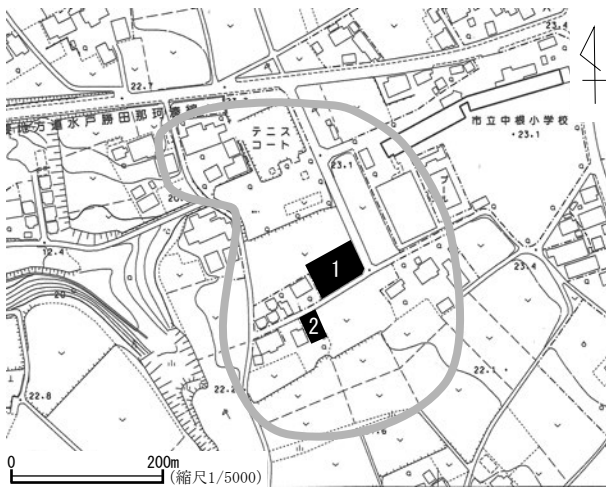
調査地は, 本郷川の低地から北東へ入り込む小さな谷
の谷頭付近に位置し, 平坦な地形を呈する。調査時は荒
地であった。調査は 6 か所のトレンチを設定し, 重機
による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.6 ~



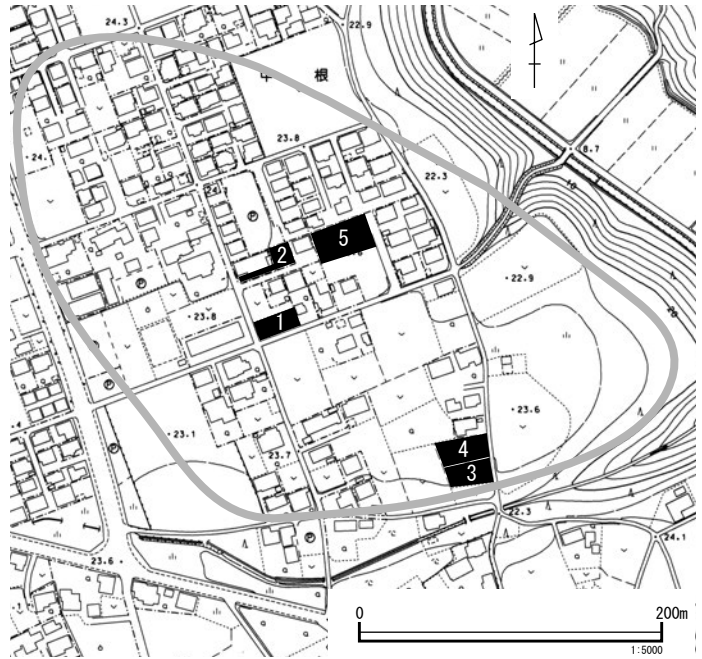
第42図 本郷東遺跡第6次調査区



第45図 野沢前遺跡第2次調査区出土遺物



第43図 野沢前遺跡の調査地点（数字は調査回数）



第46図 柴田遺跡の調査地点（数字は調査回数）

第11表 柴田遺跡調査一覧

次	調査年度	調査主体	調査種別	遺構	文献
1	1982	勝田市教委	本調査	住居跡2（縄文）	1
2	1986	勝田市教委	本調査	住居跡1（縄文）	2
3	2013	公社	試掘	住居跡3, 土坑1	3
4	2014	公社	試掘	住居跡2（縄文）, 土坑4（縄文）	4

文献

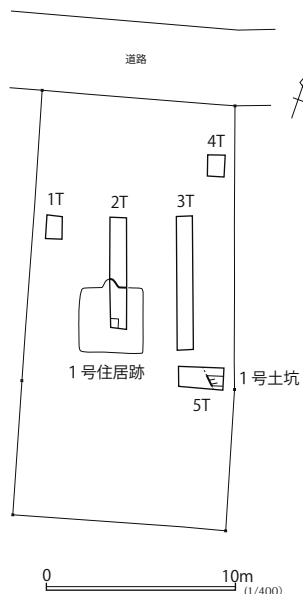
- 1 昭和57年度市内遺跡発掘調査報告書
- 2 昭和61年度市内遺跡発掘調査報告書
- 3 平成25年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 4 平成26年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書

0.8mを測る。調査の結果、遺構・遺物とも確認されなかった。

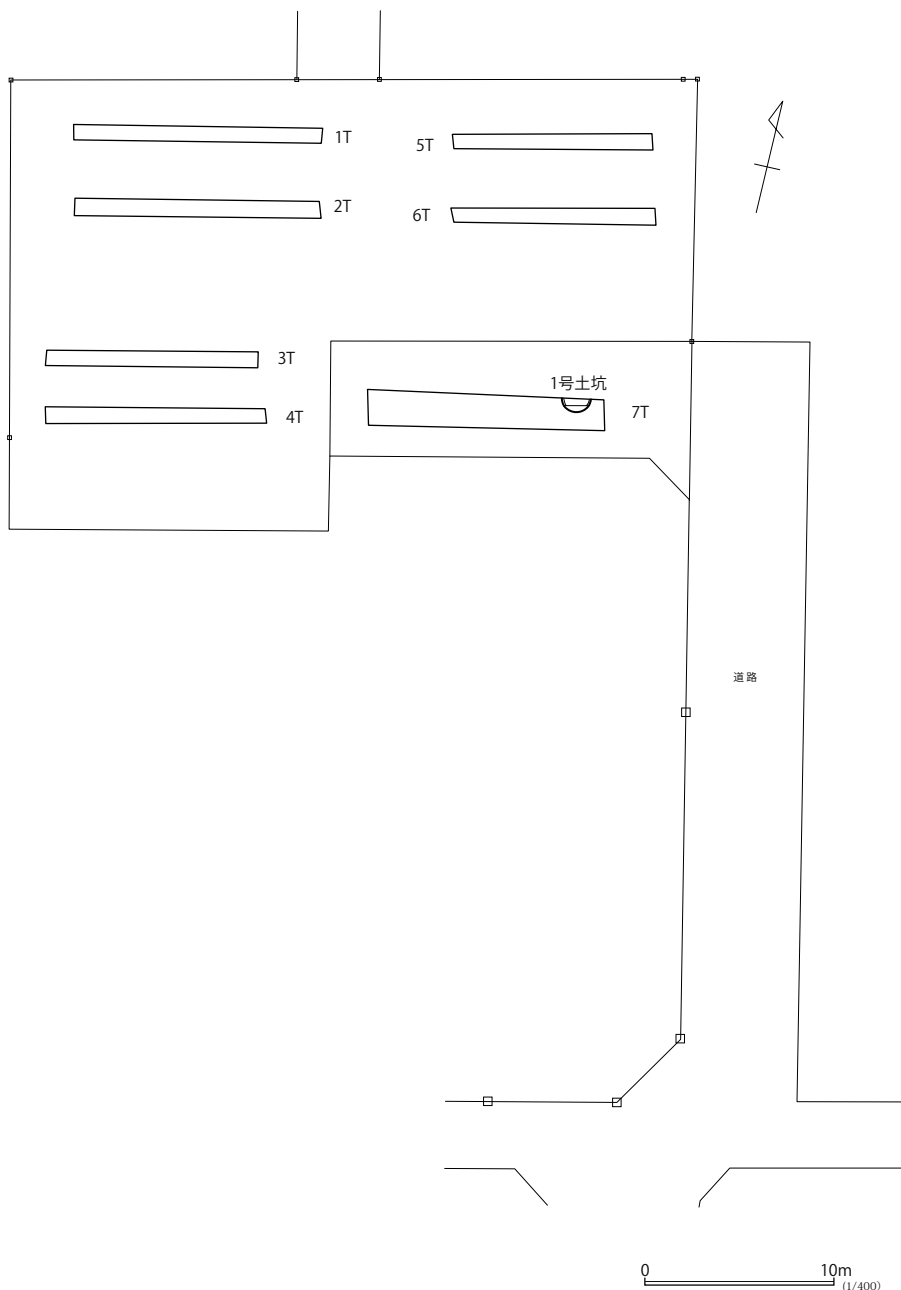
10 野沢前遺跡

(1) 第2次調査報告

野沢前遺跡は、第1次調査（試掘）が2001年に実



第44図 野沢前遺跡第2次調査区



第 47 図 柴田遺跡第 5 次調査区

施され、土坑が確認されているが、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器等の破片が出土したことから、周辺において当該期の遺構の存在が推定された（『平成 13 年度市内遺跡発掘調査報告書』）。今回の第 2 次調査は、大川の低地から東方に入り込む小支谷の谷頭付近に調査区は位置し、平坦な地形を呈する。調査時は空き地であった。調査は 5 か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.4～0.7 m を測る。調査の結果、平安時代の住居跡が 1 基確認された。出土した須恵器杯・蓋、土師器甕からみて、9 世紀の住居跡であろう。一部掘り込んでみたところ、床面までの深さは 52cm 程であった。このほか時期不明の土坑 1

基が確認されている。出土した遺物はいずれも小片であり、土師器、須恵器、弥生土器が出土した。

遺物説明

第 45 図

- 1 出土位置・注記：2 トレ 時代時期：弥生時代後期（東中根式）文様：櫛描文（櫛歯 4 本）
- 2 出土位置・注記：1 住 時代時期：弥生時代後期（東中根式）文様：付加条縄文（RL+L）備考：胎土に金雲母と骨針を含む
- 3 出土位置・注記：2 トレ 時代時期：弥生時代後期（東中根式）文様：付加条縄文（R-S）
- 4 出土位置・注記：2 トレ 時代時期：弥生時代後期（東中根式）文様：付加条縄文（LR+R）備考：胎土に金雲母含む

11 柴田遺跡

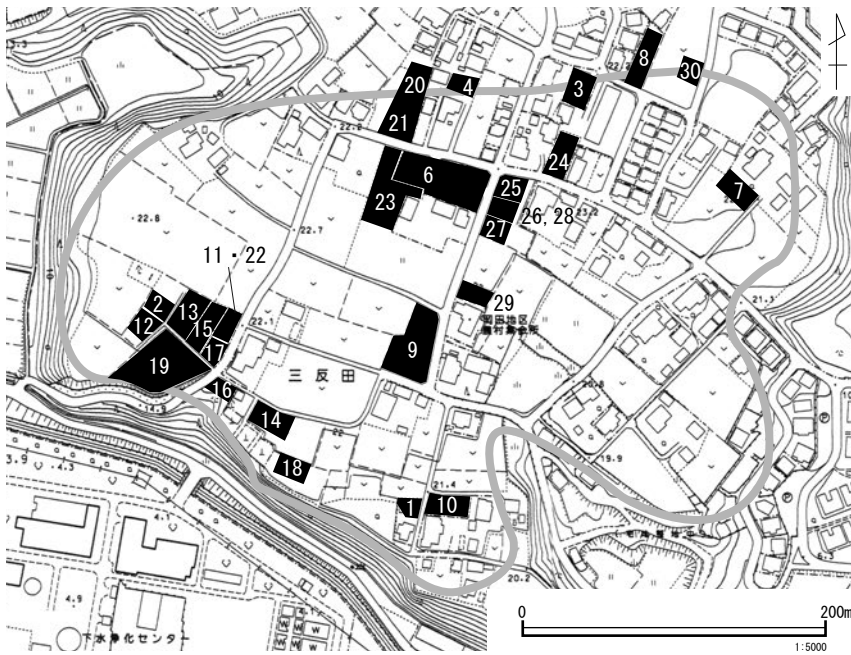
(1) 第 5 次調査報告

調査地は、大川の低地に臨む台地縁辺から 80 m ほど離れた地点に位置する。調査地は平坦な地形を呈し、調査時は空き地であった。調査は 7 か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.4～0.8 m を測る。調査の結果、時期不明の土坑が 1 基確認された。土坑を一部掘り込んでみたところ、深さは 46cm ほどであった。遺物は出土しておらず時期は不明であるが、壁が直立することや覆土が固かったことからみて、縄文時代の土坑の可能性はある。なお調査区から遺物は出土しなかった。

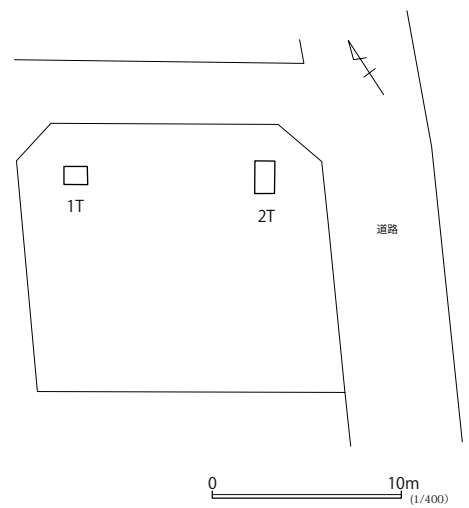
12 岡田遺跡

(1) 第 30 次調査報告

調査地は、那珂川低地から北方に入り込む小支谷から 35 m ほど離れた地点に位置する。調査地は平坦な地形を呈し、調査時は宅地であった。調査は 2 か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。1 トレンチは地表から深さ 120 cm に達しても盛土が続いてい



第 48 図 岡田遺跡の調査地点 (数字は調査次数)



第 49 図 岡田遺跡第 30 次調査区

第 12 表 岡田遺跡調査一覧

次	調査年度	調査主体	調査種別	主な遺構	文献
1	1982	勝田市教委	試掘	なし	1
2	1983	勝田市教委	本調査	住居跡 3 (十王台 1, 古墳後期 2)	2
3	1985	勝田市教委	試掘	住居跡 2 (古墳後期 1, 不明 1)	3
4	1990	勝田市教委	本調査	住居跡 3 (8 世紀 1, 9 世紀 1, 不明 1), 竪穴遺構 1	4
5	1991	勝田市教委	試掘	なし	なし
6	1997	市教委	本調査	住居跡 5 (十王台 1, 古墳後期 1, 8 世紀 2, 9 世紀 1)	5
7	2003	市教委	試掘	なし	6
8	2005	市教委	試掘	なし	7
9	2006	市教委	試掘	なし	なし
10	2006	市教委	試掘	住居跡 2 (時期不明)	8
11	2006	市教委	試掘	なし	8
12	2006	市教委	本調査	住居跡 1 (十王台)	8
13	2006	市教委	試掘	なし	8
14	2006	市教委	試掘	住居跡 (時期不明)	なし
15	2007	市教委	試掘	住居跡 1 (時期不明)	9
16	2007	市教委	本調査	住居跡 1 (古墳後期), 溝 1	9
17	2007	市教委	試掘	住居跡 1 (時期不明)	9
18	2010	公社	試掘	住居跡 2 (十王台 1, 時期不明 1)	10
19	2011	公社	試掘	住居跡 6 (十王台 4, 古墳前期 1, 時期不明 1)	11
20	2012	公社	試掘	住居跡 1 (時期不明)	12
21	2012	公社	試掘	住居跡 2 (古墳後期 1, 時期不明 1), 溝 1	12
22	2012	公社	試掘	土坑 2, ビット 9	12
23	2012	公社	試掘	住居跡 6 (奈良・平安 4, 時期不明 2), 土坑 2, ビット 4	12
24	2013	公社	試掘	住居跡 1 (奈良・平安)	13
25	2015	公社	試掘	住居跡 1 (古墳), ビット 1	14
26	2015	公社	試掘	住居跡 5 (弥生 1, 古墳 1, 平安 1, 時期不明 2), ビット 1 (奈良・平安)	14

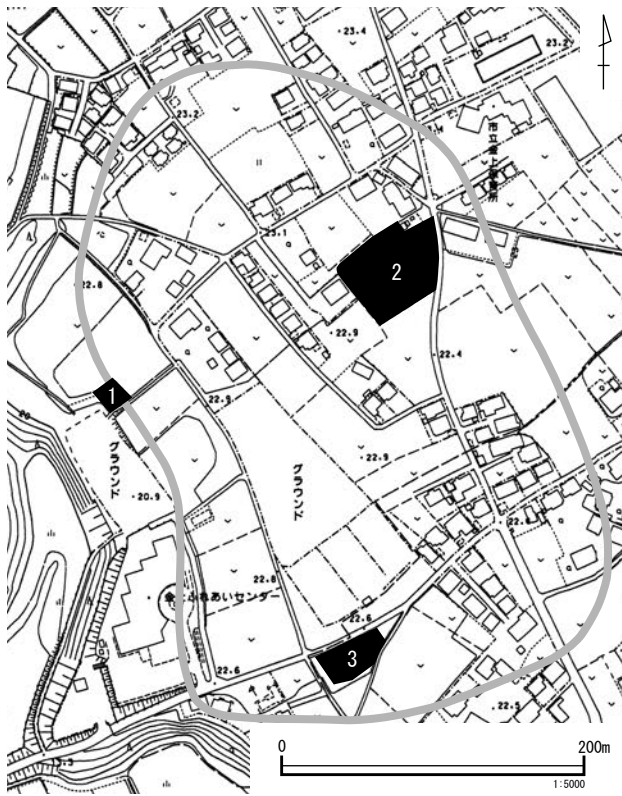
次	調査年度	調査主体	調査種別	主な遺構	文献
27	2015	公社	試掘	住居跡 1 (古墳), 土坑 1	14
28	2015	公社	本調査	住居跡 5 基 (弥生 1, 古墳 1, 平安 3), 土坑 2 (平安 1, 時期不明 1), 溝 1	15
29	2016	公社	試掘	なし	15

文献

- 1 昭和 57 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 2 昭和 58 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 3 昭和 60 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 4 平成元年度市内遺跡発掘調査報告書
- 5 岡田遺跡発掘調査報告書
- 6 平成 15 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 7 平成 17 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 8 平成 18 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 9 平成 19 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 10 平成 21 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 11 平成 23 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 12 平成 24 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 13 平成 25 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 14 平成 27 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 15 平成 28 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書

た。2 トレンチも地表から深さ 80 cm ほど盛土が確認され、そこからさらに 40 cm ほど黒土を掘り込んでも遺構確認面に達しなかった。また、調査対象地の南東隅で水道工事をしていたが、その部分でも 1 m 以上の土盛りが確認されていた。

以上の状況からみて、調査対象地は全体的に遺構確認面まで最低でも 120 cm 以上掘削する必要があるため、一部の掘り込みにとどめ調査を終了した。なお遺物は出土していない。



第 50 図 金上向山遺跡の調査地点 (数字は調査回数)

第 13 表 金上向山遺跡調査一覧

次	調査年度	調査主体	調査種別	主な遺構	文献
1	2002	市教委	本調査	住居跡 1 (古墳)	1
2	2011	公社	試掘	土坑 3, 溝 7	2

文献

- 1 平成 14 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 2 平成 23 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書

13 金上向山遺跡

(1) 第 3 次調査報告

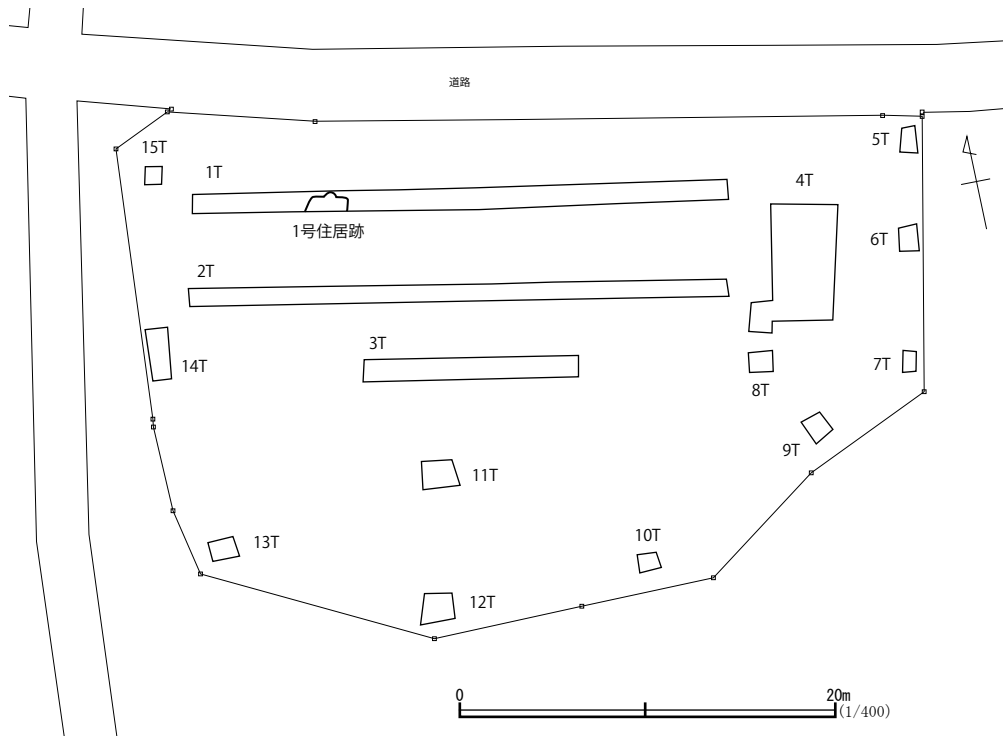
調査地は、那珂川低地から北方へ入り込む谷の縁辺部から 70m ほど離れた地点に立地する。調査地は、南に北東方向に向けて浅い谷が入り込んでいるため、その谷に向かい南方に緩く傾斜する地形を呈していた。調査時は畑地であった。調査対象地内に 15 か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.1 ~ 0.8 m を測る。調査の結果、北壁に竈を持つ平安時代の住居跡が 1 基確認された。出土した土師器甕からみて 9 世紀の住居跡であろう。

なお、調査区から出土した遺物はいずれも小片であり、土師器、須恵器、石器が出土している。

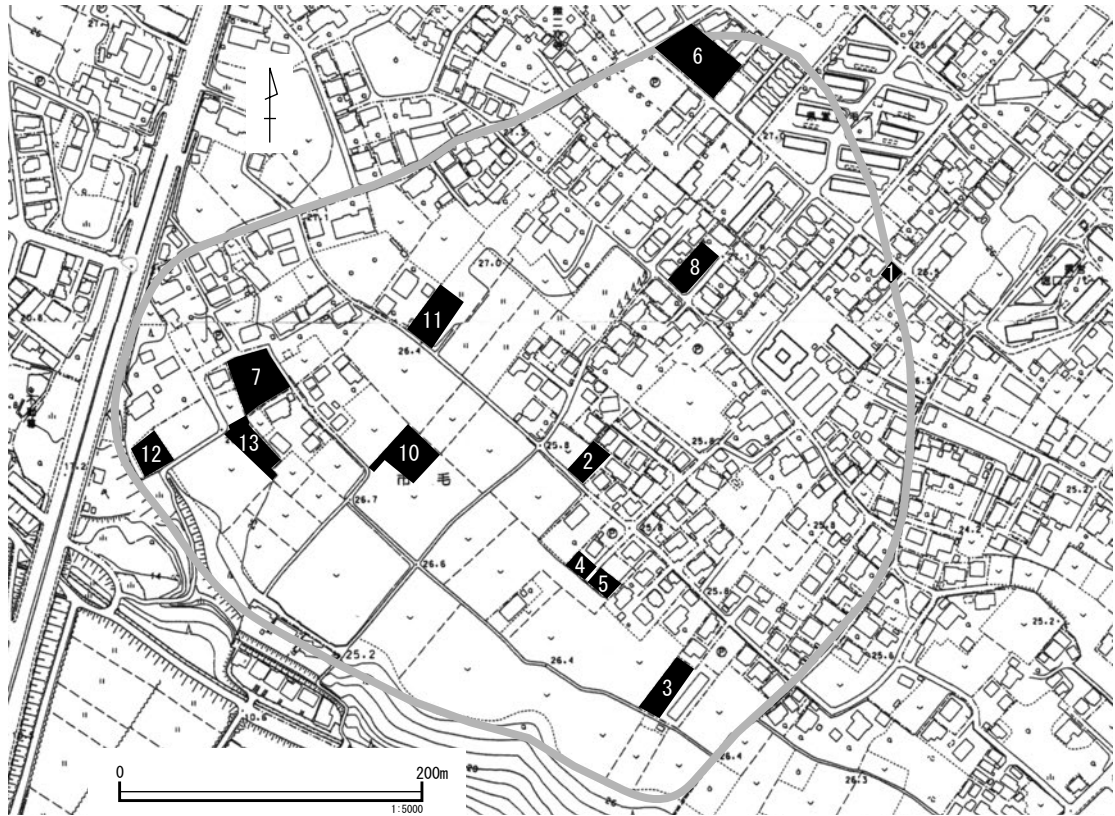
14 市毛下坪遺跡

(1) 第 13 次調査報告

調査地は、那珂川低地を望む台地縁辺部から 50m ほど離れた平坦地であり、調査時は畑地であった。調査対象地内に 4 か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.4 m を測る。調



第 51 図 金上向山遺跡第 3 次調査区



第 52 図 市毛下坪遺跡の調査地点（数字は調査回数）

第 14 表 市毛下坪遺跡調査一覧

次	調査年度	調査主体	調査種別	遺構	文献
1	1985	勝田市教委	本調査	土坑 1 (時期不明)	1
2	1987	勝田市教委	本調査	溝 1 (9 世紀)	2
3	1987	勝田市教委	本調査	住居 1 (8 世紀), 溝 2 (時期不明)	2
4	1989	勝田市教委	本調査	住居 1 (9 世紀), 溝 1 (時期不明)	3
5	1989	勝田市教委	本調査	溝 2 (時期不明)	3
6	1989	勝田市教委	本調査	住居 2 (8 世紀), 溝 2 (時期不明)	3
7	1991	勝田市教委	本調査	住居 3 (古墳後期 2, 9 世紀 1)	4
8	1993	勝田市教委	試掘調査	なし	5
9	2006	市教委	試掘調査	なし	—
10	2012	公社	試掘	住居 3 (9 世紀), 溝 5, 土坑 1, ピット 5 (時期不明)	6
11	2014	公社	試掘	住居 4 (平安), 溝 1	7
12	2016	公社	試掘	土坑 4 (近世 2, 時期不明 2)	8

文献

- 1 昭和 60 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 2 昭和 62 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 3 平成元年度勝田市内遺跡発掘調査報告書
- 4 平成 3 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 5 平成 5 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 6 平成 24 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 7 平成 26 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 8 平成 28 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書

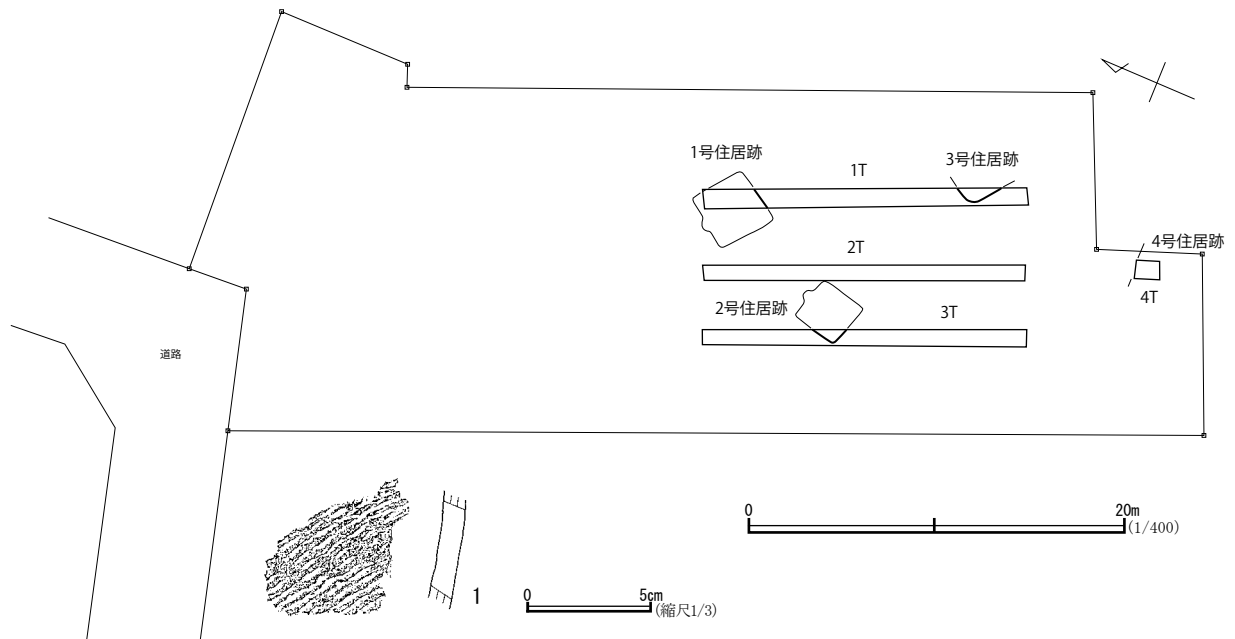
査の結果、古墳時代の住居跡が 3 基（1・3・4 住）、平安時代の住居跡が 1 基（2 住）確認された。4 トレンチは掘り下げた結果、全体的に住居床面となったため、4 号住居跡とした。

調査区から出土した遺物はいずれも小片であり、弥生土器、土師器、須恵器が出土している。

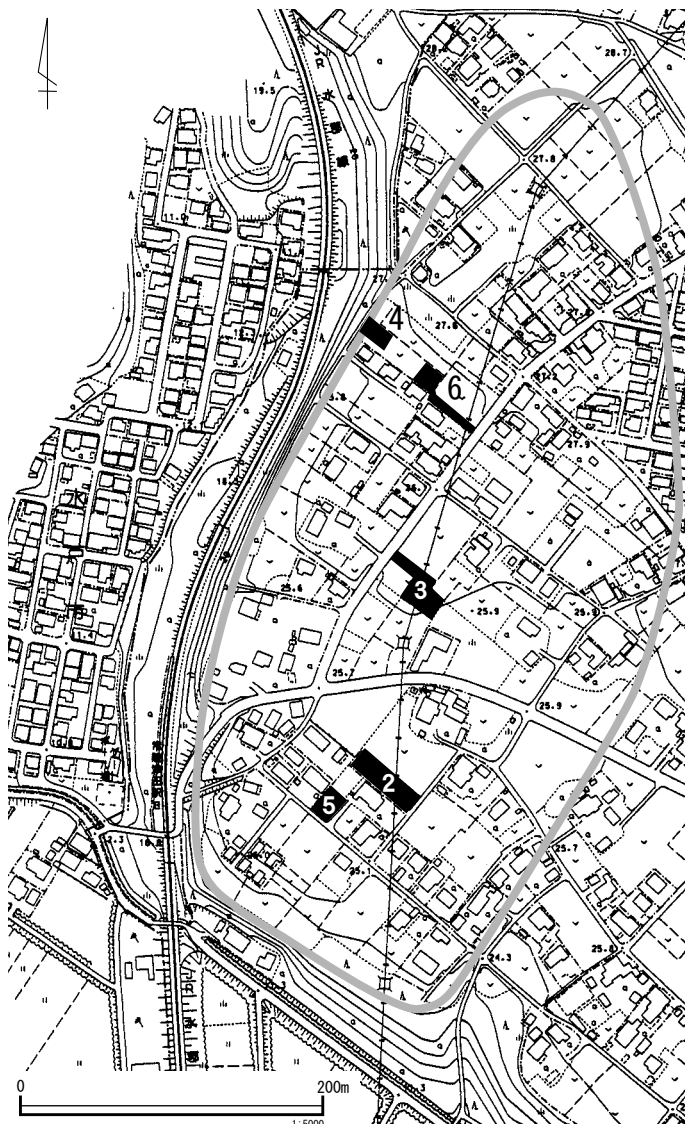
遺物説明

第 53 図

1 出土位置・注記：1 トレ 時代時期：弥生時代後期 器種：壺形土器（大型） 文様：付加条縄文（L-S, 軸縄不明）



第 53 図 市毛下坪遺跡第 13 次調査区および出土遺物



第 54 図 黒袴遺跡の調査地点 (数字は調査回数)

第 15 表 黒袴遺跡調査一覧

次	調査年度	調査主体	調査種別	遺構	文献
1	1965	不明	本調査	道路 1, 土坑 1	なし
2	1983	勝田市教委	本調査	住居 3(古墳前期 1, 平安 1), 土坑 3	1
3	2008	公社	試掘	溝 1	2
4	2015	公社	試掘	住居 1(古墳), 溝 1	3
5	2016	公社	試掘	住居 3(弥生 1, 古墳 2), 土坑 1	4

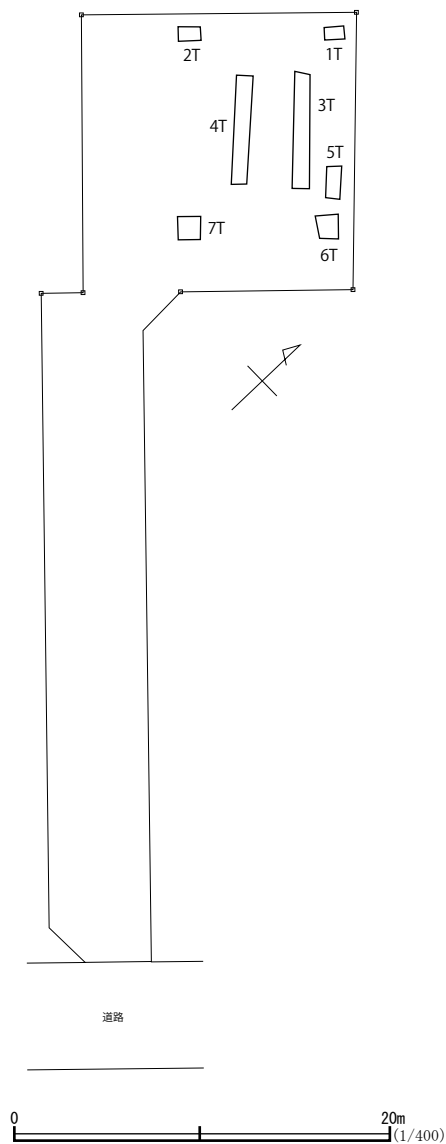
文献

- 1 昭和 58 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 2 平成 20 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 3 平成 27 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 4 平成 28 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書

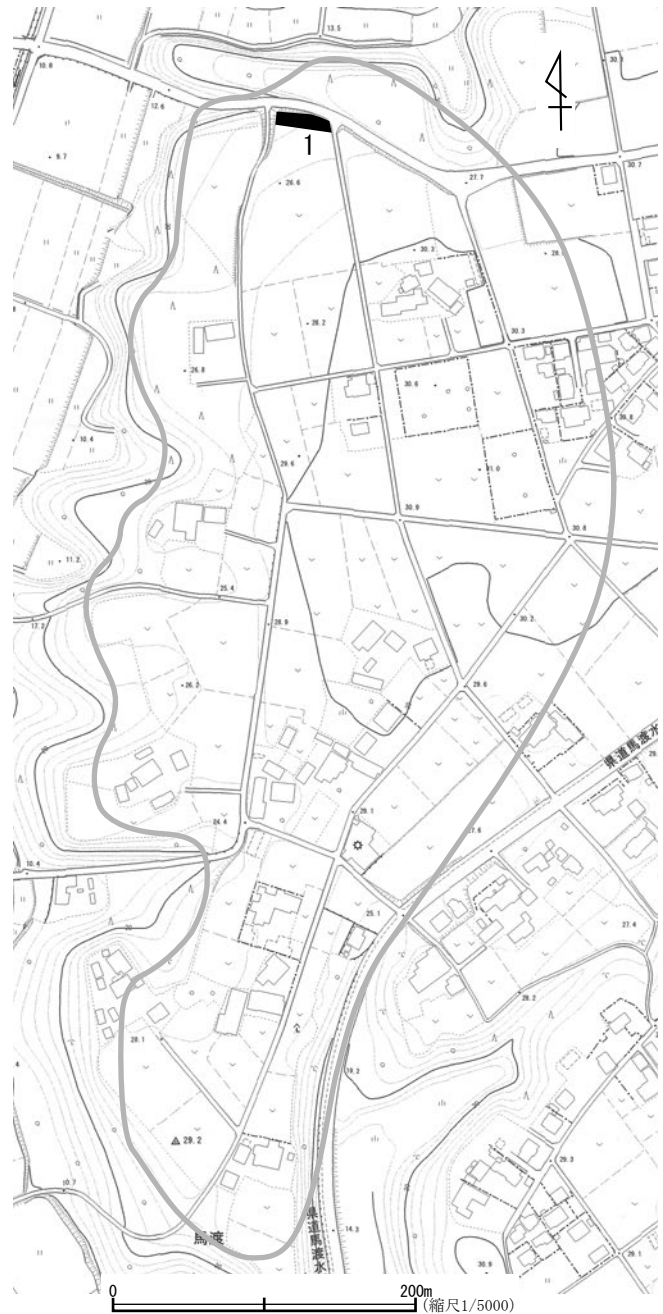
15 黒袴遺跡

(1) 第 6 次調査報告

調査地は、那珂川低地から北に入り込む谷を望む台地縁辺から 60 m ほど離れた平坦地であり、調査時は畑地であった。調査対象地内に 7 か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.5 ~ 0.7 m を測る。調査の結果、遺構、遺物とも確認されなかった。



第 55 図 黒袴遺跡第 6 次調査区



第 56 図 本郷西遺跡の調査地点 (数字は調査回数)

16 本郷西遺跡

(1) 第 1 次調査報告

調査地は、本郷川を望む台地縁辺部付近のやや西方に傾斜する土地であり、調査時は畑地であった。調査対象地内に 2 か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.2 ～ 1.2 m を測る。調査の結果、遺構は確認されなかった。遺物は表土から縄文土器が 1 点出土したのみである。

遺物説明

第 58 図

1 出土位置・注記：2 トレ 時代時期：縄文時代前期 (浮島式) 文様：口唇部沈線文 (棒状工具), 平行沈線文 (半截竹管)

17 三反田古墳群

(1) 第2次調査報告

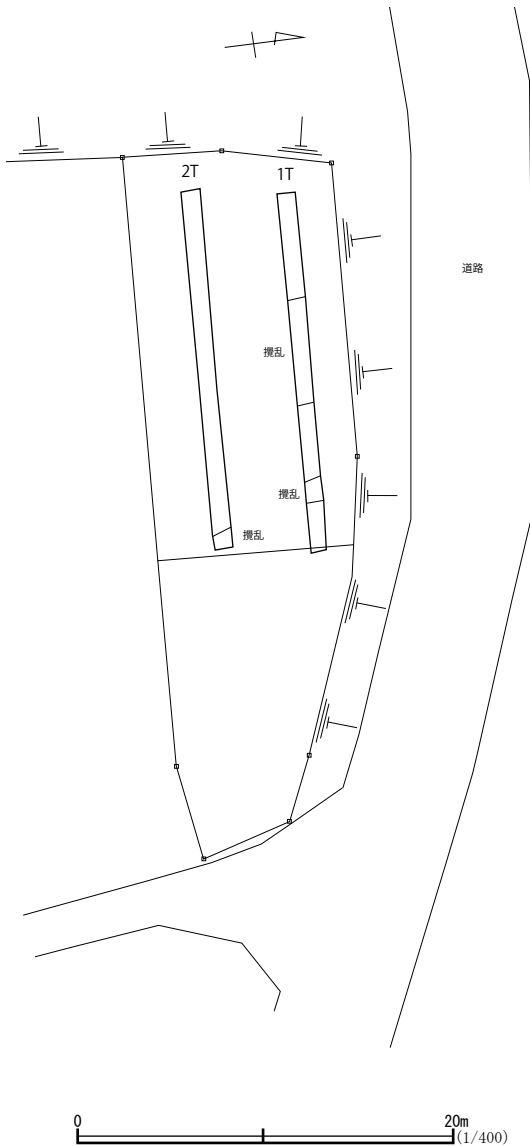
調査地は、那珂川低地を望む台地縁辺から320m、中丸川低地を望む台地縁辺部から310mほど離れており、三反田の台地中央部分に位置している。調査前は密生した篠藪であり、資材置場にするために地権者が刈り払いを実施したところ、第14号墳が現れたため、試掘調査が実施されることとなった。調査対象地内に7か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。

調査は、対象地にある塚2基にトレンチを入れて、周溝の有無を確認した。

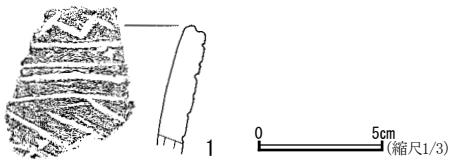
第14号墳は、3～6トレンチで周溝が確認されたため、やはり古墳になる可能性は高いだろう。古墳であるならば、塚の形状からみて、長方墳になるかもしれない。1・2トレンチ南側部分は大きく攪乱されており、この部分の塚の形状は変形が加えられていると考えられる。

第14号墳南側の小さな塚は、周溝が確認できず、また構築土の様子からも古墳とは考えられなかった。地権者からは掘削廃土を置いたものという話も聞いている。そのためこれは廃土を盛ったものであると考えた。

なお調査区から遺物は出土しなかった。



第57図 本郷西遺跡第1次調査区

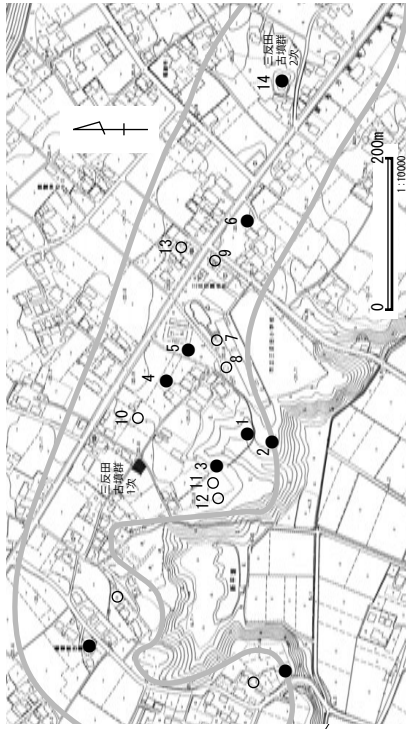


第58図 本郷西遺跡第1次調査区出土遺物

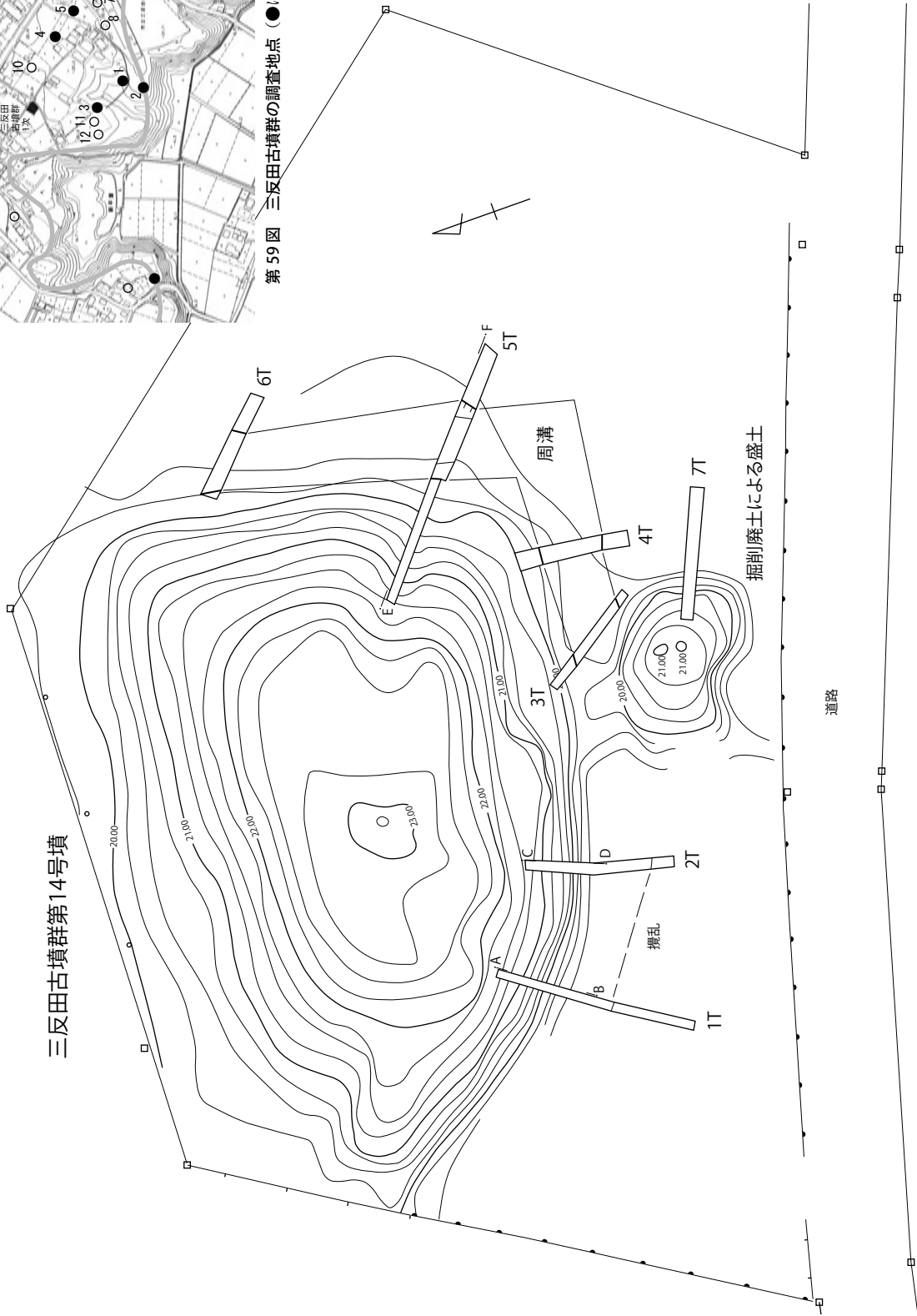
18 宿ノ内遺跡、西中根遺跡

(1) 宿ノ内第4次・西中根第4次調査報告

調査地は、中根川低地を望む台地縁辺から90mほど離れた平坦地であり、調査時は畑地であった。調査対象地内に9か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.4～0.6mを測る。調査の結果、西中根遺跡に入る部分より、古墳時代の住居跡が1基確認された。住居跡出土遺物は、土師器小片が少量出土したのみである。調査区からは、須恵器、土師器小片が少量出土している。

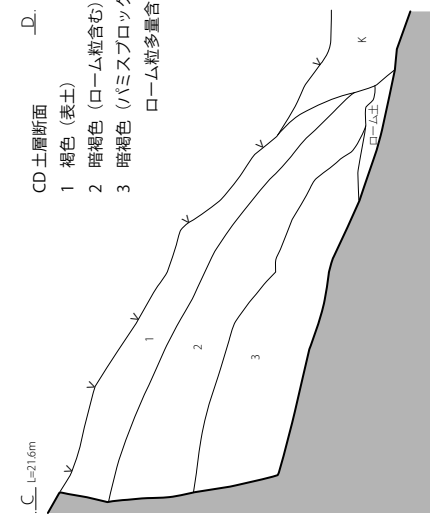
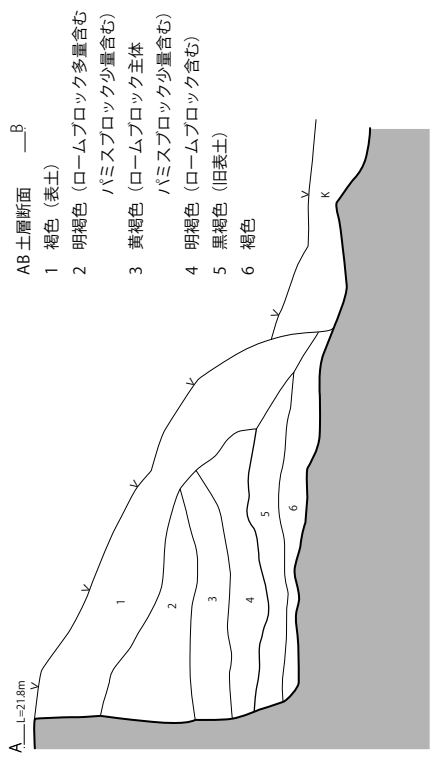


第59図 三反田古墳群の調査地点 (●は現存する古墳, ○は湮滅した古墳)

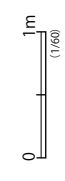
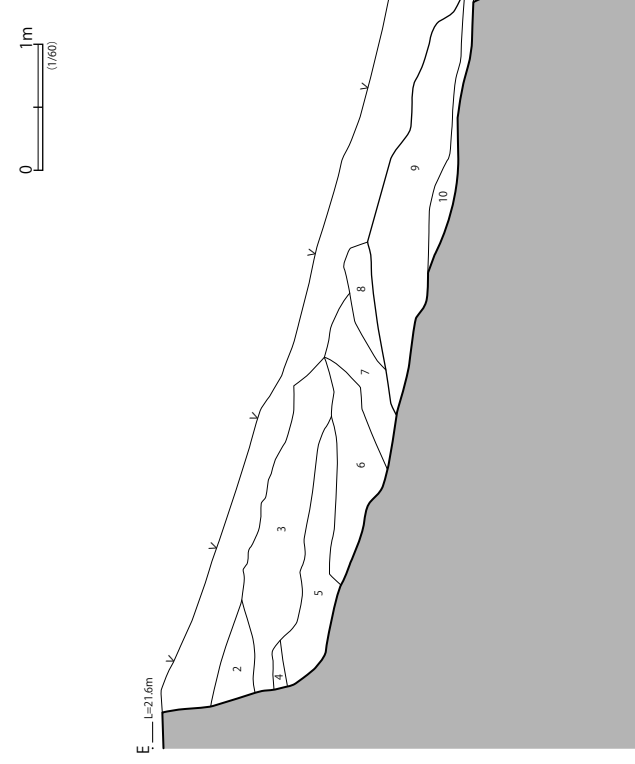


三反田古墳群第14号墳

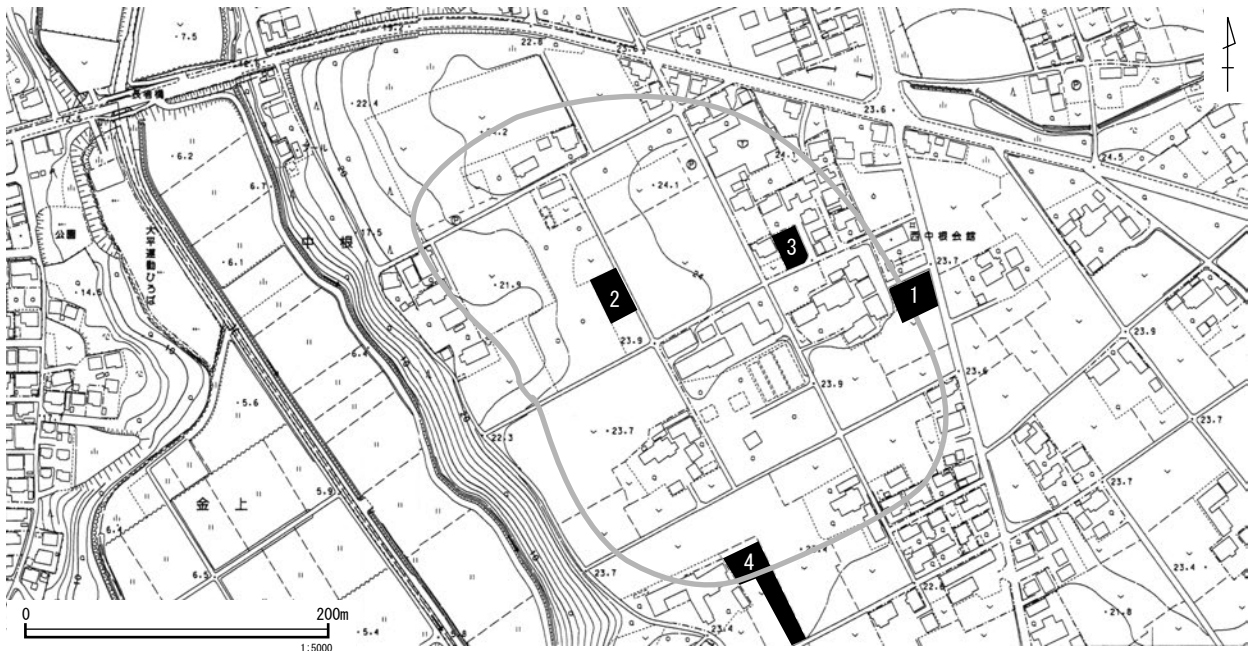
第60図 三反田古墳群第2次調査区



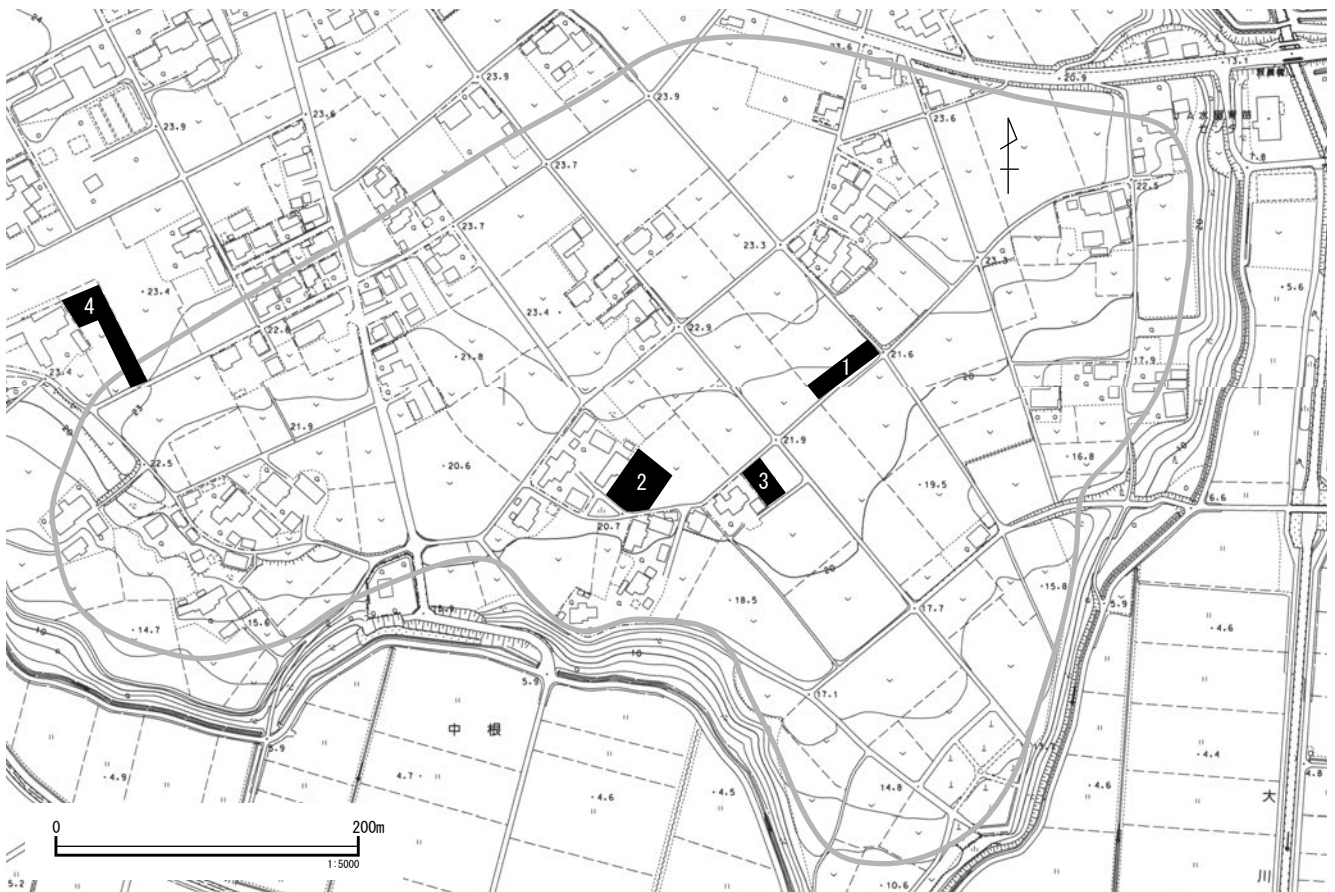
- EF 土層断面
- 1 褐色 (表土)
 - 2 黒褐色 (ローム土主体)
 - 3 黄褐色 (ローム土と黒褐色の混合層)
 - 4 明褐色 (ローム土と明褐色土の混合層)
 - 5 黄褐色 (ローム土と明褐色土の混合層)
 - 6 暗褐色 (ロームブロック多量含む)
 - 7 褐色 (ロームブロック多量含む)
 - 8 暗褐色 (ローム粒含む)
 - 9 黒褐色 (旧表土か)
 - 10 暗褐色
 - 11 褐色 (ローム粒多量含む)
 - 12 黒褐色 (ローム粒含む)
 - 13 褐色 (ローム粒やや多量含む 締まり有り)
 - 14 暗褐色 (ローム粒含む 褐色土混じる)
 - 15 暗褐色 (ローム粒含む)
 - 16 黒褐色 (褐色土混じる)
 - 17 黄褐色 (ローム土主体 褐色土混じる)
 - 18 黄褐色 (ローム土主体 暗褐色土混じる)
- F.



第 61 図 三反田古墳群第 2 次調査区第 14 号墳土層

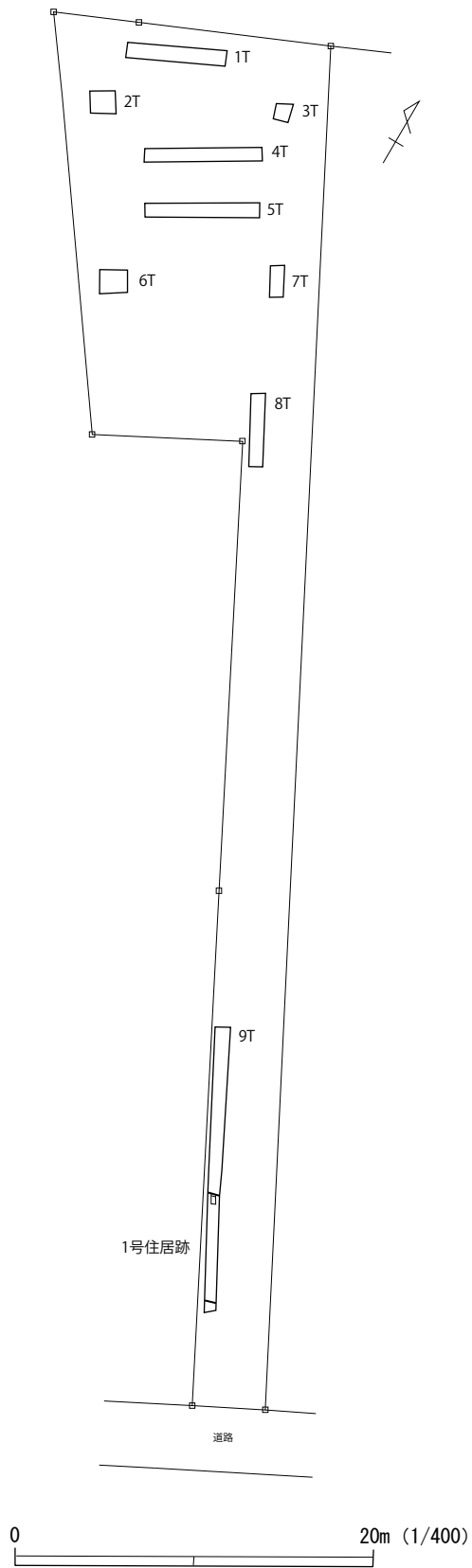


宿ノ内遺跡



西中根遺跡

第 62 図 宿ノ内遺跡，西中根遺跡の調査地点（数字は調査回数）



第 63 図 宿ノ内遺跡第 4 次, 西中根遺跡第 4 次調査区

Ⅲ 本調査報告

1 勝倉若宮遺跡第5次調査報告

(1) 調査の経過

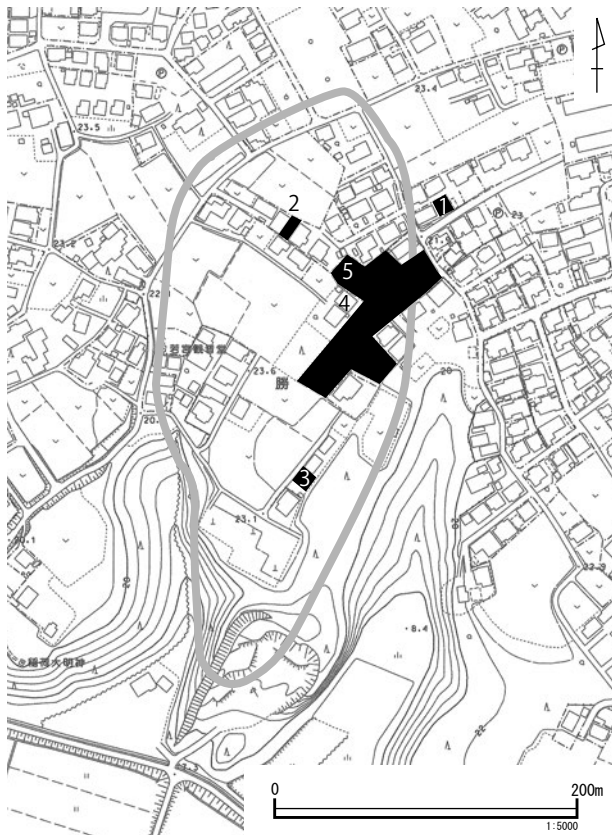
期間 / 平成 29 年 5 月 29 日～平成 29 年 6 月 2 日

担当 / 佐々木義則 面積 / 63 m²

時代 / 古墳・平安時代

遺構 / 竪穴住居跡 2 基 (古墳時代 1 基, 平安時代 1 基),

土坑 1 基 (時期不明), ピット 1 基 (時期不明)



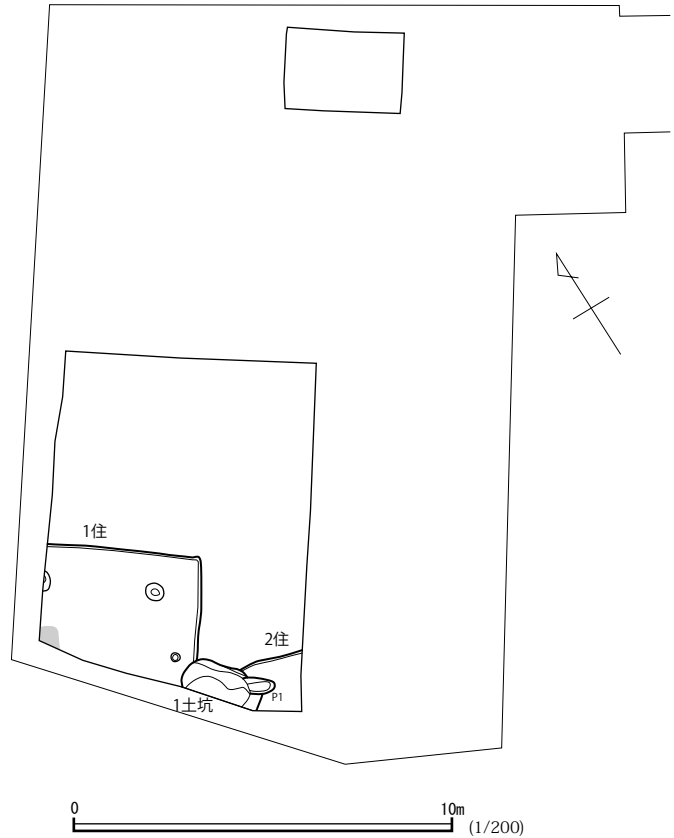
第 64 図 勝倉若宮遺跡の調査地点 (数字は調査回数)

第 16 表 勝倉若宮遺跡調査一覧

次	調査年度	調査主体	調査種別	遺構	文献
1	1984	勝田市教委	試掘	なし	1
2	1985	勝田市教委	本調査	住居跡 3 (弥生後期 1, 古墳前期 1, 平安 1)	2
3	1987	勝田市教委	本調査	住居跡 1 (奈良・平安)	3
4	2014	公社	試掘	住居跡 10 (古墳 4, 奈良・平安 6), 溝 3, ピット 1	4

文献

- 1 昭和 59 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 2 昭和 60 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 3 昭和 62 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 4 平成 26 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書



第 65 図 勝倉若宮遺跡第 5 次調査区

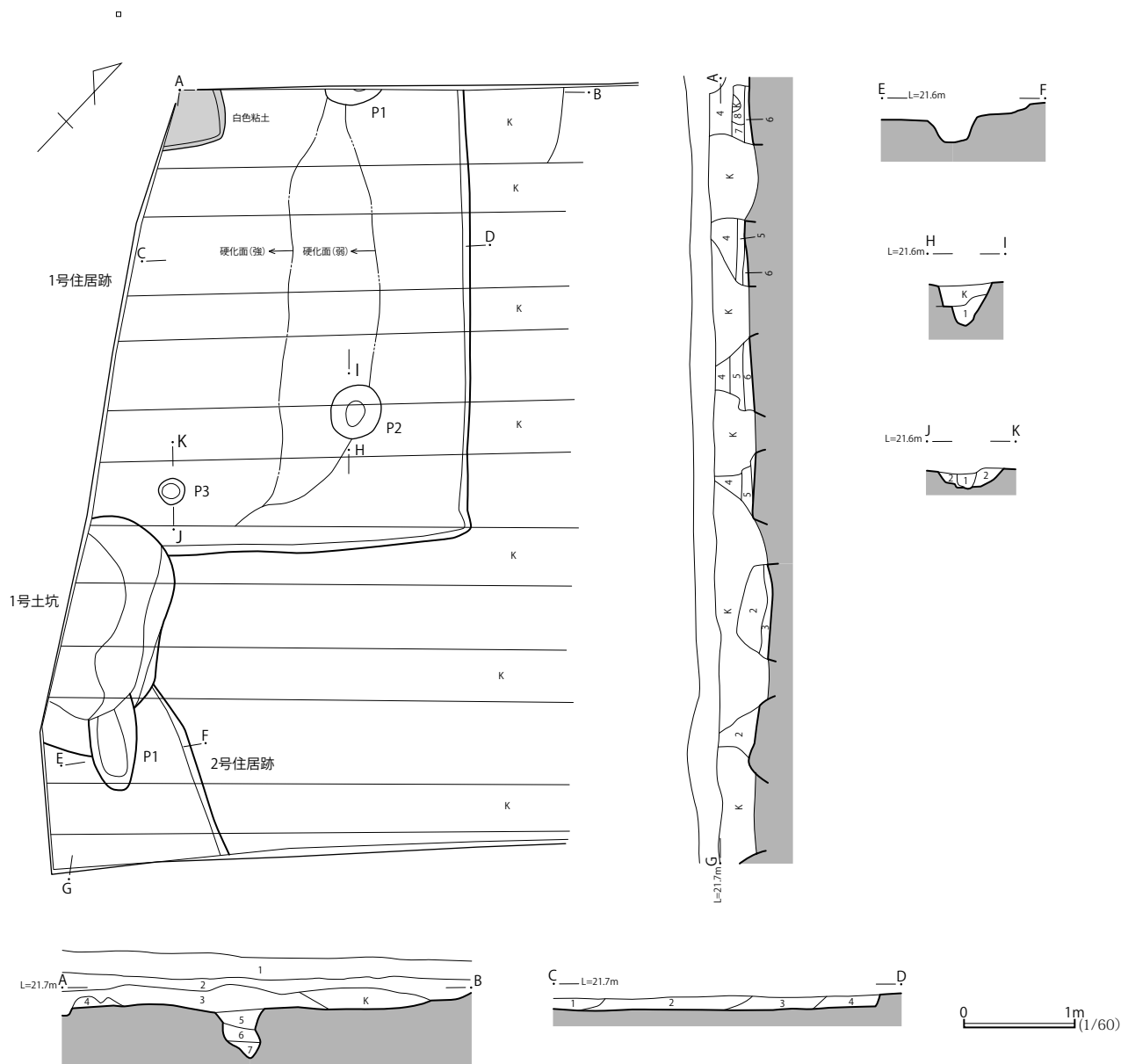
調査地は、那珂川低地から北に向かって入り込む小さな谷の谷頭付近に位置し、南東方向に緩やかに傾斜する地形を呈する。調査時は宅地であった。今回の調査は個人住宅建築に伴う発掘調査であり、建物部分を中心に調査区が設定された。当地区は試掘調査（第 4 次調査）がなされていたため、今回の調査区に係る遺構配置はおおよそ予想がついた。以下、簡単に調査の経過を記す。

5 月 29 日：重機による表土除去。遺構確認作業及び平面図作成。 5 月 30 日：遺構掘り込み 5 月 31 日：図面・写真による記録作業。夕方現場撤収。 6 月 2 日：重機による埋戻し。シート・ロープ・看板撤収。

(2) 住居跡

第 1 号住居跡

遺構 第 1 号土坑と重複するが、新旧は明らかでない。当住居跡の主軸方向は、N-43° -W を測る。竪穴部の規模は、主軸方向を南北とみて、柱穴や出入口ピットの位置から推定すると、東西 5.5 m、南北 5.3 m で、形状は正方形である。壁高は東壁 15 cm、南壁 13 cm を測る。壁周溝は認められなかった。支柱穴は P 1・2、出入口ピットは P3 が該当すると思われる。床面は支柱穴の



土層説明

AB 土層断面

- 1 暗褐色 (耕作土)
- 2 褐色 (ローム粒多量含む 耕作土)
- 3 明褐色 (ローム粒多量含む)
- 4 暗褐色 (ローム粒含む)
- 5 白褐色 (カマド粘土崩壊土)
- 6 褐色 (ローム粒含む)
- 7 明褐色 (ローム粒多量含む)

CD 土層断面

- 1 褐色 (白褐色粘土ブロック多量含む)
- 2 褐色 (ローム粒多量含む)
- 3 明褐色 (ローム粒多量含む)
- 4 暗褐色 (ローム粒多量含む)

GA 土層断面

- 1 暗褐色 (耕作土)

2 暗褐色 (ローム粒含む SK1)

- 3 暗褐色 (ロームブロック含む SK1)
- 4 暗褐色
- 5 明褐色 (ローム小ブロック多量含む 暗褐色土混じる)
- 6 黄褐色 (ロームブロック主体 掘形埋土)
- 7 明褐色
- 8 白褐色 (カマド粘土の崩壊土)
- 9 褐色 (ローム粒多量含む 耕作土)

HI 土層断面

- 1 褐色 (ローム粒含む)

JK 土層断面

- 1 明褐色 (ローム小ブロック多量含む 暗褐色土混じる)
- 2 明褐色 (ロームブロック多量含む 締めり有り)

第 66 図 勝倉若宮遺跡第 5 次調査区住居跡・土坑・ピット

内側が硬化するが、とくにピット 3 から竈推定位置にかけてが強く硬化していた。竈は白色粘土の位置からみて、北西壁中央部に設置されていたものであろう。竪穴部掘形は、隅部に浅い掘り込み A・D がみられるほか、出入口ピットあたりにも不整形の掘り込み E がみられた。また、支柱穴 P1・P2 の中間にピット状の B とそこから壁に向かって伸びる C が認められており、間仕切

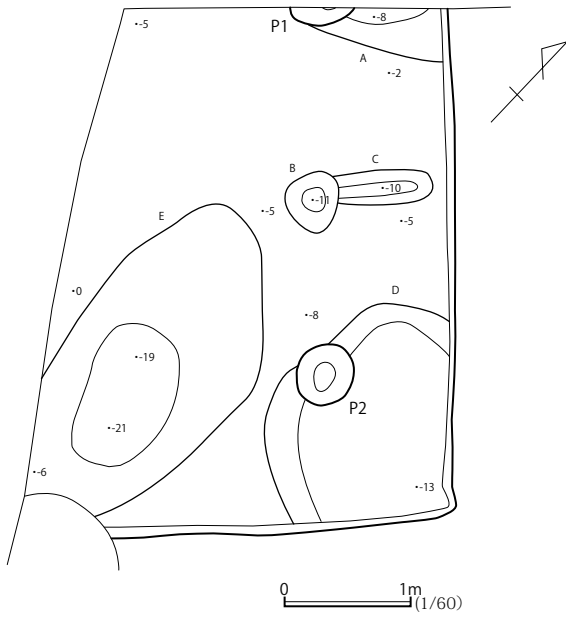
りに関わる痕跡かもしれない。

遺物出土状況 住居覆土が薄く、床面付近の遺存も少なかった。いずれも破片での出土である。

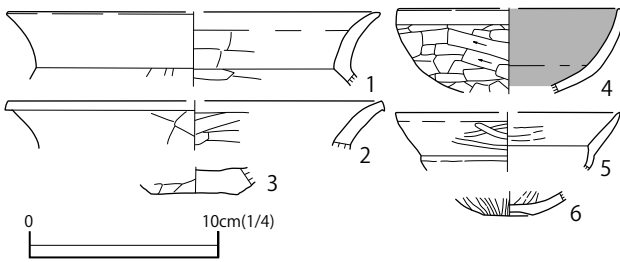
遺物説明

第 68 図

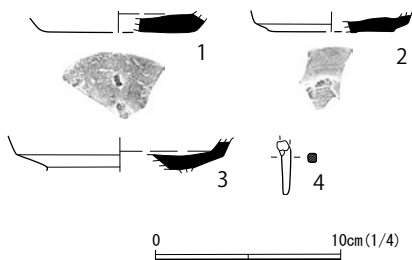
1 台帳：1 住 材質：土師器 器種：甕 残存：口縁部 10% 法量：口径 (20.0)、器高 (4.0) 色調：外面淡黄褐～黒褐色。内面淡黄褐色。



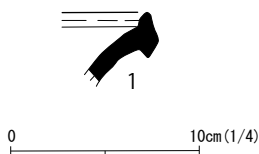
第 67 図 勝倉若宮遺跡第 5 次調査区第 1 号住居跡掘形



第 68 図 勝倉若宮遺跡第 5 次調査区第 1 号住居跡出土遺物



第 69 図 勝倉若宮遺跡第 5 次調査区第 2 号住居跡出土遺物



第 70 図 勝倉若宮遺跡第 5 次調査区第 1 号土坑出土遺物

胎土：礫（白微），砂（白多，透多） 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ，胴部ハケ調整。内面口縁部上位ヨコナデ，下位～胴部ヘラナデ。
使用痕：－ 備考：－

2 台帳：1 住掘形 材質：土師器 器種：甕 残存：口縁部 10% 法量：口径（20.0），器高（2.6） 色調：内外面とも暗褐色 胎土：砂（白少，透少） 焼成：良好 技法等：内外面ともハケ調整。 使用痕：－ 備考：－

3 台帳：1 住 P3 材質：土師器 器種：甕 残存：底部 40% 法量：器高（1.5），底径（4.5） 色調：外面にぶい黄橙～暗褐色。内面黒褐色。胎土：礫（白多），砂（白多，透多） 焼成：良好 技法等：外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。 使用痕：－ 備考：－

4 台帳：1 住 P1・2 材質：土師器 器種：杯 残存：口縁部 80%，体部 30% 法量：口径（11.8），器高（4.5） 色調：外面橙～にぶい橙色。内面黒褐色。胎土：小石（白微），砂（白多，透多） 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り。内面口縁～体部中位ヨコナデ，下位ヘラナデ。内面黒色処理。 使用痕：－ 備考：－

5 台帳：1 住 材質：土師器 器種：埴 残存：口縁部 10% 法量：口径（12.0），器高（3.2） 色調：外面橙～黒色。胎土：砂（白少，透少，黒微） 焼成：良好 技法等：外面口縁部上位ヨコナデ，中～下位ハケ調整後若干のヘラミガキ。内面口縁部ヘラナデ後若干のヘラミガキ，体部ヘラナデ。 使用痕：－ 備考：－

6 台帳：1 住掘形 材質：土師器 器種：埴 残存：底部 100% 法量：器高（1.3），底径 2.5 色調：外面淡黄褐～黒色。内面黒褐色。胎土：砂（白少，透少） 焼成：良好 技法等：内外面ともヘラミガキ。凹み底。 使用痕：－ 備考：－

第 2 号住居跡

遺構 第 1 号土坑と重複するが，新旧は不明である。住居跡の北壁付近を一部調査した。竪穴部の規模は不明である。壁高は北壁 10cm を測る。壁際に周溝はみられず，床面は硬化していなかった。

遺物出土状況 覆土中より須恵器・土師器の小片が出土している。須恵器杯は回転ヘラ切り未調整であるが，若干 2 次底部面を残すことから，8 世紀第 4 四半期頃に位置付けられよう。

遺物説明

第 69 図

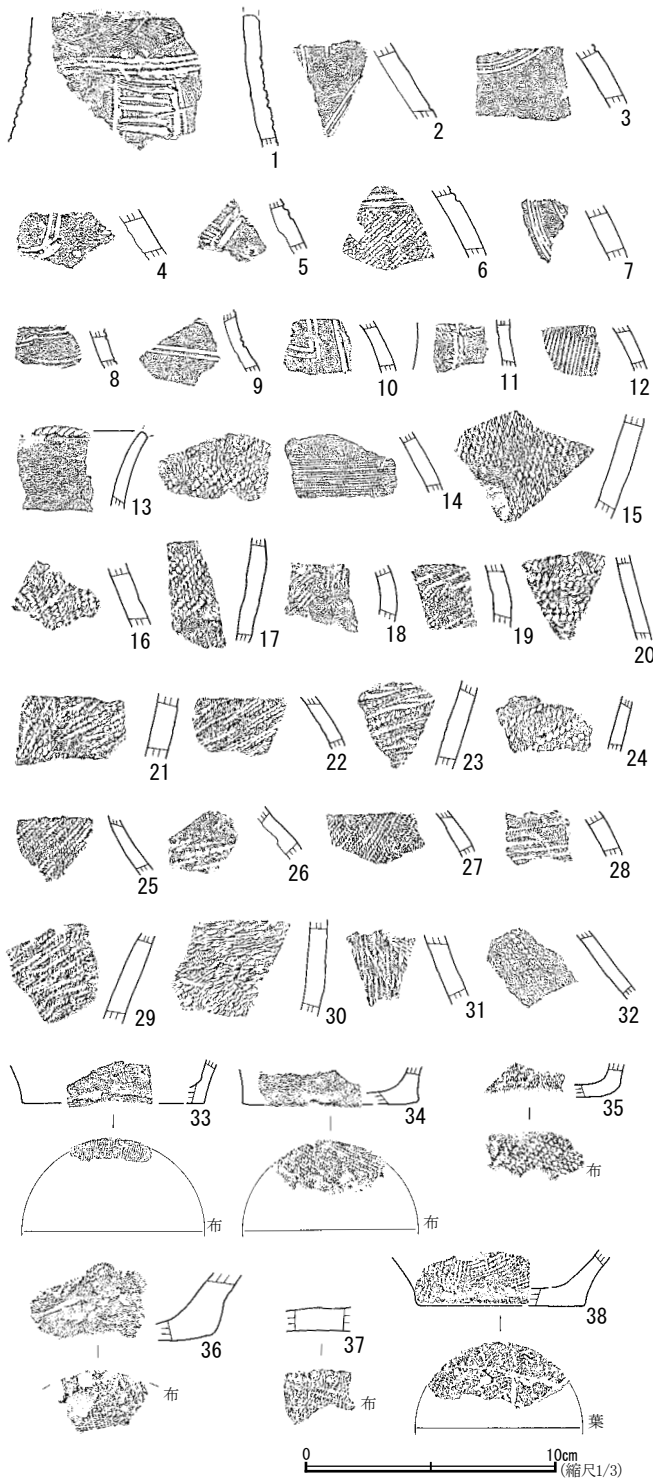
1 材質：須恵器 器種：杯 残存：底部 20% 法量：底径（7.5） 色調：外面明灰褐色，内面明灰色 胎土：礫（白少） 技法等：底部外面ヘラナデ？
2 材質：須恵器 器種：杯 残存：底部 15% 法量：底径（6.8） 色調：外面灰褐色，内面灰色 胎土：礫（白少）、骨針微量 技法等：回転ヘラ切り。

3 材質：須恵器 器種：有台坏 残存：底部外周 20% 法量：－ 色調：灰色 胎土：礫（白多，灰少），骨針微量 技法等：－

4 材質：鉄 器種：釘か 残存：先端部 法量：残存長 2.6

(3) 土坑

第 1 号土坑



第71図 勝倉若宮遺跡第5次調査区出土遺物(1)

第1・2号住居跡と重複する。新旧は不明。南北2.2m、深さ32cmを測る楕円形の土坑である。土坑の一部をピット1が掘り込んでいた。土坑からは土師器・須恵器の小片が出土しているが、時期幅があり、遺物から遺構の時期を決めることはできなかった。

遺物説明

第70図

1 材質：須恵器 器種：襷 残存：口縁部片 法量：— 色調：灰褐色、断面橙褐色 胎土：礫（白，灰少，白透少）

(4) 調査区出土遺物

各遺構の時期と異なる遺物や表土出土の遺物である。

遺物説明

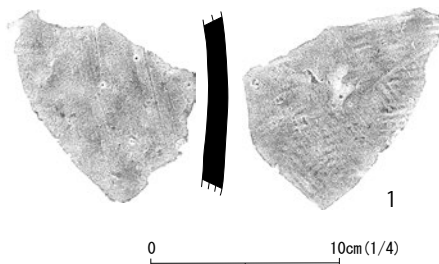
第71図

- 1 出土位置・注記：1住 時代時期：弥生時代中期 器種：大型壺形土器 法量：頸径89mm（残存率20%）文様：平行沈線文（半截竹管）備考：上端擬口縁か
- 2 出土位置・注記：1住 時代時期：弥生時代中期 器種：大型壺形土器 文様：平行沈線文（半截竹管）備考：器内面剥落
- 3 出土位置・注記：1住 時代時期：弥生時代中期 器種：大型壺形土器 文様：平行沈線文（半截竹管）
- 4 出土位置・注記：1住 時代時期：弥生時代中期 器種：大型壺形土器 文様：平行沈線文（半截竹管）備考：器内面剥落
- 5 出土位置・注記：1住 時代時期：弥生時代中期 器種：大型壺形土器 文様：平行沈線文（半截竹管）備考：器内面剥落
- 6 出土位置・注記：1住 時代時期：弥生時代中期 文様：平行沈線文（半截竹管），単節斜縄文（LR）
- 7 出土位置・注記：1住 時代時期：弥生時代中期 器種：大型壺形土器 文様：櫛描文（歯数3本）
- 8 出土位置・注記：1住 時代時期：弥生時代中期 器種：広口壺形土器か 文様：平行沈線文（半截竹管）
- 9 出土位置・注記：1住 時代時期：弥生時代中期 器種：広口壺形土器 文様：平行沈線文（半截竹管）備考：器内面磨き
- 10 出土位置・注記：1住 時代時期：弥生時代中期 器種：広口壺形土器 文様：平行沈線文（半截竹管）備考：器内面磨き
- 11 出土位置・注記：1住 時代時期：弥生時代中期 器種：超小型壺形土器 法量：頸径36mm（残存率17%）文様：沈線文（篋），刺突文（篋）
- 12 出土位置・注記：1住 時代時期：弥生時代中期 文様：偽縄文（カナムグラ）備考：器外面炭化物付着
- 13 出土位置・注記：1住掘形 時代時期：弥生時代中期 器種：襷形土器 文様：口唇部無節斜縄文（L）備考：器内面磨き
- 14 出土位置・注記：表土 時代時期：弥生時代中期 文様：単節斜縄文（LR）備考：器内面刷毛目状の擦痕
- 15 出土位置・注記：1住 時代時期：弥生時代中期 文様：単節斜縄文（LR）
- 16 出土位置・注記：1住 時代時期：弥生時代中期 文様：単節斜縄文（RL）備考：器内面磨き
- 17 出土位置・注記：1住 時代時期：弥生時代中期 文様：単節斜縄文（LR）
- 18 出土位置・注記：1住 時代時期：弥生時代中期 文様：単節斜縄文（LR）
- 19 出土位置・注記：1住 時代時期：弥生時代中期 文様：付加条縄文（LR+R）
- 20 出土位置・注記：1住 時代時期：弥生時代中期 文様：付加条縄文（LR+R）備考：器内面磨き
- 21 出土位置・注記：1住掘形 時代時期：弥生時代中期 文様：付加条縄文（LR+R）

- 22 出土位置・注記：1住 時代時期：弥生時代中期 文様：付加条縄文 (LR+R) 備考：胎土に金雲母を含む
- 23 出土位置・注記：1住掘形 時代時期：弥生時代中期 文様：付加条縄文 (LR+R)
- 24 出土位置・注記：1住 時代時期：弥生時代中期 文様：付加条縄文 (LR+R)
- 25 出土位置・注記：1住 時代時期：弥生時代中期 器種：甕形土器 文様：付加条縄文 (LR+2R)
- 26 出土位置・注記：1住 時代時期：弥生時代中期 文様：付加条縄文 (LR+2R) 備考：器内面剥落
- 27 出土位置・注記：1住掘形 時代時期：弥生時代中期 文様：付加条縄文 (LR+2R) 備考：器内面磨き
- 28 出土位置・注記：1住 時代時期：弥生時代中期 文様：付加条縄文 (LR+2R) 備考：胎土に金雲母を含む
- 29 出土位置・注記：1住掘形 時代時期：弥生時代中期 文様：付加条縄文 (LR+2R) 備考：器内面磨き
- 30 出土位置・注記：1住掘形 時代時期：弥生時代中期 文様：反撚り縄文 (LL)
- 31 出土位置・注記：表土 時代時期：弥生時代中期 文様：反撚り縄文 (RR)
- 32 出土位置・注記：1住 時代時期：弥生時代中期 文様：複節斜縄文 (LRL) か
- 33 出土位置・注記：1住 時代時期：弥生時代中期 法量：底径 72 mm (残存率 15%) 文様：縄文 (原体不明), 底面布目痕
- 34 出土位置・注記：SK1 時代時期：弥生時代中期 法量：底径 70 mm (残存率 23%) 文様：底面布目痕
- 35 出土位置・注記：1住 時代時期：弥生時代中期 文様：底面布目痕
- 36 出土位置・注記：1住 時代時期：弥生時代中期 文様：単節斜縄文 (LR), 底面布目痕
- 37 出土位置・注記：1住 時代時期：弥生時代中期 文様：底面布目痕
- 38 出土位置・注記：1住掘形 時代時期：弥生時代中・後期 法量：底径 66 mm (残存率 34%) 文様：底面木葉痕

第 72 図

- 1 出土位置：表土 材質：須恵器 器種：甕 残存：胴部片 法量：— 色調：灰色 胎土：礫 (白, 灰少) 技法等：外面平行線文叩き痕。内面釘方向ナデ。内外面に自然釉がかかる。



第 72 図 勝倉若宮遺跡第 5 次調査区出土遺物 (2)

VI 東中根遺跡群における弥生時代後期「東中根式」の集落跡について（下）

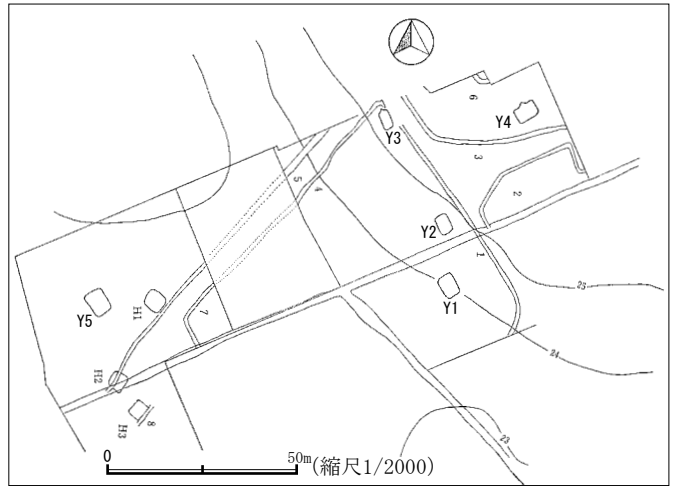
7. 大和田遺跡の発掘調査

大和田遺跡は、勝田市史編さん事業の一環として1971（昭和46）年度から学術発掘が実施された。1975（昭和50）年度までの5次に及ぶ調査で、弥生時代後期の住居跡5基（Y1～5号住居址）、古墳時代前期の住居跡3基（H1～3号住居址）の他、溝状遺構が検出されている。溝状遺構については、弥生時代の「環濠」の可能性が検討され、これを追跡するように調査区が設定されていったが、第4次調査において、古墳時代前期のH2号住居址との重複関係から、溝状遺構の方が新しいことが確認されている。弥生時代後期の住居跡は、調査区全体の東側に4基、離れて西側に1基が分布する（第73図）。中間には谷地形が埋没しており、Y1～4号住居址とY5号住居址は、ともに大和田遺跡であっても、立地をやや異にする。Y5号住居址は、井上義安が「大和田遺跡」として括った範囲の直近に位置している（上-第159図）。

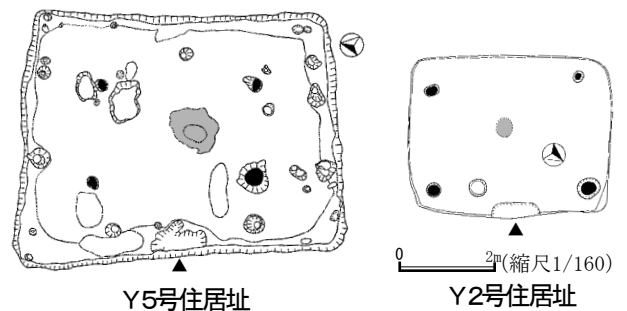
集中して出土する土器からその存在は想定されていたが、大和田遺跡の発掘調査は、東中根遺跡群において初めて住居跡の姿を明らかにした。確認面のローム層上面から30～50cmの掘り込みが残る竪穴住居跡であり、平面形状は全て長方形を呈する。炉址は、長軸方向の中央であっても短軸方向では一方に偏ることから、短軸を主軸とした「横長」の構造ではないかと推測される（第74図）。Y3号住居址長辺中央の壁際には柱穴状のピットが、他の4基の住居跡の同じ位置には「貯蔵穴」と報告された浅い掘り込み（図に▲で指示）が位置しており、これらは、出入口施設に伴う痕跡と捉えられよう。このようにして出入口の位置から主軸を決定すると、一見同一の方向に並んでいる住居跡どうしても、主軸は異なることになる。

各住居跡と出土遺物について、報告（川崎1982）を概括しておこう。

Y1号住居址 住居跡は、長軸約6m、短軸約4.5mの長方形を呈する。主軸はN-26°-E。床面の四隅に位置する4基のピットが支柱穴と推定される。炉址は地床炉。



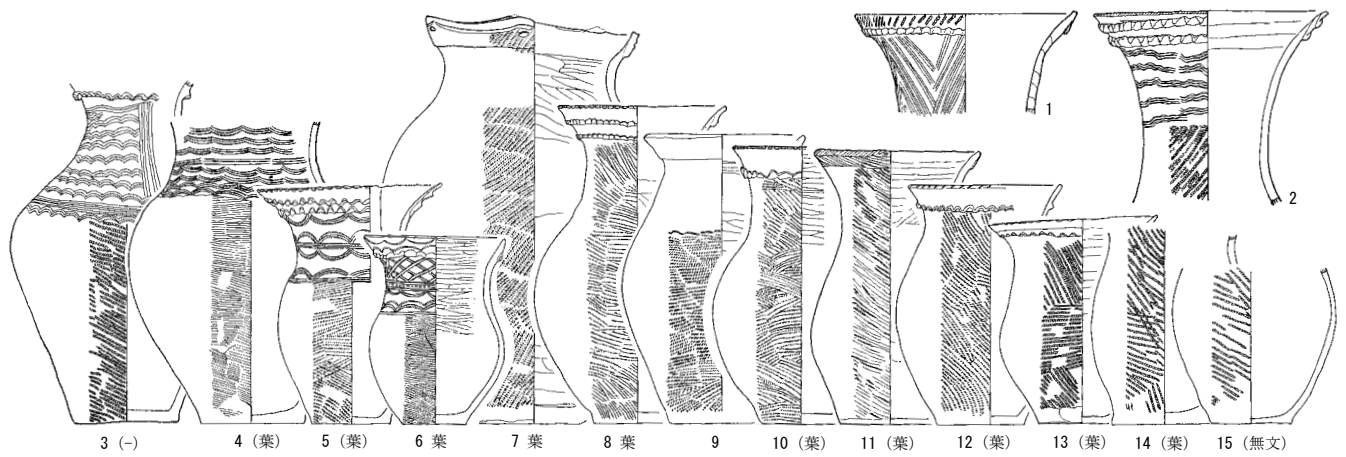
第73図 大和田遺跡における住居跡の分布（川崎1982より加筆引用）



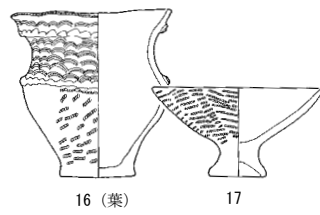
第74図 大和田遺跡の住居跡（川崎1982より加筆引用）

住居跡の全体から多量の炭化材が検出され、上屋の火事の痕跡と考えられる。遺物は、土器が2点報告された（第75図18・19）。18は体部縄文の壺形、19は頸部櫛描文の鉢形である。鉢形は口縁部に穿孔があり、蓋付土器の身に相当する（鈴木2010）。櫛描文の形象は波状文。

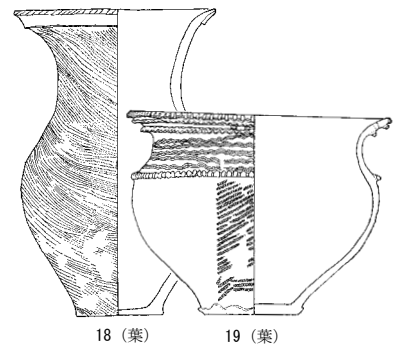
Y2号住居址 1969（昭和44）年に鴨志田篤二が土器を紹介し、「50センチぐらいの深さの所で、ほぼ5.6メートルの区域から11個の土器が完全なまま出土し、また、土器と共に多数の木炭と、土器の胴部を利用した炉が出土した」（鴨志田1969）という地点に検出された住居跡である。住居跡は、長軸4.29m、短軸約3.43mでやや隅丸の長方形を呈する（第74図右）。主軸はN-126°-W。床面の四隅に位置する4基のピット（図の底面を黒塗りで表示）が支柱穴と推定される。炉址は地床炉と報告され、「土器の胴部を利用した炉」については記載がない。住居跡の全体から多量の炭化材が検出され、上屋の火事の痕跡と考えられる。遺物は、15点（第75図1～15）の土器が「Y2号住居址出土土器」として図示された。実測図の照合から、鴨志田が紹介した土器は9点が確認できる。報告文を読むと、新たに追



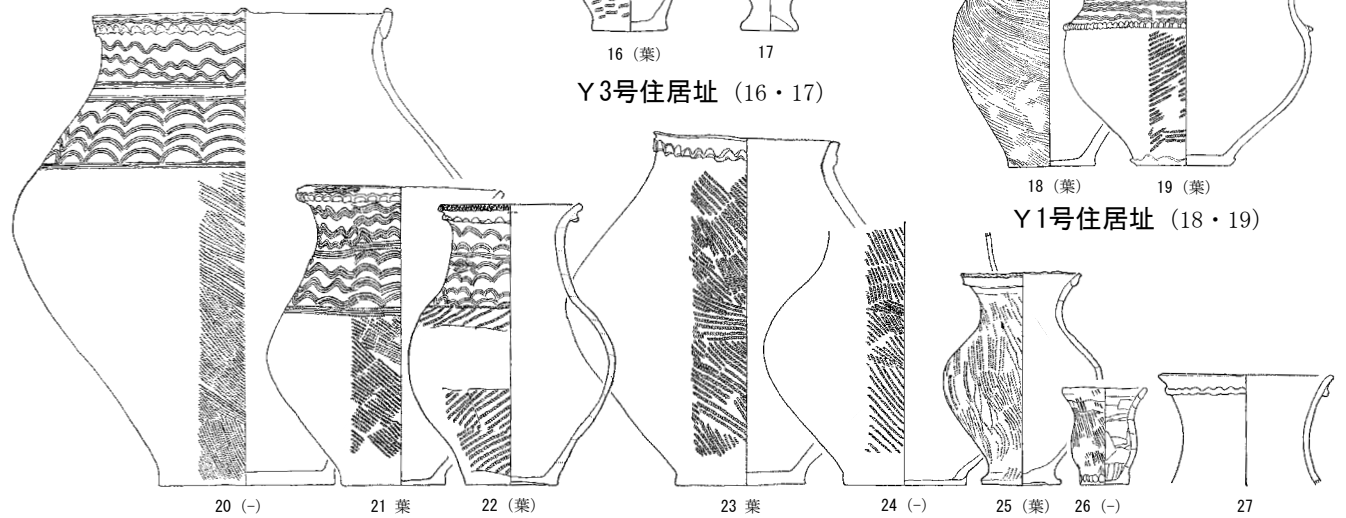
Y2号住居址 (1~15)



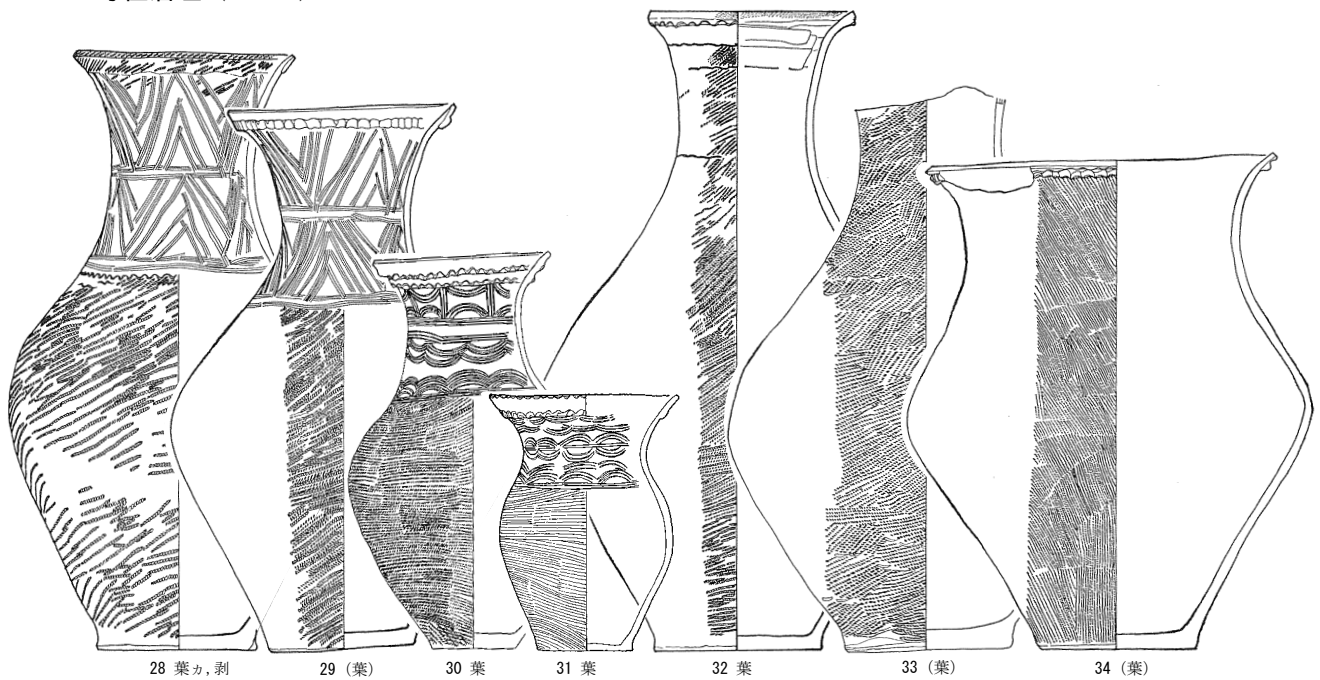
Y3号住居址 (16・17)



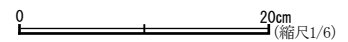
Y1号住居址 (18・19)



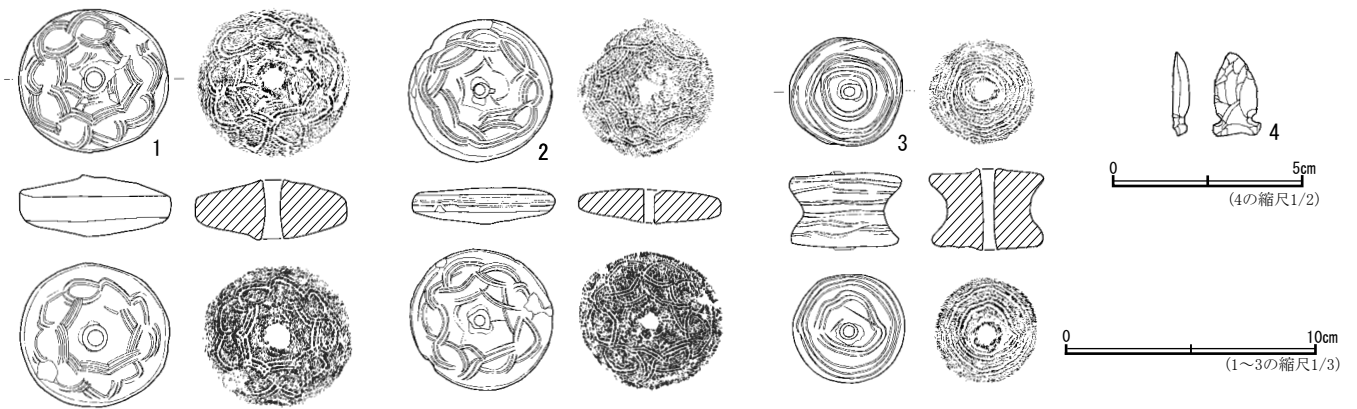
Y4号住居址 (20~27)



Y5号住居址 (28~34)



第75図 大和田遺跡 Y1~5号住居址の土器 (川崎 1982 より加筆引用)



第76図 大和田遺跡の土製紡錘車とアメリカ式石鏃(3・4は川崎1982より加筆引用)

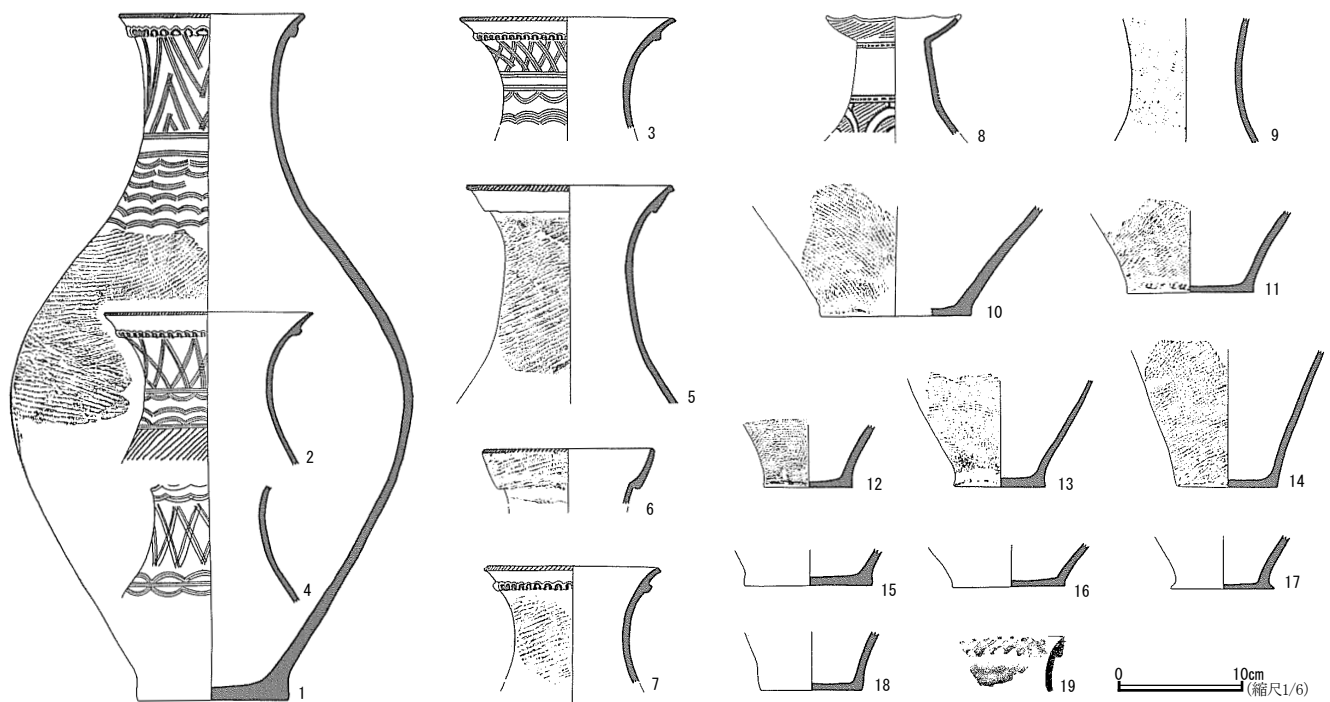
加された土器には、「Y2号住居址付近耕作中出土」という3点(第75図2・4・11)が含まれている。さらに、1点(第75図1)については報告文を欠く。これらがY2号住居跡に確実に伴うものか明らかでないことを明記するのは、波状文の大型壺形土器(第75図2)が、この「Y2号住居址付近耕作中出土」にのみ認められることによる。住居跡に伴うと推定されるのは、ほとんどが中・小型壺形土器であり、3本櫛歯の櫛描文による対向連弧文(5)、縦区画連弧文(3)とともに、平行沈線文による格子状文と対向連弧文(6)が出土している。これらに「天王山式」の系統(7)が伴う。

Y3号住居址 住居跡は、長軸5.65m、短軸3.84mで、二隅だけが丸い長方形を呈する。北西壁の中央に「造り出し」と報告された突出部が見られるが、覆土断面図からは、土坑の重複のようである。主軸はN-63°-E。主柱穴の配置は明らかでない。炉址は地床炉。住居跡の全体から多量の炭化材が検出され、上屋の火事の痕跡と考えられる。P17というピットの内部からは「若干の炭化^{註9}糲」も検出された。土器は、実測図2点(第75図16・17)と破片の拓本123点が報告された。小型太頸形の壺形土器(16)は、櫛描文が3本櫛歯による単方向の下向き連弧文。「高坏形」と報告された土器(17)は、土製蓋と見られる(鈴木2017)。破片の中には、3本櫛歯による櫛描文の山形文、縦区画連弧文とともに、平行沈線文の格子状文、大振りの波状文も出土しており、底面痕跡には布目痕も見られる。これらに「天王山式」の系統が伴う。なお石器では、アメリカ式石鏃(第76図4)が報告されているが、所在が不明である。

Y4号住居址 住居跡は、長軸5.66m、短軸4.35mの長方形を呈する。北壁中央に突出部が見られるが、住

居跡に付属するものか明らかでない。主軸はN-21°-W。主柱穴の配置は6基のピットが推定されている。炉址は地床炉。床面直上の覆土に「多量の炭化物焼土の混入」が報告されており、壁際に炭化材が集中することからも、上屋の火事の痕跡と考えられる。「床面直上あるいは床面に密着した状態」で炭化米が検出されており、その量については「おおよそ3ℓ」(川崎1974)という記載がある。遺物には、8点の土器が報告された(第75図20~27)。このうち1点(26)は「攪乱層出土」、他は「ほとんど炉周辺から検出された」と記載されたが、出土状況図を見る限り、北壁際中央部に集中する。甕形土器(20・21・23・24)が半数を占めることに、この住居跡の特徴がある。櫛描文は、3・4本櫛歯による単方向の下向き連弧文、大振りの波状文。これらに「天王山式」の系統が伴う。

Y5号住居址 住居跡は、長軸6.15m、短軸5.10mの長方形を呈する(第74図左)。主軸はN-77°-E。主柱穴の配置は4基のピット(図の底面を黒塗りで表示)が推定される。炉址は地床炉。住居跡の全体から多量の炭化材が検出され、上屋の火事の痕跡と考えられる。土器は、実測図7点(第75図28~34)と破片の拓本88点が報告された。実測図の土器は、北壁際中央のピット(P6)付近から3点(28・32・34)、西壁際南寄りのピット(P28)の付近から4点(29~31・33)が、それぞれまとまって検出されている。3本櫛歯による櫛描文は、大型細頸形の壺形土器が山形文、中・小型の壺形土器が対向連弧文で、一部は縦区画対向弧状文となっている。なお4点の土製紡錘車が報告されているが、所在が確認できたのは3点(第76図1~3)のみである。



第77図 笠谷遺跡の土器(1) (井上 1957・1968 より加筆引用)

以上の5基の住居跡には、長軸が7mを超える超大型は含まれておらず、大型が2基(Y1・Y5号)、中型(Y2・Y3・Y4号)が3基という構成である(住居規模の分類は鈴木2010cによる)。炉址が全て地床炉であることは、抜去されたのではなく、もともと炉石の付属が無いと見てよいのであろう。全ての住居跡に上屋の火事の痕跡が残されており、ここに際立った特徴を認める。

発掘調査以前に紹介された資料のうち、川崎純徳が報告した土器群の出土位置と発掘調査の対象地との関係は明らかにされていない。清水遺跡に共通した土器(上・第170図4・6・7)が含まれることを注意しておいたが、それは、Y1号住居址ではなかったかと想像している。櫛描の波状文が伴うのは、Y1号住居址のみであり、「Y2号住居址付近耕作中出土」として報告された櫛描の波状文も付近に位置する。そもそもY1号住居址には、第1次調査の対象地として選択された理由があったはずである。

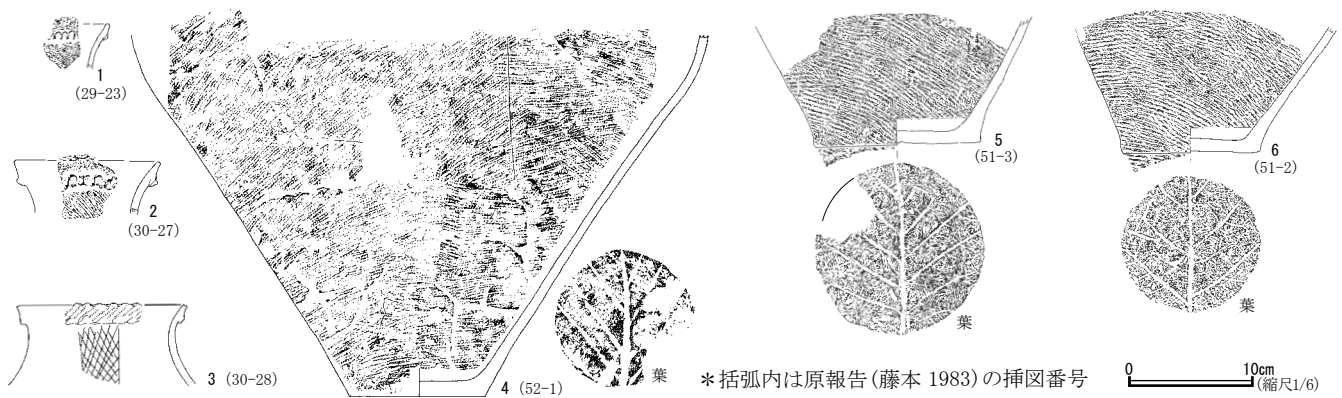
8. 笠谷遺跡の土器

笠谷遺跡については、井上義安の報告(井上1968)と藤本弥城の報告(藤本1983)がある。

井上は、1957(昭和32)年にも、小規模な発掘調査の出土資料と採集資料とを報告(井上1957)していたが、これは、弥生時代中期の土器を対象としたものである。その中に、複合口縁の土器(第77図19)が1点

のみ含まれていた。これは、「複合口縁の上に縄文を斜行させ指圧痕を加えたもので、複合縁に続く無文帯に櫛描と思われる沈線の一部が認められる。この様な口縁部の手法は後述する如く該種資料(引用註：中期の平行沈線文土器)には認め難く、従って時期を異にするものと見なければならぬ」と区別され、「より後出の土器と見なすことに疑問の余地がない」(井上1957)と考えられた。その11年後の1968(昭和43)年に報告されたのは、「約300坪に及ぶごぼう畑を深耕した際の出土品」(井上1968)、つまり採集資料である。実測図19点(第77図1~18)と破片の拓本34点が掲載されている。実測図には、大型(1・5・9~11)と中・小型(2・3・7・12~14)の壺形土器があり、「天王山式」(8)が伴う。破片も含めた櫛描文の形象は、連弧文、山形文、格子状文、大振りの波状文であり、連弧文には対向連弧文と判断されるものが多い。1点のみ多条櫛歯による施文と見られる破片が含まれているが、これについて言及はなかった。なお、底部について「すべての破片には、縄文または撚糸文が施されている」と記述されており、無文のように図示された底部(15~18)についても、施文の表現が省略されたものと見なければならぬのであろう。底面痕跡は「木葉痕が圧倒的に多い」。

藤本は、「昭和10年頃から昭和25年頃までの採集と発掘によって得たもの」を、1983(昭和58)年に報



第78図 笠谷遺跡の土器(2) (4は藤本1983より引用)

告(藤本1983)^{註11}した。弥生時代中期の土器が「発掘」に相当し、その他は「採集」であるらしい。ほとんどが中期の破片であり、底面痕跡についても「木葉痕は少なく、布目痕が多い」と観察されている。その中から、いくつかの破片が「東中根式」として記述された。第78図1は「高野寺畑」、2・3は「東中根式」に位置付けられ、3については「壺形土器の複合口縁部で頸部には細かい条線の格子目紋が縦位の細かい単線によって区画されたもので東中根式であろう」(藤本1983)。また、「2本同時施紋の縦位条線」や「頸部に半截竹管による山形紋を描いたもの」については、「伊勢林前式」に相当するものと見ていた。^{註12}

井上の報告(井上1957)にも藤本の報告(藤本1983)にも、複合口縁に縄文が施文され、頸部に篋描沈線文で文様を構成する土器が1点ずつ(第77図19, 第78図3)含まれていた。拓本を見る限り、同一個体ではないかと思えるほど2点の破片は似ている。これを「東中根式」と捉えた藤本に対して、井上は、「常陸国東茨城郡茨城町長岡遺跡及び同勝田市東中根洞山遺跡等から出土した一部の複合口縁を呈する土器に類似」(井上1957)と観察していた。

9. 館出遺跡の試掘調査

それまでも分布調査により、弥生時代中期と後期の土器の散布が報告(川崎他1979, 住谷1982)されていたが、2016(平成28)年度に、荒谷地区畑地帯総合整備事業の対象地について試掘調査が実施され、弥生時代の遺構の存在が確認されるに至った(佐々木編2017)。「住居跡は13基確認され、すべて弥生時代の住居跡であった。住居跡の時期は、弥生中期が2基(1・9号住居跡)、

弥生後期前半が4基(2・3・10・11号住居跡)、残りが弥生中期～後期前半の住居跡となる」。これらの住居跡は、広い範囲に散在しており、後期前半の第3号住居跡は、最も西側に位置している。この地点は、埋蔵文化財包蔵地の「館出遺跡」(住谷1982)として括られるが、井上義安の「笠谷遺跡」(井上1968)の範囲にも相当している(上-第159図)。井上が報告した土器群の採集地点との関係が気になるところである。

第3号住居跡には、大型(第79図1・3・4)と中・小型(2・6)の壺形土器、大型の甕形土器(5)が組成する。櫛描文の形象には、連弧文、菱形文、縦区画波状文があり、対向連弧文と菱形文の組合せ(1)が認められる。縄文は、付加条第1種付加1条(1・3・5・6)が特徴的であるが、これに付加条第2種(4)が伴う。

この第3号住居跡から南方向に100m離れて第2号住居跡が位置する。この第3号住居跡と第2号住居跡との間に、大川流域に面した東中根台地の西側の遺跡群と、本郷川流域に面した東側の遺跡群を分ける境界が捉えられることになった。「東中根式」の研究が進められた主な舞台は、野沢前遺跡から笠谷遺跡までの遺跡群であったが、実際に「東中根式」の遺跡群も、この範囲に限定されており、本郷川流域に面した東中根台地の東側には、「東中根式」とは異なる土器群が分布する。

第2号住居跡の土器は、破片がわずかに出土したにすぎない。複合口縁の2点(第79図12・13)はともに、口縁部が縄文で、それは付加条第1種付加2条である。^{註13}櫛描文(14)は、櫛歯数の明らかでない不揃いな工具で施文され、篋描沈線文による縦区画斜線文(15)が伴う。井上と藤本、それぞれの笠谷遺跡の報告に1点ずつ出現していた土器(第77図19, 第78図3)は、



1~7：第3号住居跡，8~11：第11号住居跡，12~15：第2号住居跡

第79図 館出遺跡の土器（佐々木編2017より引用）

この第2号住居跡の土器群の存在を示唆するものであった。

第11号住居跡からは、複合口縁で、平行沈線文による大振りの波状文が施文された甕形土器とともに、単純口縁で、3本櫛歯による縦位直状文が施文された破片も出土しており、これを後期初頭「向井原式」（色川

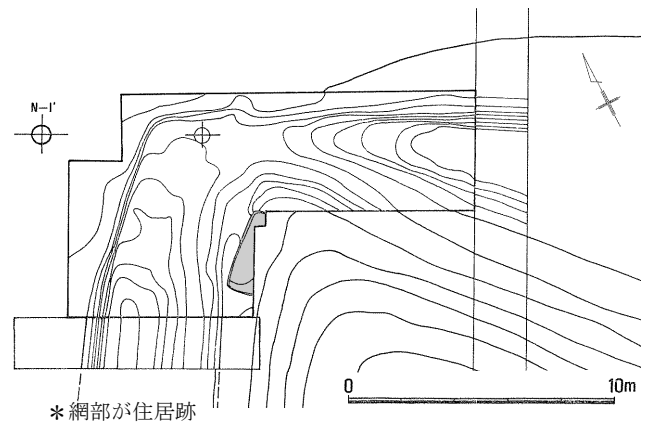
2006）の一部と捉えた。さらに、第1・9号住居跡は弥生中期「足洗式」の住居跡と推定され、「東中根式」の時期を遡る集落跡が形成されていたことも明らかにされている。

10. 指洪遺跡の発掘調査

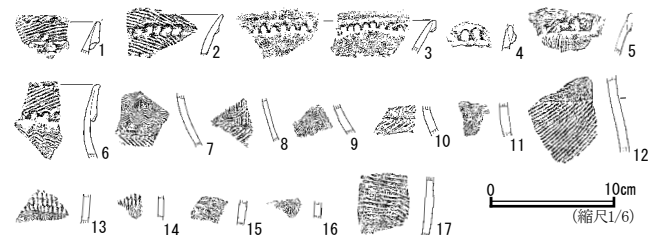
館出遺跡とは支谷を挟んだ東側の台地上が広く指洪遺跡として登録されている。2017（平成 29）年度に実施された荒谷地区畑地帯整備事業に伴う試掘調査では、弥生時代の遺物はほとんど出土しておらず、^{とらづか}虎塚古墳を中心とした山林部分の発掘調査により、弥生時代後期の遺跡が確認されてきている。

虎塚古墳第 3 次調査 虎塚古墳は勝田市史編さん事業の一環として、1973（昭和 48）年度から学術調査が実施された。同年に主体部の横穴式石室が調査され、装飾壁画の発見が大きく注目を集めた。翌 1974（昭和 49）年度が第 2 次調査、1 年置いた 1976（昭和 51）年度が第 3 次調査で、墳丘と周堀がそれぞれの対象とされた。第 3 次調査で設定された第 XV トレンチの報告に、次の記述がある。「この西北隅の墳丘基部上に竪穴住居跡 1 基が発見されたが、ほとんど墳丘盛土下にあるため全掘することを避けた。竪穴住居跡の年代は不明とせざるをえないが、竪穴住居跡周辺には、弥生時代後期の東中根式土器の細片が散在していたから、その時期のものともみること可能であろう」（小林 1978）。報告に添付された測量図には、前方部北西隅に遺構の輪郭と見られる線が描かれており、これが「竪穴住居跡」に相当するであろう（第 80 図）。規模は西壁の長さが 3.9 m ほどで、平面形態は四角形を呈する。

1979（昭和 54）年の『勝田市史 別編Ⅱ 考古資料編』にも、「虎塚古墳の発掘調査中にも明らかに弥生時代のものと評価しうる遺構の存在が確認されているが、未調査のまま埋め戻されている」（川崎他 1979）と記述されたが、遺物は報告されないままであった。ひたちなか市埋蔵文化財調査センターに収蔵されている虎塚古墳発掘調査出土遺物のなかに、弥生時代の土器を見出したので、これを図化して掲載する（第 81 図）。土器群には大きく 2 時期が認められる。1 つは、後期前半の土器群（1～12）。口縁部が縄文で付加条第 1 種付加 2 条、頸部に多条櫛歯による波状文が施文された土器（6・7）が特徴的である。複合口縁の下端は、指頭による刻みが典型であり、沈線区画内を刻む口縁部（1）が含まれている。これには、「向井原式」に特徴的な「梯子状刻み隆帯」（鈴木 2016）との連絡が窺える。もう 1 つは、「十王台式」（13～17）。「带状刺突文」（13・14）、縦区画



第 80 図 虎塚古墳墳丘下の住居跡（小林 1978 より引用）

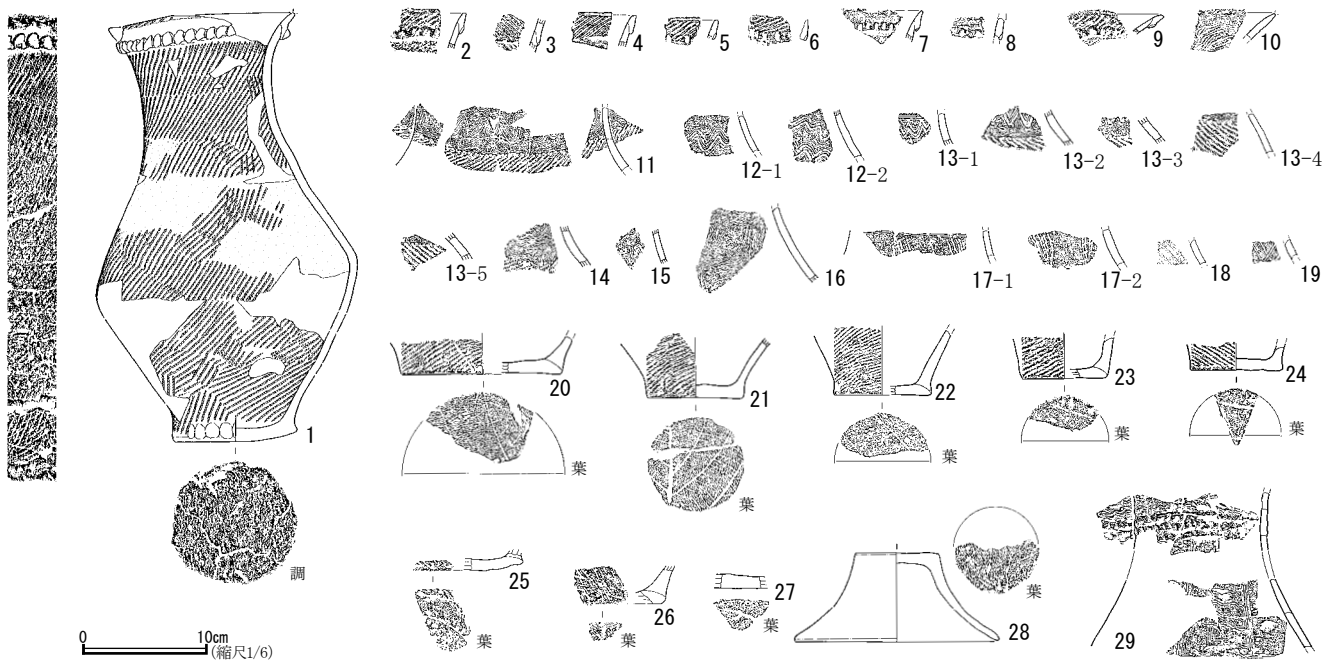


第 81 図 指洪遺跡の土器（1）（虎塚古墳出土遺物）

格子状文（15・16）など「十王台式 5 期」のものと捉えられる。つまり、虎塚古墳の発掘調査で検出されていたのは、「東中根式」とは異なる土器群であった。

指洪遺跡第 1 次調査 1989（平成元）年に埋蔵文化財調査センター建設に伴う発掘調査が実施された（住谷 1990）。対象地は、山林を開墾した際に伐採した樹木を重機で掘削して埋めたことにより、広範囲が攪乱を受けていたが、住居跡が 1 基（第 1 号住居址）検出されることになった。ここは、虎塚古墳墳丘下の住居跡から、北東方向に 120 m ほど離れた位置にある。

住居跡は、長軸 5.25 m、短軸 4.93 m、隅丸で台形に近い長方形を呈する（第 83 図左）。主軸は N-65°-W。主柱穴の配置は 4 基のピット（図の底面を黒塗りで表示）が推定され、東壁の壁際中央には出入口施設に伴うピット（図に▲で指示）が検出されている。炉址は地床炉。「北西隅には焼土の広がりが見られた」ことが観察されている。遺物は、ほぼ完形に復元された土器 1 点と土器の破片 68 点、土製紡錘車 1 点、石器の磨石・敲石 1 点が報告された。そのうち 29 個体分の土器と土製紡錘車を新たに図化して掲載する（第 82 図、第 83 図右）。住居跡の時期を決定する後期前半の土器群は、完形が壺形（1）、破片の多くは甕形で、鉢形（28、土製蓋として図示）、高环形（9・10）も組成する。底部破片に大型（20）があり、大型壺形の頸部と見られる破片（17）もあるが、



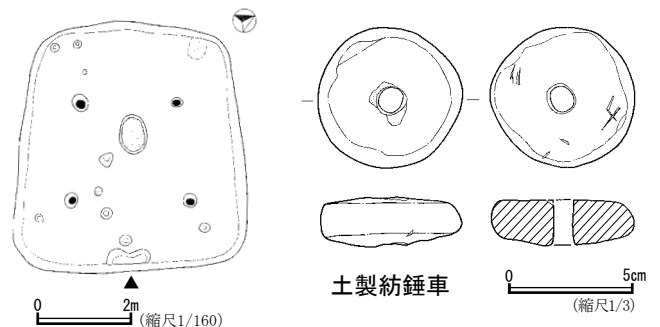
第82図 指洗遺跡の土器(2) (指洗遺跡第1次調査第1号住居址出土遺物)

これは確実でない。甕形は、口縁部が縄文で付加条第1種付加2条、頸部に多条櫛歯による波状文が施文された土器(2~6, 11~16)が特徴的である。篋描沈線文による縦区画斜線文(18)、格子状文(19)の甕形も伴う。壺形(1)には「東中根式」の特徴を認めるものの、土器群は、「東中根式」とは異なる。なお、覆土中からは、1個体分の「十王台式(5期)」(29)も出土している。

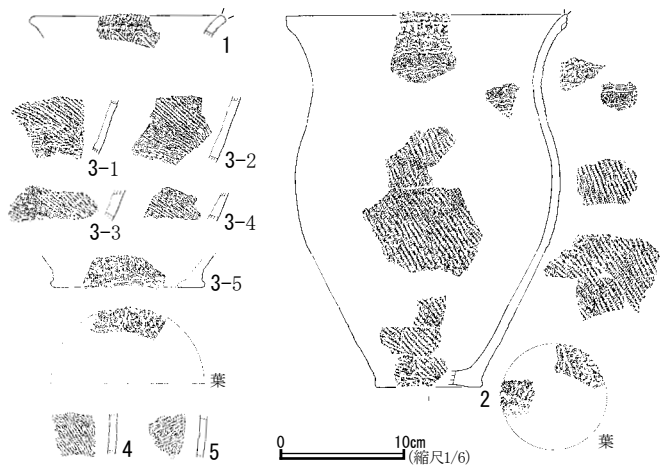
十五郎穴横穴墓群館出支群I区墳丘発掘調査 じゅうごろう 十五郎
あな 穴横穴墓群における史跡整備に伴う重要遺蹟範囲確認調査の一環として、2007(平成19)年度、「虎塚古墳群2号墳」と呼ばれていた墳丘について発掘調査が実施された。主体部が検出されなかったこともあり、「館出支群I区墳丘」という呼称が与えられることになった(稲田編2016)。その墳丘の調査により、墳丘及び周堀から弥生時代後期前半でも初頭の土器群が出土している。5個体分の破片(第84図)ではあるが、単純口縁(1)と複合口縁(2)の甕形が組成し、複合口縁の「梯子状刻み隆帯」を表徴と認め、「向井原式」の一部として捉えている。「向井原式」は、指洗遺跡の北方向に位置する下原遺跡しもはら(藤本弥城の「とうほつぼう東北方遺跡」)において比較的まとまって出土していることを付記しておく(藤本武1991, 色川2006)。

11. 「東中根式」の変遷

古く1939(昭和14)年に設定された「十王台式」(山

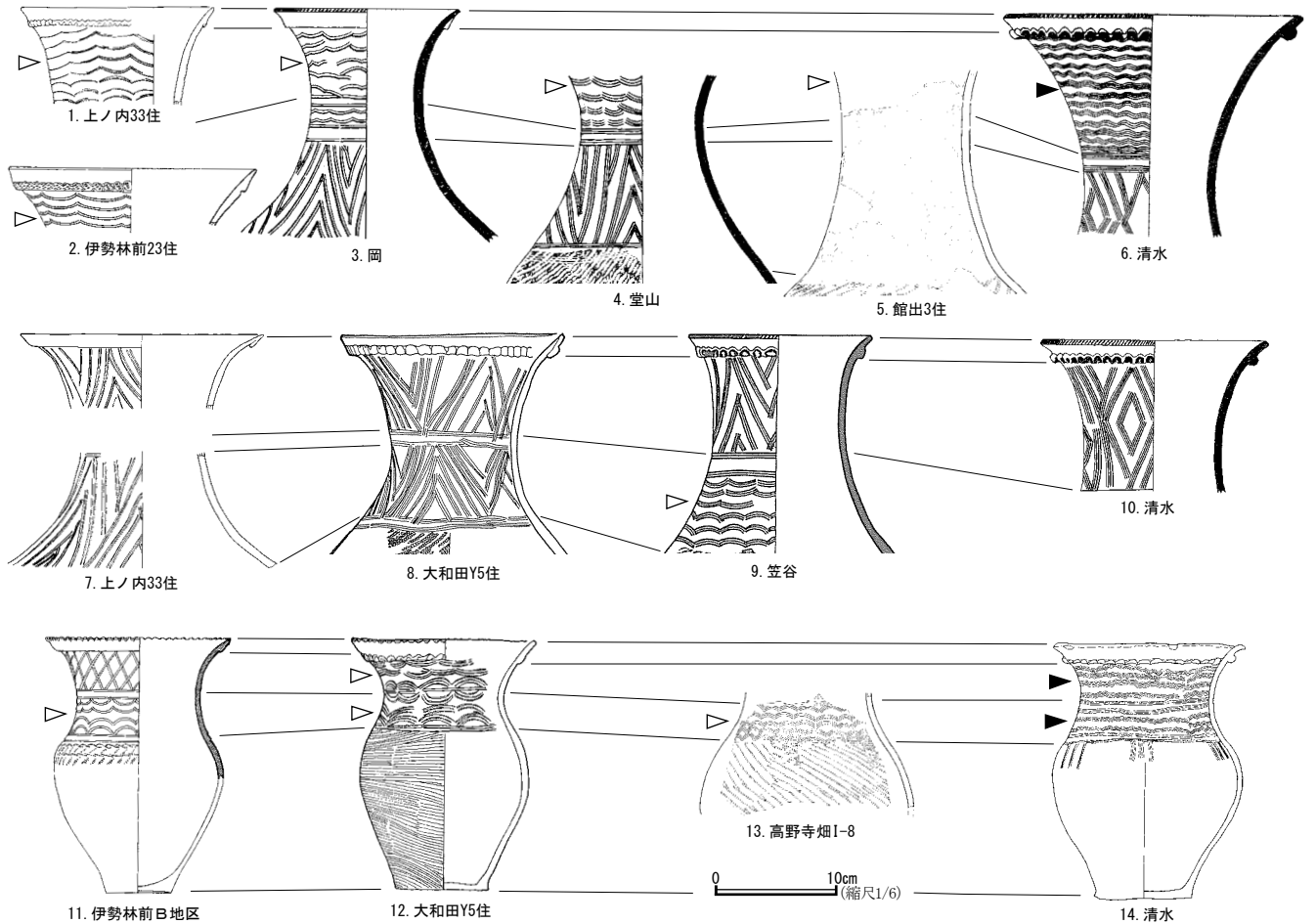


第83図 指洗遺跡の住居跡(住谷1990より加筆引用)



第84図 指洗遺跡の土器(3)
(館出支群I区墳丘出土遺物, 鈴木2016より引用)

内1939)と、1950年代後半に設定された「足洗式」(井上1956・1957・1959)との編年の間隙を埋める土器群として、1968(昭和43)年の井上義安は、東中根遺跡群の土器について細別を検討した(井上1968)。井上は、これを「磐船山式」の型式名称で呼ぶが、「すべ

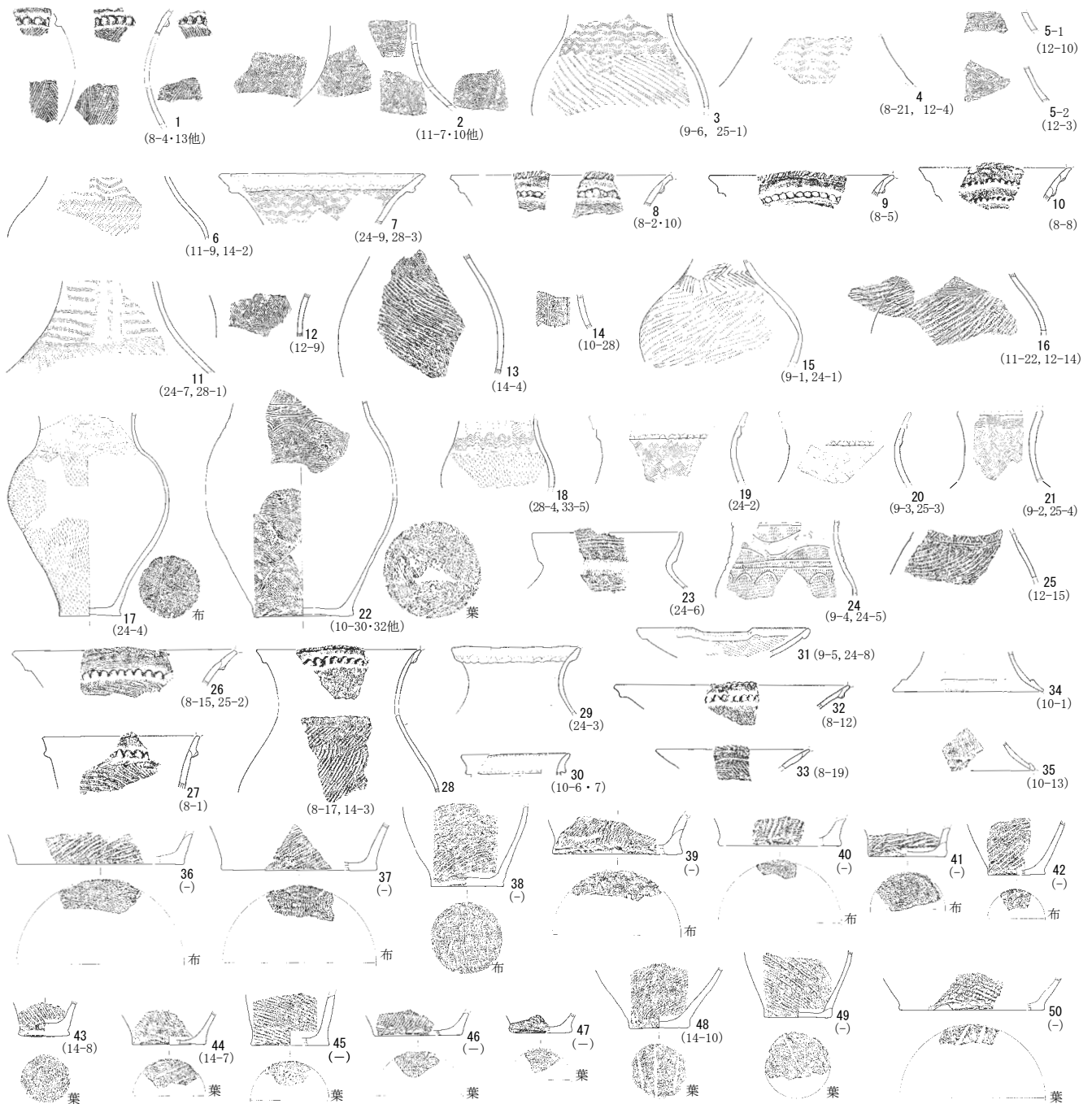


第 85 図 「東中根式」の変遷 (各遺跡の報告書等より引用して構成)

ての口縁部の装飾に複合緑か隆起帯をもち、壺形に例をとるならば頸部が比較的細長く発達した器形を、また文様において胴部を被う撚糸文と口頸部を特色づける 3 ないし 4 本の櫛描沈線を、それぞれメルクマールとする型式(井上義他 1966)と規定された「磐船山式」は、「東中根式」そのものである。本稿に引用した野沢前・大和田・清水・笠谷遺跡の土器群は、その基準となる資料であった。大和田・笠谷遺跡のように「主として 2, 3 本の工具による各種の櫛描文様(連弧文, 山形文, 格子目文など)に斜行の撚糸文, 縄文を伴うグループ」が「I 式」、清水・野沢前遺跡のように「主として 4 本櫛歯の手法による波状文, 山形文, 菱形文などが本格的に発達し、斜状撚糸文に代わって、羽状撚糸文の縄文が旺盛になるグループ」が「II 式」と細別され、施文具と文様の形象から、「足洗式」に共通する属性の「I 式」が旧く、「十王台式」に共通する属性の「II 式」が新しいと位置付けられている。

一方、1967 (昭和 42) 年に東中根遺跡群の土器を

「三条櫛目による横走^(ママ)孤状文と、指頭圧痕のある隆帯をメルクマールとする基本的な設定」と捉えていた伊東重敏は、1974 (昭和 49) 年に、その細分について言及する。水戸市向井原遺跡の報告中の記述であり、「土器群は、やはり施文具からすれば、東茨城郡茨城町長岡字前田所在の「長岡遺跡 A 号 (21 号) 住居址」出土例を標式とした「長岡式」土器群にも共通するが、ここには、かかる文様構成の類例を見出すことはできず、むしろ、勝田市中根の通称東中根一帯から出土する土器の特徴をとって「東中根式」、あるいは、単に東中根の土器と呼びならわしてきた土器群中にむしろその類例を求めることができる。しかし、この型式のメルクマールとしてきた横走直条線文の上下を、対向する横走連続弧状条線文で囲む、いわゆるメガネ文を、今回の資料のなかに欠くのであり、この点で東中根式土器は、I・II 式、または、新・旧両式に分割せしめて取り扱うことが可能かもしれないとかがえる。この場合、I または旧式は、従来、よく知られていたものであり、とくにいわゆるメガネ文



I-8号遺構 (1~50)

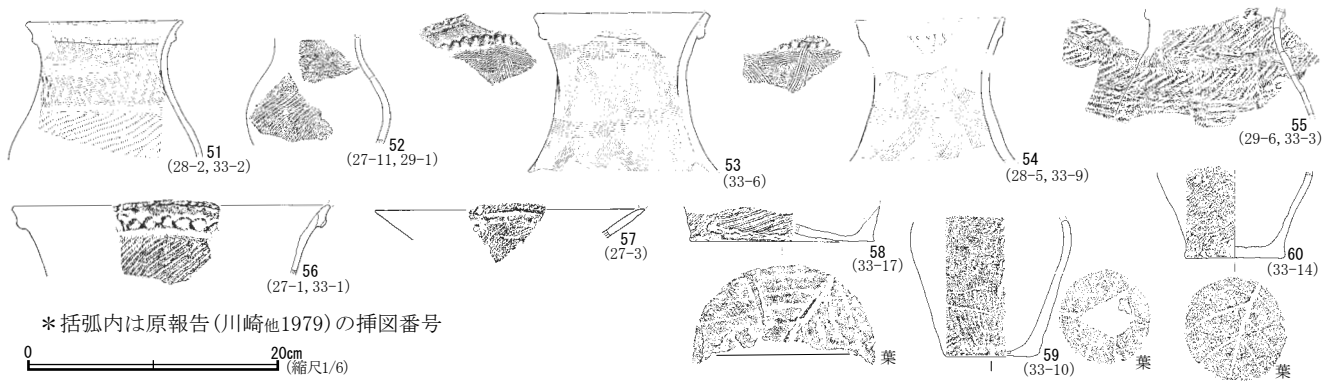
*括弧内は原報告(川崎他1979)の挿図番号

0 20cm (縮尺1/6)

第86図 高野寺畑遺跡の土器 (1)

を含むとことをそのいちじるしい特徴とし、II，または新式は、横走波状条線文のいちじるしい発達を、その主たる特徴とするものである。このなかには、さらに、いわゆる区画構成文や、いわゆる重層構成文をも包括しているきざしが見えることからいえば、この段階で、すでに、長岡式を吸収し^(ママ)さっており、しかも、いわゆるプロト十王台の位置をあたえられて然るべきものといえる」(伊東 1974)。表徴として記述された文様の形象からは、井上の細別に共通するようにも受け取れるのではある

が、「II式」に位置付けるという肝心の向井原遺跡の土器が報告されなかった。その2年後の1976(昭和51)年、常澄村(現・水戸市)大^{だいりくてん}六天古墳(森戸古墳群第12号墳)でも、同様の見解が記述されており、「強いていえば、東中根II式の概念範疇に入るもの」と報告された土器は、4・5本櫛歯による櫛描文、篋描沈線による格子状文、付加条第1種付加2条などの文様で構成され、「東中根式」とは異なる土器群であった。「長岡式」の概念の拡大に警句を披露しながらも、伊東の見解は破綻して



I-25号遺構 (51~60)

第 87 図 高野寺畑遺跡の土器 (2)

いる。

1979 (昭和 54) 年に勝田市 (現・ひたちなか市) 高野寺畑遺跡、1982 (昭和 57) 年に大洗町髭釜遺跡の土器群を対象に、系統と編年を分析したのが鈴木正博である。高野寺畑遺跡の土器群は、「所謂東中根式」「多条櫛目紋土器」「天王山式及びその系統を引く一群の土器」を「三種の核」とした「寺畑複合」と捉えられた (鈴木正 1979)。その記述にも既に示されていたが、髭釜遺跡第 11・30・40 号住居址のうち「東中根式」を除いた土器群を標準として「髭釜式」が設定されるとともに、「東中根式」については、「東中根大和田→高野寺畑→東中根清水」という年代の序列が提示された (鈴木正 1982)。同じ 1982 (昭和 57) 年に刊行された大和田遺跡の報告書『勝田市史 別編Ⅲ 東中根遺跡』では、川崎純徳が「東中根大和田→高野寺畑→東中根清水」を引用し、これを「東中根Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式」として解説を試みた (川崎 1982)。その後は、1991 (平成 3) 年の『茨城県史料 考古資料編 弥生時代』の編年表にこの序列が組込まれ、海老澤稔により「東中根Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式」と記号化されて現行の編年を形成している (海老澤 1996・2000)。

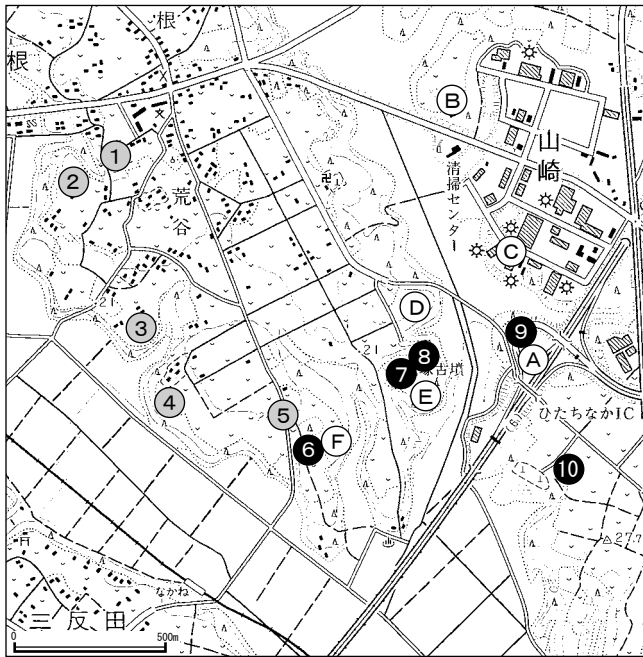
本稿では、井上の 2 細別、鈴木木 3 細別、海老澤の呼称を基礎としながら、近年の調査成果ではひたちなか市鷹ノ巣遺跡 (色川 2008・2013、鈴木 2018)、館出遺跡の土器群を参照し、櫛目文の変遷という視点から「東中根式」の細別を次のように捉える (第 85 図)。

東中根 1 式 大和田遺跡 (川崎 1982) Y2 (「Y2 号住居址付近耕作中出土」の第 75 図 2 を除く)・Y5 号住居址の土器群 (第 75 図) を標準とする。3 本櫛歯による櫛目文が典型であるが、半截竹管による平行沈線文 (第

85 図 3) を確実に伴う。大型壺形に山形文 (8)、中・小型壺形に連弧文 (12) が多用される。大型壺形では、頸上部に連弧文、頸下部に山形文という構成も典型的である (4)。連弧文は対向連弧文の構成を主体とするが、単方向の連弧文には上向き (4) が特徴的である。口縁部に縄文の施文が見られるのも、「東中根 1 式」に限られるようである。堂山遺跡、笠谷遺跡 (井上 1968) の一部も「東中根 1 式」に相当する。

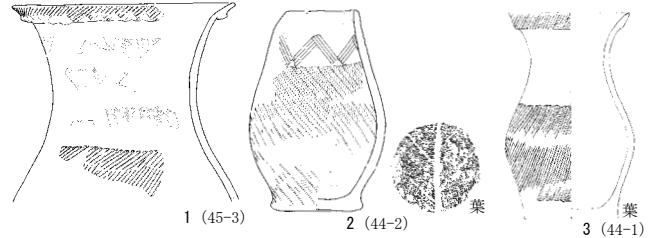
東中根 2 式 東中根遺跡群では、館出遺跡第 3 号住居址の土器群 (第 79 図) が相当する。東中根遺跡群から離れた高野寺畑遺跡に標準を求めざるを得なかったのは、この段階の土器群が明確に捉えられなかったことによる。高野寺畑遺跡 (川崎他 1979) では、弥生時代の遺構が 3 基検出され、そのうち I-8 号遺構と I-25 号遺構に良好な資料が残されていた (第 86・87 図)。2 つの遺構は、45 m ほどの距離を隔てて分布する。「高野寺畑」として一括されることもあるが、本稿の細別は、I-25 号遺構の土器群を「東中根 3 式」と捉える。したがって、I-8 号遺構の土器群が「東中根 2 式」の標準となる。大型壺形には菱形文 (第 86 図 2) が成立しており、中・小型に多用される連弧文は、上向きの連弧文 (6)、対向連弧文 (5) よりも、下向きの連弧文 (第 85 図 13) が主体となる。大型壺形では、頸上部に連弧文、頸下部に菱形文という構成 (5) が典型である。大和田遺跡 Y3・Y4 号住居址も「東中根 2 式」に相当すると見られる。

東中根 3 式 清水遺跡 (井上 1968) の土器群 (上・第 167 図) を標準とする。井上の「磐船山Ⅱ式」に相当する土器群であるが、胴部の羽状縄文は、型式を規定する表徴ではなく、付随する特徴の 1 つと見ておきたい。大型壺形に菱形文 (第 85 図 6・10)、中・小型壺形に



第 88 図 「東中根式」の遺跡群

- 1 野沢前遺跡, 2 堂山遺跡, 3 清水遺跡, 4 大和田遺跡, 5 笠谷遺跡,
6 館出遺跡 2 住, 7 指洪 (虎塚古墳), 8 指洪遺跡 1 住, 9 差洪 (猪Ⅲ a)
遺跡, 10 鷹ノ巣遺跡,
A 差洪 (猪Ⅲ b) 遺跡, B 前原遺跡, C 部田野山崎遺跡, D 下原 (東北方)
遺跡, E 指洪 (虎塚 2 号墳) 遺跡, F 館出遺跡 11 住

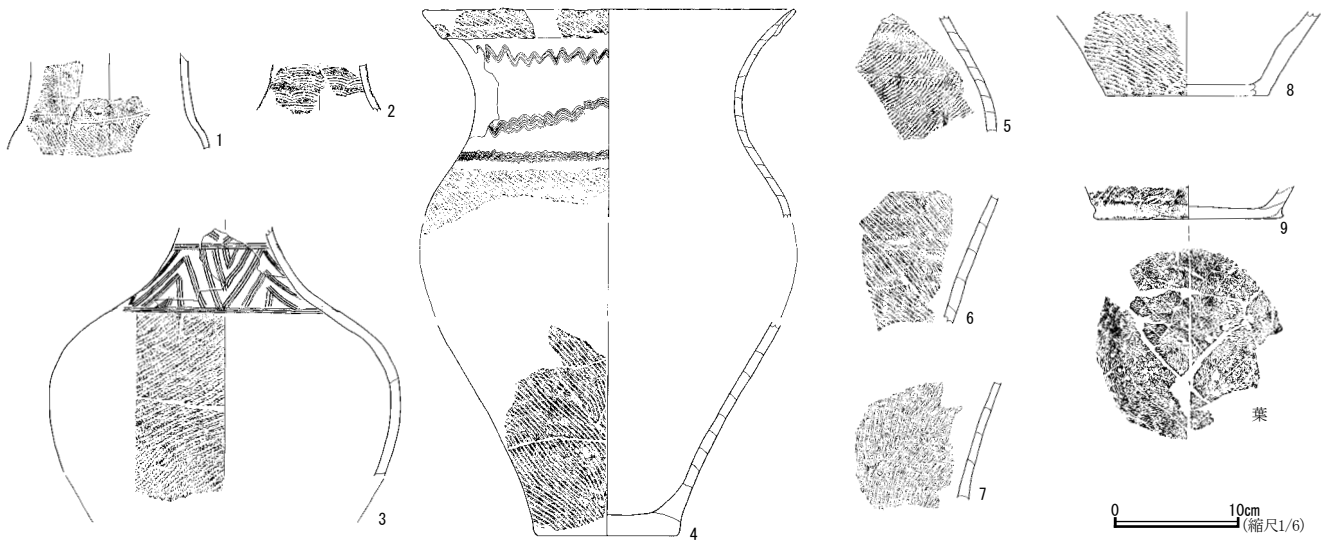


括弧内は原報告 (藤本1983) の挿図番号 0 10cm (縮尺1/6)
第 89 図 差洪 (猪Ⅲ a) 遺跡の土器 (3は藤本 1983 より引用)

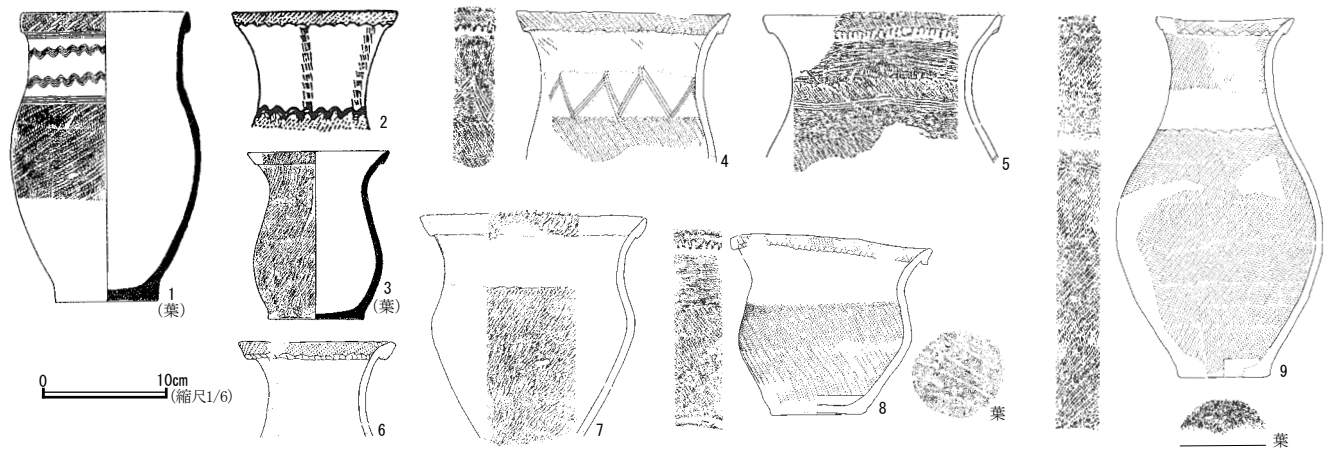
波状文 (14) が多用され、「東中根 2 式」までの連弧文の位置を波状文が占めることになる。大型壺形では、頸上部に波状文、頸下部に菱形文という構成 (6) が典型である。連弧文は、横位区画文に付属して残存する。野沢前遺跡 (井上 1968) の土器群 (上 - 第 163 図), 堂山遺跡 (藤本 1983) の一部, 大和田遺跡 (川崎 1982) Y1 号住居址 (第 75 図) も「東中根 3 式」に相当する。

「東中根 1 式」の文様構成は、福島県いわき市伊勢林前遺跡 (馬目編 1972, 馬目 1976) において設定された「伊勢林前式」に、その祖形が認められる。「伊勢林前式」は、半截竹管により平行沈線文が施文され、対向連弧文の重層 (第 85 図 1), 山形文の重層 (7) が確認できる。連弧文は中・小型壺形に、山形文は大型壺形に多用されるが、伊勢林前遺跡 A 地区第 4 号住居址には、赤彩が報告されていることから、連弧文の大型壺形もあるらしい。その「伊勢林前式」と「東中根 1 式」の間には、鷹ノ巣遺跡において「鷹ノ巣式」と呼んだ土器群が介在することが明らかとなった (鈴木 2018)。平行沈線文と 3 本櫛歯の櫛描文の土器群に、篋描沈線文と多条櫛歯の櫛描文の土器群が複合する。久慈川流域以北と推定する胎土で製作された土器が 44 ~ 49% を占めており、平行沈線文と 3 本櫛歯の櫛描文の土器群は、これも「伊勢林前式」の系統と考えられる。「伊勢林前式」では複合口縁が無文、口縁部下が縄文原体により刻まれることを典型とするのに対して、「鷹ノ巣式」では、複合口縁に縄文もあり、口縁部下が指頭で刻まれることが多い。

これらは、櫛描文の主体化とともに、複合する別系統の属性を取り込んだ変化と見られる。その「鷹ノ巣式」から「伊勢林前式」の系統が分離した土器群が「東中根 1 式」を成立させた。大和田遺跡の「東中根 1 式」に指摘した複合口縁の縄文は、「鷹ノ巣式」の名残とも表現し得る現象であろう。「鷹ノ巣式」から「東中根 2 式」に至る連弧文は、単方向上向き連弧文→対向連弧文→単方向下向き連弧文の順序で、主体となる文様構成が推移する。その連弧文が波状文に置換されることにより「東中根 3 式」が成立した。これに先んじて、縦区画を伴う充填文は、「東中根 1 式」の縦区画連弧文 (第 75 図 3) が「東中根 2 式」の縦区画波状文 (第 79 図 2, 第 86 図 11) へと変化していることを認める。一方の山形文は、頸部上下で重層する構成から、上下の山形文を一帯化した菱形文が派生し、「東中根 3 式」では、この菱形文が主体となっている。胴部の縄文は、「東中根式」を通して付加条第 1 種付加 1 条が典型である。「東中根 3 式」の清水遺跡においては、「胴部は全面にわたり撚糸文を羽状に押捺している。現在の資料 (引用註: 資料数 269 点) に関するかぎり、斜行する撚糸文、縄文は全く見られない」 (井上 1968) と報告された。東中根遺跡群における「東中根式」の縄文が突如として羽状化を遂げたことになるわけであるが、清水遺跡の資料を追認することはかなわず、今後周辺地域の遺跡から検討されなければならない課題である。



第90図 髭釜遺跡堂林地区第1号住居址の土器 (宮田 1982 より引用)



第91図 長岡遺跡 21号住居址の土器 (1～3は井上 1969・伊東 1967 より引用)

12. 本郷川流域の遺跡群と大川流域の遺跡群

平行沈線文と3本櫛歯の櫛描文の土器群、つまり「伊勢林前式」の系統が「鷹ノ巣式」から分離して「東中根1式」を成立させたとするれば、一方で、窺描沈線文と多条櫛歯の櫛描文の土器群もまた、「鷹ノ巣式」から分離することになったのではないか。館出遺跡第2号住居跡と指浜遺跡に報告された土器群は、この系統の属性を示しており、さらに、対岸の差浜(まえばら)遺跡(猪Ⅲa)遺跡(藤本 1983)にも、遺跡の形成が報告されていた。差浜(猪Ⅲa)遺跡の3点の土器(第89図)は、住居跡において共伴したものであるらしい。土器群は、「鷹ノ巣式」→「髭釜式」(鈴木正 1982, 第90図)→「長岡式」(井上 1957b, 第91図)の序列で変遷すると捉え、記述の利便のため、これらを「髭釜系」と呼んでおきたい。「髭釜系」の遺跡は、中丸川の支流、本郷川流域に立地する(第88図6～10)。対して、「東中根式」の遺跡は、中丸川から支流の大川流域にかけて立地している(第88図

1～5)。

弥生時代的那珂川下流域左岸においては、本郷川流域への遺跡の形成が逸早く、中期中葉「猪式」の差浜(猪Ⅲb)遺跡(藤本 1983, 第88図A)や前原遺跡(佐藤 1979, 第88図B)が出現している。中期後葉「足洗式」には、差浜遺跡(樫村 1995)に土壙墓群などの埋葬遺跡が形成されるとともに、土器棺墓を伴う笠谷遺跡(藤本 1983)などに居住遺跡が推定される。中期末葉「部田野山崎式」の山崎遺跡(井上 1990, 第88図C)、後期初頭「向井原式」の下原遺跡(第88図D)、指浜遺跡(E)、館出遺跡(F)と続き、後期前葉「鷹ノ巣式」の鷹ノ巣遺跡へと遺跡の形成は連なる。この本郷川流域における遺跡群の形成を継承したのが「髭釜系」であり、「東中根式」は、大川流域を新たに開拓して定着したことが看取されるのである。

「東中根式」と「髭釜系」の併行関係は、「髭釜式」の標準とされた髭釜遺跡第11・30・40号住居址のう

ち第 11・30 号の 2 基に、「東中根 3 式」が伴^{註17}う。また、髭釜遺跡堂林地区第 1 号住居址（宮田 1982）では、「髭釜式」（第 90 図 1・4）に「東中根 2 式」（2・3）が伴う。したがって、「東中根 2・3 式」の一部に「髭釜式」が併行することは確実と見られる。この前後に「鷹ノ巣式」と「長岡式」は位置する。確定は今後委ねるとしても、「東中根 1 式」は「鷹ノ巣式」に、「東中根 3 式」は「長岡式」にも概ね併行すると見ておきたい。同時期に近接して遺跡を形成しながら、東中根遺跡群における「東中根式」と「髭釜系」の交渉は、痕跡として希薄である。「髭釜系」の指洪遺跡第 1 次調査第 1 号住居址に「東中根式」の壺形（第 82 図 1）が、「東中根式」の野沢前遺跡に「髭釜系」の甕形^{註18}（上 - 第 163 図 5・13）が、それぞれ抽出されるに過ぎない。

東中根遺跡群における「髭釜系」は、鷹ノ巣遺跡（鷹ノ巣式）→指洪遺跡（鷹ノ巣式）→館出遺跡（髭釜式）→差洪遺跡（長岡式）と移動^{註19}する。一方、「東中根式」には、鷹ノ巣遺跡（鷹ノ巣式）→大和田遺跡（東中根 1 式）→堂山・笠谷遺跡（東中根 1 式）→大和田・笠谷遺跡（東中根 2 式）→野沢前・堂山・大和田遺跡（東中根 3 式）→清水遺跡（東中根 3 式）という移動が想定され、その軌跡が遺跡群を形成した。中期後葉「足洗式」からのそれではなく、後期後半「十王台式」へと連なる集落構造（鈴木 2010b・c）が既に成立していたことを認めるのである。

13. おわりに

土器型式が地域を異にして分布するのではなく、同じ地域に隣接して異なる土器型式が共存する。本稿が「東中根」の分析から到達したのは、この結論であった。鈴木正博による高野寺畑遺跡と髭釜遺跡の分析は、これを見通したものであったか。2017 年に、鷹ノ巣遺跡第 4 次調査の弥生時代の整理報告を担当し、「十王台式」で実践した分析の方法を援用した。その結果が「鷹ノ巣式」の設定であり、詳細は既に公表してある（鈴木 2018）。「鷹ノ巣式」で複合した土器型式は、ほとんど融合しないまま分離したと考えざるを得ない。鷹ノ巣遺跡で検出された第 68 号住居跡という遺構は、「伊勢林前式」の系統の移入に伴う仮設住居、つまりプレハブに例えられるような施設ではなかったかとも想像している。

このような異なる土器型式の共存が、「東中根」における特殊な現象であるのか、各地域についての検討が必要である。漠然と那珂川を境界に思い描いて、以北は「東中根式」、以南は「髭釜式」の地域という理解では、説明が困難な遺跡が報告されてきている。大洗町磐船山遺跡（井上他 1966）については那珂川に至近であるとしても、髭釜遺跡を跳び越えた銚田市明神後古墳（瓦吹他 1996）に「東中根式」が分布している。

東中根遺跡群は、「東中根 3 式」で遺跡の形成が途絶する。「十王台式」は、堂山遺跡（上 - 第 166 図）、指洪遺跡（第 81・82 図）ともに末期の「十王台式 5 期」であった。対岸の山崎遺跡、鷹ノ巣遺跡でも「十王台式 5 期」に集落跡が出現している。古墳時代を迎えるまでの期間には生活の痕跡が残されていない。那珂川下流域において「十王台式」が成立する舞台は他所にあり、それは、大洗台地の遺跡群と見て誤りないと考えている。その成立に、久慈川流域の土器群が関与することは、高野寺畑遺跡において、胎土に金雲母を含有する土器が 42%、底面痕跡の布目痕が 46%を占めることから、ほぼ想定範囲にある（鈴木 2002）。大洗台地の遺跡群について具体的な分析が課題として残されている。

鷹ノ巣遺跡及び髭釜遺跡の土器群について、挿図を省略した。直前稿（鈴木 2018）に掲載したので、これを参照いただきたい。

*註 1～6 は本稿（上）に掲載。

註 7 主軸の角度は、遺構配置図（第 73 図）ではなく各住居跡の測量図から求めた。

註 8 実測図の法量や器形は大きく異なるが、上 - 第 171 図 8・11 が第 75 図 14・15 に相当するのかもしれない。

註 9 Y4 号住居址については、「炭化糊」と記載されているが、これは脱穀した状態の「炭化米」である。調査直後の概報（川崎 1974）では、Y3 号住居址を「炭化糊」、Y4 号住居址を「炭化米」と区別しているので、Y3 号住居址は「炭化糊」であったのではないと思われる。

註 10 具体的には、報告（井上 1968）第 9 図 42 が多条櫛歯による横位の直状文と見られる。胴部の縄文は付加条第 1 種付加 2 条（L R +2 R）である。

註 11 全てが正しく笠谷遺跡の資料とは限らないことに注意が必要である。笠谷遺跡として報告された次の土器の裏面には、墨書で別な出土

地が注記されていた。Fig.30-53「金上駅北方」, 54「東北方」, 55「東中根大和田」, 56「東中根館出」, Fig.32-106・108・111「東中根大和田」。他の土器には注記がない。

註12 但し、藤本弥城が「2本同時施紋の縦位条線」と観察した土器 (Fig.30-29) は、実際には3本櫛歯の櫛描文である。

註13 報告書 (佐々木編2017) 第33図2は、本稿第79図13の土器の拓本を天地逆に貼付してしまったので、本稿で訂正する。

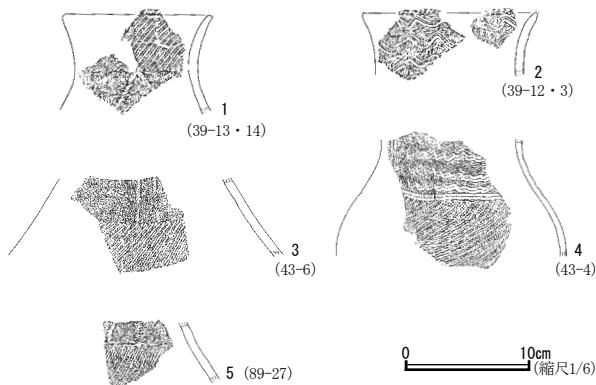
註14 報告書 (佐々木編2017) では、「平行沈線文 (先割れした半截竹管か)」と表記している。これも、本稿で訂正する。

註15 2002年1月27日いわき市考古資料館において、伊勢林前遺跡の資料について、当時に所在が確認できたものを観察させていただいた。

註16 「長岡系」という呼称は、既往の研究で使用されていることから、混乱を避けるために「髭釜系」を選択した。

註17 2017年12月14日大洗町教育委員会において、髭釜遺跡第11・30・40号住居址の土器を観察させていただいた。第11号住居址の「東中根3式」は報告書 (井上編1980) 第39図52, 55+177, 327, 342が全て同一個体で大型壺形である。第30号住居址の「東中根3式」は、82と183▽60が同一個体, 147▽50, 605▽35の3個体ともに大型壺形である。これらの胎土には全て金雲母が含まれている。なお、直前稿 (鈴木2018) は、この観察以前に脱稿したものである。

註18 野沢前遺跡の「髭釜系」の1点には縄文原体圧痕文が施されている。鷹ノ巣遺跡の「鷹ノ巣式」に特徴的な文様ではあるが、「鷹ノ巣式」に限定されるものではない。茨城県内では、水戸市松原遺跡第14号住居址 (第92図1), 勝田市 (現・ひたちなか市) 柳沢遺跡 (3), 美浦村陣屋敷遺跡第3号住居址 (5), 龍ヶ崎市屋代A遺跡第44号住居跡, 岩井市 (現・坂東市) 高崎貝塚第8号住居跡, 茨城県外では、栃木県南河内町 (現・下野市) 谷館野北遺跡D3-S1 003, 千葉県松戸市笹原遺跡1号住居址に報告されている。後期初頭から後期中葉までの時期に出現しており、縄文原体圧痕が縦位の1条であること、胴部上端に結節文が施文されることは、陣屋敷遺跡に共通している。那珂川下



1・2:松原遺跡, 3・4:柳沢遺跡, 5:陣屋敷遺跡 (括弧内は原報告 (石井他1981, 藤本1983, 黒沢・石川他1992)の挿図番号)

第92図 縄文原体圧痕文の類例

流域では、「鷹ノ巣式」以後に消失に向うと見られることから、県南部の地域からの搬入品であるのかもしれない。

註19 本稿は、旧稿 (鈴木2002) の改訂にも相当する。指洗遺跡第1次調査第1号住居址の土器群について、旧稿の所見を訂正しておきたい。

参考文献 *本稿 (上) に掲載済の文献は除く。

石井 毅他 1981 『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書』 (財団XI) 茨城県教育財団

伊東重敏 1967 「茨城の弥生式土器—その1— 一十王台式土器成立に関する試論—」『ひたちじ』No.5 3-7頁

伊東重敏 1974 『向井原発掘調査報告書』水戸市文化財調査報告 SITE No.4273・4261・4231 水戸市教育委員会

伊東重敏 1976 『大六天古墳 (森戸古墳群第12号墳)』常澄村文化財調査報告第1集 常澄村教育委員会

稲田健一編 2016 『十五郎穴横穴墓群 一東日本最大級の横穴墓群の調査—』 (公社第42集) ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

井上義安 1956 「常陸足洗遺跡発見の弥生式甕棺」『古代』第19・20合併号 36-39頁

井上義安 1957b 「茨城県長岡遺跡の弥生式土器 (予報)」『史想』第7号 13-19頁

井上義安 1959 「北茨城市足洗における甕棺調査の概報」『古代』第32号 13-27頁

井上義安 1969 「東茨城郡茨城町長岡遺跡の土器」『茨城県弥生式土器集成』I 茨城県弥生式土器集成グループ 1-9頁

井上義安編 1980 『髭釜 鹿島線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』大洗地区遺跡発掘調査会

井上義安 1990 『那珂湊市部田野山崎遺跡 山崎工業団地土地地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘記録』那珂湊市山崎遺跡群発掘調査会

井上義安 1994 『那珂湊市鷹ノ巣遺跡』那珂湊市鷹ノ巣遺跡発掘調査会

色川順子 2006 「那珂川下流域における弥生時代後期初頭の土器群—「向井原式土器」の設定—」『茨城県考古学協会誌』第18号 61-80頁

色川順子 2008 「弥生～古墳時代前期の遺物」『鷹ノ巣 一第2次調査の成果—』 (公社第37集) ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社 9-62頁

色川順子 2013 「弥生時代の遺物」『鷹ノ巣II 一第2・3次調査の成果—』 (公社第41集) ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社 23-27頁

海老澤稔 1996 「弥生時代後期の関東地方東部 (茨城)」『弥生人のくらし 一卑弥呼の時代の北関東—』栃木県立なす風土記の丘資料館 第4回企画展 栃木県教育委員会 48-50頁

海老澤稔 2000 「茨城県における弥生後期の土器編年」『東日本弥生後期の土器編年』第9回東日本埋蔵文化財研究会 東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会 758-792頁

樫村宣行 1995 『一般国道6号東水戸道路改築工事地内埋蔵文化財調査報告書III 差洗遺跡』 (財団第108集) 茨城県教育財団

川崎純徳 1966 「所謂「東中根式土器」について」『社会部報』7号
石岡第一高校社会部 25-29頁

瓦吹 堅他 1996 『明神後古墳』茨城県鉾田町文化財調査報告書第7
輯 鉾田町教育委員会・明神後古墳発掘調査会

黒沢 浩・石川日出志他 1992 『陣屋敷遺跡』陸平研究所報告1 美浦
村・陸平調査会

小林三郎 1978 「墳丘と周堀の調査」『勝田市史 別編I 虎塚壁画古
墳』勝田市史編さん委員会 23-50頁

佐々木義則編 2017 『平成28年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告
書』ひたちなか市教育委員会

佐藤次男 1979 「前原遺跡」『勝田市史 別編II 考古資料編』勝田市
136-137頁

鈴木正博 1979 「高野寺畑の弥生式土器について」『高野寺畑遺跡発掘
調査報告書』勝田市教育委員会 151-162頁

鈴木正博 1982 「「髭釜」研究抄」『婆良岐考古』第4号 15-26頁

鈴木素行 2002 「仙湖の辺 —「武田式」以前の「十王台式」について—
『茨城県史研究』第86号 1-25頁

鈴木素行 2010b 「続・部田野のオオツタノハ —茨城県域における弥
生時代「再葬墓後」の墓制について—」『古代』第123号 1-51頁

鈴木素行 2010c 「弥生時代後期「十王台式」の集落構造 —大戸遺跡
群の分析を基礎として—」『武田遺跡群 総括・補遺編』（公社第40
集）ひたちなか市文化・スポーツ振興公社 47-91頁

鈴木素行 2017 「天か地か —茨城県域における弥生時代の土製蓋—
『茨城県考古学協会誌』第29号 37-58頁

鈴木素行 2018 「鷹ノ巣遺跡における弥生時代後期前半の土器群につ
いて —「鷹ノ巣式土器」の設定—」『鷹ノ巣Ⅲ —第4次調査の
成果—』（公社第43集）ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社
23-34頁

住谷光男 1982 『勝田市埋蔵文化財分布調査報告書 昭和56年度版』
勝田市教育委員会

早川章次・井上義安 1972 「磐船山式土器の新資料」『那珂川の先史遺
跡』第1集（改訂増補版）28-30頁

松本友延他 1994 『上ノ内遺跡 —縄文時代から平安時代の集落跡の
調査—』（市第38冊）いわき市教育委員会

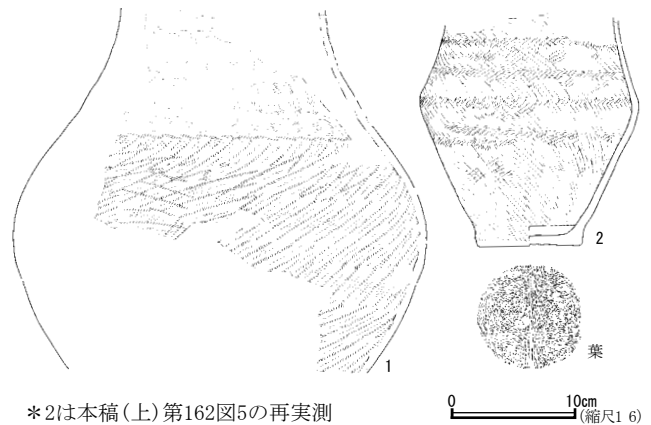
馬目順一編 1972 『伊勢林前遺跡 —古代集落址の調査—』（市第1冊）
いわき市教育委員会

馬目順一 1976 『伊勢林前遺跡B地区 —弥生時代土坑の調査—』（市
第3冊）いわき市教育委員会

宮田 毅 1982 「堂林第1号住居址の概要」『溜沼手帳』6 20-26頁

山内清男 1939 『日本先史土器図譜』第1輯

本稿（上）の発表後に所在が確認できた大和田遺跡の土器が2点ある。
本来は上-第172図に掲載すべき資料であったが、末尾に実測図を追加
することにした。1の縦区画充填文は、これも「メガネ文」と呼ばれて
いた文様らしく、連弧文が向き合せて施文されている。Y5号住居址の紡
錘車と共通した文様である。「東中根1式」に位置付けられよう。2の胴
部には、rをS巻きした原体（軸縄不明）が縦回転で施文された後、結
節文と、これに伴う無節斜縄文Lが部分的に施文されて、羽状縄文のよ
うに見える。櫛歯状工具の歯数は3本。



*2は本稿(上)第162図5の再実測

第93図 大和田遺跡の土器(5)

追記

東中根遺跡群における弥生時代後期「東中根式」の集落跡について(上) 正誤表

箇所	誤	正
89頁 第159図	6. 東中根館出遺跡	6. 東中根館出遺跡
98頁 左段25行目	—岩船山式土器の研究—	—磐船山式土器の研究—
98頁 右段6行目	川崎純徳他 1982	川崎純徳 1982



1 宮前遺跡第3次調査区



2 雷土B遺跡第2次調査区



3 三反田遺跡第6次調査区



4 指波遺跡第3次調査区A区



5 指波遺跡第3次調査区A区1号溝跡



6 指波遺跡第3次調査区B区



7 指波遺跡第3次調査区B区5号住居跡遺物出土状況

図版2 試掘調査(2)



8 虎塚古墳群第11次調査区A区



11 下原遺跡第4次調査区



12 下原遺跡第4次調査区1号土坑



9 虎塚古墳群第11次調査区A区(虎塚5号墳)



13 君ヶ台遺跡第11次調査区



10 虎塚古墳群第11次調査区B区



14 赤坂遺跡第3次調査区



15 高野富士山遺跡第9次調査区



20 野沢前遺跡第2次調査区



16 高野富士山遺跡第10次調査区



21 柴田遺跡第5次調査区



17 市毛上坪遺跡第17次調査区



22 金上向山遺跡第3次調査区



18 市毛上坪遺跡第18次調査区



23 市毛下坪遺跡第13次調査区



19 本郷東遺跡第6次調査区



24 黒袴遺跡第6次調査区

図版4 試掘調査(4)



25 本郷西遺跡第1次調査区



29 三反田古墳群第2次調査区5トレンチ



26 三反田古墳群第2次調査区



30 三反田古墳群第2次調査区5トレンチ周溝



27 三反田古墳群第2次調査区1トレンチ



28 三反田古墳群第2次調査区2トレンチ



31 三反田古墳群第2次調査区7トレンチ



32 宿ノ内遺跡第4次, 西中根遺跡第4次調査区



36 勝倉若宮遺跡第5次調査区第1号住居跡竈粘土



33 勝倉若宮遺跡第5次調査区遠景



37 勝倉若宮遺跡第5次調査区第1号住居跡遺物出土状況



34 勝倉若宮遺跡第5次調査区



38 勝倉若宮遺跡第5次調査区第1号住居跡掘形



35 勝倉若宮遺跡第5次調査区第1号住居跡



39 勝倉若宮遺跡第5次調査区第2号住居跡, 第1号土坑

報告書抄録

フリガナ	ヘイセイニジュウクネンドヒタチナカシナイイセキハクツツチヨウサホウコクシヨ
書名	平成 29 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
編集者名	佐々木義則
著者名	鈴木素行, 稲田健一, 佐々木義則
編集機関	公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社文化課文化財調査事務所
編集機関所在地	茨城県ひたちなか市大字中根 3499 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター内
発行機関	ひたちなか市教育委員会
発行機関所在地	茨城県ひたちなか市東石川 2 丁目 10 番 1 号
発行年	2018 年 3 月 14 日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	標高	調査期間	面積	備考
		市町村	遺跡番号						
ミヤマエ 宮前	ひたちなか市 中根	08221	100	36° 22' 58"	140° 33' 1"	23.2m	201701	23 m ²	
イカズチビー 雷土 B	ひたちなか市 田彦	08221	165	36° 24' 43"	140° 31' 9"	27.0m	201703	22 m ²	
ミタンダ 三反田	ひたちなか市 三反田	08221	038	36° 21' 55"	140° 33' 19"	21.2m	201703	48 m ²	
サシブ 指渡 シモハラ 下原 トラツカコフンゲン 虎塚古墳群	ひたちなか市 中根	08221	074 103 023	36° 22' 18" 36° 22' 34" 36° 22' 30"	140° 34' 8" 140° 34' 9" 140° 34' 8"	20.9m 22.0m 21.5m	201612 ~ 201703	1,524 m ²	
キミガダイ 君ヶ台	ひたちなか市 中根	08221	011	36° 23' 15"	140° 33' 31"	24.3m	201704	48 m ²	
アカサカ 赤坂	ひたちなか市 鶴代	08221	227	36° 21' 30"	140° 35' 53"	25.7m	201704	22 m ²	
コウヤフジヤマ 高野富士山	ひたちなか市 高野	08221	062	36° 25' 40" 36° 25' 51"	140° 33' 10" 140° 33' 21"	31.5m 30.6m	201704 201711	26 m ² 334 m ²	
イチゲカミツボ 市毛上坪	ひたちなか市 市毛	08221	131	36° 23' 53" 36° 23' 49"	140° 30' 13" 140° 29' 59"	27.9m 27.5m	201705 ~ 201706 201711	34 m ² 16 m ²	
カツクラワカミヤ 勝倉若宮	ひたちなか市 勝倉	08221	120	36° 22' 39"	140° 32' 0"	22.3m	201705 ~ 201706	63 m ²	
ホンゴウヒガシ 本郷東	ひたちなか市 馬渡	08221	070	36° 23' 15"	140° 34' 16"	29.6m	201706	19 m ²	
ノザワマエ 野沢前	ひたちなか市 中根	08221	012	36° 22' 49"	140° 33' 33"	22.4m	201707	17 m ²	
シバタ 柴田	ひたちなか市 中根	08221	101	36° 23' 4"	140° 32' 55"	22.5m	201708	80 m ²	
オカダ 岡田	ひたちなか市 三反田	08221	039	36° 22' 12"	140° 32' 39"	19.5m	201708	3 m ²	
カネアゲムカイヤマ 金上向山	ひたちなか市 三反田	08221	116	36° 22' 15"	140° 32' 28"	21.7m	201709	109 m ²	
イチゲシモツボ 市毛下坪	ひたちなか市 市毛	08221	130	36° 23' 33"	140° 30' 17"	26.6m	201709 ~ 201710	46 m ²	
クロバカマ 黒袴	ひたちなか市 津田	08221	007	36° 24' 23"	140° 29' 5"	27.1m	201710	16 m ²	
ホンゴウニシ 本郷西	ひたちなか市 馬渡	08221	008	36° 23' 33"	140° 34' 5"	25.8m	201711	34 m ²	
ミタンダコフンゲン 三反田古墳群	ひたちなか市 三反田	08221	018	36° 21' 52"	140° 33' 33"	19.0 m	201712	33 m ²	
シュクノウチ 宿ノ内 ニシナカネ 西中根	ひたちなか市 中根	08221	097 014	36° 22' 48"	140° 32' 44"	23.0m	201712	38 m ²	

平成 29 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書

平成 30 (2018) 年 3 月 14 日発行

編 集 公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

発 行 ひたちなか市教育委員会

〒 312-8501 茨城県ひたちなか市東石川 2 丁目 10 番 1 号

TEL 029-273-0111

公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

〒 312-0011 茨城県ひたちなか市中根 3499

TEL 029-276-8311

印 刷 弘美印刷株式会社

〒 312-0062 茨城県ひたちなか市高場 2577-1



再生紙及び植物油インクを
使用しています。